

天才と魔法科 —相性悪そうな組み合わせほど実はベストマッチが多い件—

ジューク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

事故によって死を遂げた特撮が趣味の高校生、『機丈龍兔^{きじょうりゅうと}』。

そんな彼が神様から貰ったのは、憧れの仮面ライダー、それも三つの世界の力だった!?

しかし、彼は知らなかった。

自身が巻き込まれるデンジャラス過ぎる事件の数々を――

これは、そんな少年の描く、最高の物語である。

※アンケートは基本、主がしたいと考えている案が一番上です。

※本作で使っている必殺技などは主完全オリジナルのフリー素材です。誤字報告のページからコピー、使用しても構いませんが、その際は「この作品のここに使いました」とDM入れてくださると嬉しいです。

目次

第0話	永遠と忘却のチュートリアル	1
第1話	『設立、『Rインテリジェンス』！／運命の出会い』	7
第2話	『参上！二人で一人の名探偵（？）』	20
入学編		
第3話	『天才とトラブル（天災）は紙一重って言うけど実際どうな んだろうね』	29
第4話	『坂道で林檎とか落とすとどんどん転がってって手がつけ られなくなるよね』	44
第5話	『面倒事って一回起きると迷惑メール並みに立て続けに やって来るよね』	54
第6話	『バトル要素あるラブコメかその逆って少なくとも一人は めちやくちや強いけど生活力皆無な美少女いるよね』	65
第7話	『逆光とかで素顔分らない奴が変身するとかっこよき二 割ぐらい増すよね』	77
第8話	『塵も積もれば山となるって言うけど塵の山は要らないよ ね』	87
第9話	『狂信的なテロリスト集団とかのボスって大抵ろくな人い ないよね』	90
第10話	『バトルシーンで強敵と戦う時って大抵強化フォームとか 最終フォームがなぜか使えるようになるよね』	100
九校戦編		
第11話	『他校と一緒にする体育大会とか憧れるよね』	110

第12話 『校外学習とかで遅刻するとすっごい悪目立ちするよ
ね』 119

第13話 『立場で人を見下すキャラって大抵噛ませ役だよ
ね』 127

第14話 『天は二物を与えずとか言うけど全然そんなことないよ
ね』 132

第15話 『偶然入った店で友達とバッタリ会うと緊張するよね』 140

第16話 『新しいものって思いつくとどンドン意欲湧くよね』 150

第17話 『怪我した人の後を背負って戦うってカッコいいよね』 158

第18話 『肝心な時に限って身体が不調な時ってあるよね』 173

横浜騒乱編

第19話 『天才からの贈り物』 184

第20話 『なぜ彼女は生徒会長を断るのか』 192

第21話 『論・文・大・会』 201

第22話 『ガスと収監所と謎の虎』 209

第23話 『Dの襲撃／白い悪魔』 217

第24話 『反撃！ライダーと災害の引鉄（ハザードトリガー）』 226

第25話 『乱戦！仮面戦士！』 236

第26話 『騒乱終結2095』 246

来訪者編

第27話	『なぜ彼女は留学してきたのか』	256
第28話	『新・年・開・幕』	262
第29話	『事実と対峙と吸血鬼』	270
第30話	『少年、そして鬼面の少女』	278
第31話	『現場と戦友（とも）と総隊長』	287
第32話	『対決！氷結！完全無欠！』	297
第33話	『怪奇吸血鬼』	307
第34話	『Pの覚醒／少女の心』	314

第0話 永遠と忘却のチュートリアル

「……………」

目を覚ました少年は絶句していた。なぜなら…

「……………本ツ当にすまない…………!!」

お爺さんが全力土下座していたからである。

「……………えと、何これ？新手のドツキリ？」

「ドツキリではない。君は死んでしまった」

「……………マ？」

「証拠がある…」 スツ

「……………あ」

お爺さん―本人曰く『神様』―が手を促すと、ホログラムのように映像が現れる。そこにはトレーラーの前に横たわる少年とトレーラーの真横で泣き叫ぶ子供がいた。

「……………あの」

「何かな？」

「……………あの子供、無事ですすよね？」

「……………ああ。君が助けたあの子供は、将来戦争を無くした日本首相としてノーベル平和賞を受賞するほどに大成したよ」

「……………そっか。なら良かった」

「…なぜじゃ？君は死んでしまったのじゃぞ？」

「……アンタが神様なら、俺が特撮好きなの知ってるでしょ？」

「?ああ……」

『仮面ライダーオーズ』の中で言っていました。

『楽して助かる命が無いのは何処も一緒だ』と。

俺の命で、結果的に何万近い命が助かったんでしょ?なら、それは本望ですよ」

「……………そうか。よし、決めたわい」

「？」

「君、ライダーの力を持って転生するというのはどうかのう?」

「……え?」

「君への謝罪と、心への敬意としてじゃ。ただ、オーマジオウは流石に無理なので、今から言うライダーの力を与えよう」

「どのライダーですか?」

「人に創られたライダーは知つとるかね?」

「そりやあまあ。そもそも昭和の一号なんて元はショッカーが生み出した改造人間だし、平成ならダブル、オーズ、フォーゼ、エグゼイド、ビルドってところですかね?ダブル、フォーゼ、ビルドは言わずもがなだし、オーズなんて八百年前の錬金術師?が創ったし、エグゼイドもシステムは自称神が創ったものだし」

「うむ。君には、今言った中のダブル、ビルドの平成ライダーにゼロワンを足した、計三つの世界のライダーの力を与えるつもりじゃ。『世界』じゃから二号ライダー、ダークライダー、疑似ライダーも入るぞ。鎧武はヘルヘイムの森が要るし、ジオウやゴーストは……アレじゃからのう」

「なるほど。そういや、どこの世界ですか?」

「それなんじゃが、君が今から行くのは『魔法科高校の劣等生』の世界じゃ」

「……………あゝ、なんか聞いたことありますね。」

「さすおに?がなんか流行ったような……………」

「……………具体的には?」

「なんか科学の魔法みたいな使うってのは知ってますけど、ほとん

ど知らないですね…」

「…：…なら記憶を消さんでも大丈夫じゃな。では早速じゃが、えくと、たしかここら辺に…」ガサゴソ

神様は、後ろの籠のような何かをぐそぐそとまさぐり、二つのアイテムを出した。

「ほい」コトリ

「?…：…これって、なんで!!?」

「なんでって、見ての通り『ロストドライバー』に、『エターナル』のメモリじゃが?」

「いやいやそれは知ってますよ!なんで?」

「まあ、所謂チュートリアルじゃな。君には今から、劣等生の世界に行つてある人物を助けて貰う。その二つのアイテムでな。それが終わったら転生じゃ」

「…分かりました」

「うむ。では…：…ぬんっ!!!」

神様が手を翳すと、少年は光となって消えた。

「…：…頼むぞ」

?????????

バシユンツ!!

「スタッ!と着地成功…：…うわ、暗っ」

少年が飛ばされた先は、何かの研究所のような施設だった。中は暗

く、怪しい装置がそこら中にある。

「……………さて「いやっ！離して!!」!？」

少年が振り向くと、手術室のような部屋があつた。ドアは半分空いており、台には一人の少女が乗せられている。

「状況把握。……………おいお前ら、何してる！」

『!?』ジャキツ!!

台の周りの男たちは一斉に銃を構えた。

「貴様、何者だ！どこから入った!!？」

「お前たちに死を与える死神の名か？」ガチャリ！

手に持った赤い装置——『ロストドライバー』

を腰に当てて装着した少年は白いUSBメモリ——

『エターナル』のガイアメモリを持って言う。

【ETERNAL】

「俺の名は『機丈龍兔』。それだけだ」

そう言うと少年——機丈龍兔はメモリをロストドライバーに装填してドライバーを倒した。すると白い破片のような物が龍兔に纏わりつく。

【ETERNAL!!】

龍兔は三又槍のような頭部に白を基調とし、蒼いグローブを着け、黒いマントを羽織った黄色い複眼の戦士——永遠の名を冠する闇の

戦士である

『仮面ライダーエターナル』へと変身した。

西暦2062年、この大亜連合の地に、仮面ライダーが降り立った瞬間である。

「な、なんだそれは!!!?」

「……………さア、地獄を楽しみなッ!!」

エターナルへと変身した龍兎は単身敵に向かって駆け出した。

??????????

「……………つまらんな」ドサリ

今まで戦っていた男たちの山にまた一人仲間入りさせた龍兎は少女を持っていたナイフ——専用武器の『エターナルエッジ』で解放する。

「大丈夫か？」バキン!

「は、はい……………」

「一応聞くんが、お前の名は？」

「……………真夜……………四葉真夜です」

「……………そうか……………ん？騒がしいな。新手か？」

龍兎が少女——真夜と話していると、なにやら大きな音が近づいてくる。

「……………下がっておけ。奴らの仲間かもしれん」

「はい……………」

そして構えた瞬間、ドアが勢いよく破壊された。

「……………真夜！」

「お父様!!？」

「…家族か？」

「貴様！娘に何をした!？」

「いや、何も？」

「くく!!ふざけるなあ!!!」キイイン！

「すまないが、アンタたちにやあやられたくないもんなんでね。失礼するよ」スツ

【LUNA】

神秘のガイアメモリの力で幻影をその場に数秒留め、龍兎は施設の壁を破壊して外に出た。

「……………任務完了『ご苦労じゃった。見ていたが大丈夫そうじゃな。少し待つとれ。転生させる』え?いやここでやるんです——」

そして光と共に、少年は17年後の未来へと転送された。

第1話 『設立、『Rインテリジェンス』！／運命の出会い』

意外と年月が経つのは早いもんだ。

CAD会社の社長である『機丈龍誠』と元魔法師で今は専業主婦の『機丈兎瑠』との間に生まれた俺はすぐにかなり高い魔法の資質を出した。

『魔法』とは言っても呪文唱えてライトニング！みたいな簡単なモンじゃあない。

『^{サイオン}想子』とかいう物質を脳内の『魔法演算領域』というまだまだ未解明な箇所に変数処理して……まあ、要約すると人の脳をコンピュータみたいに使って『事象改変』を実行する現象の総称だ。

そして十歳になり、俺は早速ライダーシステムの開発に着手した。

そして完成したアイテムを見た親父たちは最初こそビビったが、やがて天才だと誉めてくれた。

そして俺と親父は協力してライダーシステムを搭載したCADの開発に成功した。

そんなこんなで新たに設立された俺たちの会社が『Rインテリジェンス』だ。Rは無論^{Rider}ライダーから取っている。

完成したCADはそれを使うライダーから『Rシステム・バルカン』と名付けた。見た目はまあ完全にショットライザーだが。そののグリップにストレージを装填できるようにして

ある、CADの用語で言う特化型だ。

無論、プログライズキーもつくつてある。一応ゼツメライズキーやフォースライザー、ゼロワンドライバーや各種武器も完成した。

ちなみに、性能は市販用、軍用と性能を分けている。まあ、バルカ
ンで構成された強盗団なんて見たくもないからな。そして技術漏洩
を防ぐ目的でシステムを魔法的、物理的、機械的の三重で防御してい
る。認証オーソライズシステムもある上に本格的に変身戦闘が可能な軍用は買
う前の特別な審査が必要で、更には市販、軍用共に国外持ち出しと禁
止という念の入れようだ。

ちなみに、市販用のライダーシステムは変身こそできるものの、そ
こそこの防弾防刃機能と多少の身体能力向上程度だが、軍用は筋力増
強や動きのサポートなど、市販用とは天と地の差がある。

ちなみに、俺の物は所謂『フルチューン』仕様である。簡単に言う
と原作とまったく同じ強さだということだ。勿論ショットライザー
だけではなくフォースライザー、ゼロワンドライバーもだ。

そしてこのフルチューンモデルには、俺のみが知るとんでもない
システムが搭載されている。

それこそが、『ANTI MAGIC SYSTEM』。

文字通り魔法を完全に無効化する、現代においてチートのシステム
だ。ライダーシステム開発のため、桐生戦兎をも超える頭脳を持った
俺だからこそこんなぶつ壊れシステムを完成させてしまったのだ。
無論このことだけは親にも話していない。

神様が言っていた、主人公の使う『分解』とて例外ではない。シス
テムを分解しようとしても、そもそもその魔法を寄せ付けないから
だ。

三年後、Rインテリジェンス社地下実験施設…

「……………さて、いくぜ」スツ

【BULLET!!】

【AUTHORISE^{認証完了}】

【KAMEN:RIDER:KAMEN:RIDER:KAMEN:RIDER:KAMEN:RIDER:KAMEN:RIDER:KAMEN:RIDER:】

プログライズキーのスイッチを押して展開し、ショットライザーに差し込むと待機音が流れる。そのまま龍兎はベルトからショットライザーを引き抜き、トリガーを引いた。

「変身!!」

【SHOTRISE!!】

「おっらあ!!!」バキーン!

【シューティングウルフ!】

【The^{弾丸} elevation^{が増} increases^{たれ} the^{射角} bullet^は is^大 fired^す.^る】

蛇行する弾丸を砕くと周りに装置が展開され、蒸気を吹き出しながら龍兎を覆うアーマーとスーツになった。

「……………問題無いよ」

『そうか、ご苦労だった。』DRATTO』』

「出発前の最終調整完了だね」

なぜわざわざ社の施設でショットライザーの調整をしていたかという、他社との打ち合わせで行けない父の代わりに沖縄の『独立魔装大隊』にショットライザーとプログライズキーの納入に行くためだ。どうしても予定が合わないのかもしれないだろう。

ちなみに、『DRATTO』とは龍兎のビジネスネームだ。未成年であることと、ライダーシステムを狙う連中から身を守るためでもある。由来は龍と兎から取っている。

「さて、そいじゃサクツと行ってくるよ」

「ああ。お土産はミミガーを頼む。あのちよつとした辛さがたまらないんだ」

「あいよ」シユウウ…

変身を解除した龍兎は認証オートライズシステムを搭載したアタツシユケースにショットライザーを入れ、ロックを掛けて家に帰り出立の準備をした。

しかし彼は数日後、大きな事件に、そして己の人生を大きく分ける人物と偶然の会合を果たす。

?????????

軍の飛行機が沖縄に到着し、龍兎は早速飛行機からショットライザーとプログライズキーが入ったコンテナが下ろされる現場にいた。

「……………うん、数に誤差無し。上々だな」

「……………君が代表者かい？」

「?えつと、失礼ですが…」

「あつとすまない。独立魔装大隊の風間春信だ」

「!貴方が風間大尉でしたか。僕は父の代理で来ました、機丈龍兎と申します。今回は我々RインテリジェンスのRシステム・バルカンのご購入ありがとうございます」ペコリ

「ちなみに、年はいくつだい？」

「今年で十三ですが？」

「…その若さで礼儀正しいね。今後ともよろしく頼むよ」スツ

「……………こちらこそ、今後ともご贖員に」パシツ

話しかけてきた男性——今回の取引先である風間と龍兎は握手を交わした。

?????????

数分後、龍兎は国防軍の基地にてこれからの納入、用途に関する話を風間としていた。

「……………とまあ、今回はこのぐらいですかね？」

「うむ。しかし、改めてこのRシステム・バルカンとは素晴らしいな。君も着手したのかい？」

「ええまあ」

「…ほう。是非その時の話を詳しく聞かせ——」

風間が龍兎に話しかけた、その時。

「大変です!!!」バンツ!

「!?!?」

「大亜連合が沖縄に侵攻！現在交戦中です!!」

「なんだと!?警報は!!」

「既に発令しています!」

「ならすぐに戦闘準備を整え急行させろ!!」

「はっ!!」

「:龍兎君。すまないが、今すぐにシエルターに避難してくれたまえ。ここも安全とは言えん」

「:お言葉に甘えさせていただきます」

そして部下の案内の下、龍兎は一路シエルターの待機室に向かった。

?????????

「:.....まったく、一応フルチューンのショットライザーとプログライズキーを持ってきておいて正解だったな。不幸中の幸い、か:」

龍兎は、待機室内でショットライザーの調整を行っていた。沖縄に来る前に終わらせたとはいえ、不安が少しあったからだ。周りには家族連れだろうか。自分と同じ年ほどの少女と親、お付きらしい女性もいる。他にも数人の一般人がこの部屋にいた。と、銃声以外になんやらドタドタと複数の足音がしてきた。とつさに龍兎は腰にセットしていたショットライザーを抜いて構える。

「失礼します!空挺第二中隊の金城一等兵であります!」

しかし、如何やら基地の兵隊が迎えに来てくれたようだ。龍兎は安心したようにショットライザーを下ろし、すぐにこっそりと構え直す。

開かれたドアの向こうにいたのは四人の若い兵隊だったが、全員が沖繩に残ったアメリカ兵の血縁である「レフト・ブラッド」の二世のようだ。しかし、この基地はそういう土地柄なのだろうが、それに對して特には気にならなかつた。

「皆さんを地下シェルターにご案内します。ついてきてください」

予想通りのセリフだったが、龍兎は躊躇わずにはいられなかつた。なにやら、言葉の端々に嫌な雰囲気をかき分けたからだ。

「すみません、連れが一人外の様子を見に行っておりまして」

龍兎が怪しんでいると、一人の女性が立って金城一等兵と名乗った兵士にそう言った。と、一等兵は難しい顔をする。

「しかし既に敵の一部が基地の奥深くに侵入しております。ここにいるのは危険です」

「では、あちらの方々だけ先にお連れくださいな。息子を見捨てて行くわけには参りませんので」

「しかし……」

「(……おそらく、この人も勘づいたんだ。コイツらの得体のしれない違和感に)」

女性の提案に金城一等兵が難色を示したが、部屋にいた他の男性は早く避難したいようで一等兵に詰め寄っている。その隙をついたのだろうか、女性たちは小声でなにやら相談し始めた。龍兎はこっそりと聞き耳を立てる。

「……では？」

「勘よ」

「勘、ですか？」

「ええ。この人たちを信用すべきではないという魔法師としての直感ね」

「(…やっぱり)」

龍兎は確信した。この女性も気づいたと。

「申し訳ありませんが、やはりこの部屋に皆さんを残しておくわけには参りません。お連れの方は責任を持って我々がご案内しますので、ご一緒について来て下さい」

「(……………確定だな。コイツら…………)」

四人が相談を終えて龍兎に言葉をかける。言葉遣いはさつきと変わらないが、脅しつけるような態度になっていると感じたのは龍兎のみだろう。

そんな事を考えていると、新たな登場人物がこの一幕に急展開をもたらした。

「ディック！」

「っ!!」バァン!

「っ!やは——っ!まさか、キャスト・ジャミング!?どうしてんなモンを!!」

金城一等兵が声の主である兵士に対していきなり発砲した。それを合図に一等兵の仲間が室内に銃口を向ける。後ろの女性が起動式を展開したが、頭の中でガラスを引っ掻いたような騒音が魔法式の構築を妨害する。龍兎はアンチ・マジック・システムでなんともないが、周りの女性たちは苦しんでいる。

「ディック!アル!マーク!ベン!何故だっ?何故軍を裏切った!」

狙われた兵士の怒鳴り声が聞こえた。どうやら弾は全弾外れたようだ。

「ジョー、お前こそ何故日本に義理立てする！」

「狂ったかデイック！日本は俺たちの祖国じゃないか！」

「祖国だど!?日本が俺たちを如何扱った!こうして軍に志願して、日本の為に働いても、結局俺たちは『レフト・ブラッド』じゃないか!俺たちは何時まで経っても余所者扱いだ!」

「違う!それはお前の思い込みだ!俺たちの片親は間違いなく余所者だったんだ。何代も前からここで暮らしている連中にすれば、少しくらい余所者扱いされて当たり前だ!それでも軍は!部隊は!上官も同僚も皆、俺たちを戦友として遇してくれる!仲間として受け容れてくれている!」

「ジョー!それはお前が魔法師だからだ!お前には魔法師としての利用価値があるから軍はお前に良い顔を見せるんだ!」

「デイック、お前がそんな事を言うのか? レフト・ブラッドだから余所者扱いされると憤るお前が、俺が魔法師だから、俺はお前たちと別の存在だと言うのか? 俺は仲間ではないと言うのか、デイック!」

と、キャスト・ジャミングが弱まり、龍兎はゆつくりと立ち上がる。

「……感動のシーン、かどうかは知らんが、なぜ俺たちを狙うんだ?意味がわからん。仲間割れなら他所でやってほしいんだが」

「黙れ!!お前らは大亜連合に連れていく人質!おとなしくしろ!!!」
ジャキツ!

「……………そうか。よかったよ」 スッ

【POWER!!】

「そんな小道具が効くかつ！」ガギギギギン！
「っ!!ありえごふああっ!!」

龍兎は瞬く間に四人の裏切り者のうち三人を戦闘不能にし、残りの一人に向き合った。

「ひいつ!!?」

「俺たちを拐おうとしたんだ。当然、覚悟はできてるよな?」

「た、助け…」

「断る。他の罪無き人々を傷つけたお前を許す道理も、義理もない!!」

【POWER!!】

「オオオオオオオオオオ
!!!!!!」

パ

ワ

ー

パンチングブラスト

最後の兵士は龍兎の放ったガントレットの一撃で、悲鳴も聞こえぬ速さで壁を貫通し、空の彼方に消えていった。

「……………随分とあっけなかつたな…ん?」

と、なにやらまた足跡が聞こえてきた。また奴らの仲間かと思いつく構えだが、入ってきたのは同年代ほどの少年だった。

「……………お前は?」

「深雪!!」

「……………お兄様!」

「……………兄妹、か?」シュウウ…

拍子抜けしたのか、龍兎は変身を解除した。

「……………!!」カチッ!

と、少年は奥で倒れていた母親とお付きの女性にCADを向け、トリガーを引いた。すると、女性たちは何もなかったように立ち上がる。

「……………あの」

「？」

「妹を助けてくださりありがとうございます」

「……………君」

「!私、ですか？」

「……………良いお兄さんを持ったね」

「!……………はい!!」

「うん。さてと、僕はそろそろ行くよ。君たちも気をつけて」スッ

龍兎はそう言い残して外に向かった。

?????????

あの後、外である程度兵士たちと戦っていると、突然撤退を始めた。その直前に何か光球のような物が見えたので、それが原因だろう。ひとまず事後処理は軍に任せ、父へのお土産を買った龍兎は飛行機で本州に向かっていた。

「(取り敢えず、次に作るのはアイツだな)」

そんな中でもRシステムのことを考えている辺り、もはや職業病とすら言えるかもしれない。

?????????

——…数年後、機道家……

「……………よしっ！完成だ!!」

龍兎は一人、自室に籠ってあるアイテムの開発をちょうど終わらせた。

その机には、正面に二つ、右に一つある何かの赤い装填口が付いた装置と黒、緑、銀、赤、青、黄色の六つのUSBメモリが置いてあった。

第2話 『参上！二人で一人の名探偵（？）』

「——とうとう完成したぜ、ダブルドライバーとガイアメモリ!!」ガチャリ！

先ほど完成させた装置——ダブルドライバーを高々と掲げて龍兎は叫んだ。

無理はない。前々からこっそりと製作していた念願のライダーシステムが、完全な状態で目の前にあるのだから。

「ほんつと長かった。過程でスタッグフォンとかバットショットとかデンデンセンサーとかのメモリガジェットとハードボイルダー、リボルギャリーとかのサポートアイテムは完成してたのに、どーしてもコイツらだけは難しかったんだから」

くるりと振り返ると、そこには飛び回るスタッグフォンとバットショットがあつた。机の上にはデンデンセンサーもある。

「さて、完成したことだし今日から始めよっか。
正義のヒーロー」

ムクリと椅子から立った龍兎は、地下の巨大ガレージに向かった。

?????????

翔太郎の事務所の地下をイメージして造られたこの地下ガレージは無論龍兎のアイデアだ。金網の下には待機状態の大型自走変形可能装甲車——リボルギャリーの上に前半分が黒、後ろ半分が緑という

特徴的なバイク——可変機構搭載バイクであるハードボイルダーが乗っていた。

「……さーてと、メット被って、いざ最初のパトロールだ！」ドルルン！

国立魔法科大学付属第一高校——通称『一高』への合格を果たし、数日前に中学を卒業した龍兎は早速ハードボイルダーにまたがり、エンジンを吹かして夜の八王子に出た。尚、今の時代はヘルメットを着けずにバイクに乗っても違反にはならない。（無論、事故の責任や罰則は高くなる。）にも関わらず着ける理由は言わずもがな。顔を隠すためである。

?????????

「……………」ブロロロロ…

ハードボイルダーを走らせながら龍兎は街の様子を鋭く観察する。そして少しエンジンのギアを上げ、人通りが無い廃倉庫の近くの角を通った時、異変に気づいた。

「……………ん？」

前方を走るワゴン車に目が向く。いや、正確にはその窓に一瞬移った影だ。本当に一瞬だったが、人が入っていたように見えた。すると、ワゴン車は徐々に減速を始める。

「……………取り敢えず」キキッ

近くの路地裏に入った龍兔が顔を覗かせると、ワゴン車の助手席から一人の男が顔を出して辺りを見回す。どうやら龍兔には気づかなかったようで、運転席の男に促すと、そのまま廃倉庫の一つに入ってしまった。

「…………一応、戦闘に備えておこう」ガチャリ

ダブルドライバーを腰に当てて装着し、メットを外して帽子を被った龍兔は、バイクを静かに、ゆっくりとワゴン車が入った廃倉庫の前に向け——次の瞬間、思いつきエンジン吹かしてワイリー走行でドアを叩き壊して廃倉庫に殴り込んだ。そしてバイクから颯爽と降りて口を開く。

「——おいおい、レディに男二人で手エ出すなんてなってねえな。野蛮な男は嫌われるぜ？」

?????????

私、七草真由美は窮地に追いやられていた。もう高校三年生になるのだから、護衛なんて要らないと言ったのがいけなかったのだろう。帰り道に睡眠薬を嗅がされ、気がつけば廃倉庫。ご丁寧に口にはガムテープ、CADも無いため、魔法が使えない状況だった。

CAD無しで魔法を使うには、魔法の工程を言語にしないとイケない。しかし、口まで使えなくては無理、ということは犯人であり、自分にニヤニヤといやらしい目を向けているこの二人の男はそこそこ魔法師に詳しい、ということになる。

「…………で、どうする？司のダンナに引き渡しゃあ依頼は達成だが」

「何言ってるんだお前。こんな上玉手エ出すなって方が無茶だろ？」

「まあ、そうだよな。さあて、まずは邪魔な服の解体ショーか？」

「撮影は任せとけ」

「おう。バツチシ撮れよく？」コツコツ：

「くく!!」ズリズリ

「おいおい、このアマ腰振って誘惑してやがる」

「いいね。じゃプラン変えて着衣でいくか？」

「だな。さてとお…」スツ

「……………泉美ちゃん、香澄ちゃん、ごめんね…」

二人の妹の名を思つて強く目を閉じた時。

ドツガアアアアアン!!!

『!?!』

突然倉庫のドアが破壊され、一台のバイクが入ってきた。それには人が乗っている。月で顔は良く見えないが、体格からして男だろう。その男はバイクからスマートに降り、帽子を少し下に直しながら言った。

「おいおい、レディに男二人で手エ出すなんてなってねえな。野蛮な男は嫌われるぜ？」

??????????

「な、なんだお前は!!?」

「七草の追手か!?!なんでここがわかった!!」

「(え?七草?なんだって十師族の中でもトップクラスの名前が出て

……………あ、そゆこと?)」

奥にいる女性に龍兎は見覚えがあった。九校戦という、魔法科高校同士での大会で見た顔だ。

「……まあとにかく、そのレディを放しな。そうすりゃ何も見なかったことにしとくが」

「黙れ!!ぶつ殺されてえのか!!」

「だいたい!お前はなにもんだ!!」

「俺か?俺は——」スツ

そして龍兎は黒と緑、二つのメモリを持った両肘を重ね、Wをつくるように構えて言った。

「ただの、仮面ライダーだ」

【Cyclone!!】

【Joker!!】

「変身!!」ガキン!

【Cyclone!!Joker!!】

ドライバーを倒すと、突如廃倉庫に何かの破片を含んだ突風が吹き荒れる。その破片は龍兎の周りに集まって鎧を形成していく。そして風が止むと、龍兎は銀の線で縦真つ二つに別れており、右半身が緑で左半身が黒く、赤の複眼を持ち、銀のスカーフを下げた戦士——かつて『風都』という都市を守った二人で一人の仮面ライダーである『仮面ライダーダブル』に変身した。

「な、なんだそりゃあ!!」

「ま、まさか、Rシステム!」

「ふう………さあ」ピンツ

龍兎は左手を鳴らして指を犯人たちに向け、セリフを言い放った。

「お前たちの罪を数えろ」

「誰が数えるかそんなもん!!」 ダツ!

「ただのこけおどしだろ!」 キイイン!

男の一人はナイフを龍兎に向けて駆け出し、もう一人は魔法で支援しようとする。連携は取れているが、相手が悪すぎた。

「はっ!」 ゴオツ!

「!?速ぐはああああ!!!?!」

龍兎は右に装填された緑のメモリ——サイクロンメモリの風の力で自身の体を押し、加速した蹴りを放ってナイフの男を壁に叩きつけた。あまりの速さで、後ろの男の魔法の照準は外れてしまい、魔法は発動しなかった。

「ち、畜生!こうなったら——」 サツ カチツ!

「!!」

「これでもくらえ!!」 ブシユウウツ!

男は懐から発煙筒を出し、スイッチを押して龍兎に投げつけた。すると辺りに大量の煙が充満する。どうやら真由美を連れて逃げるときもりだ。

「来い!!」 ガシツ!

近くにいた女性の手を掴み、引っ張っていかうとしたが、そこで男は違和感に気づいた。

「!?おい、抵抗しねえでさつさと——」

すると、あの忌々しい男の声が出た。

「…悪いが、そいつはレディの手じゃねえぜ？」

「は？………なんだこりやあ!!」

【LUNA!!Joker!!】

無理もない。煙が晴れると、男は自分が掴んでいたのが真由美の腕ではなく、黄色に変化し、ゴムのように伸びた鎧の男の右腕だったと気づいたのだから。

「そおらよつと!!」ドガアン!

「ぐはああああ!!!?!!」

その右腕は男を瞬時に巻き付け、思いっきり床に叩きつけた。

「さてと、トドメはメモリブレイクだ」

【Cyclone!!Joker!!】

そして男は最初の姿に変身する。そして黒いメモリを引き抜いて、右のスロットに挿し込んだ。

【Joker!! MAXIMUM DRIVE!!】

「はああああ………!!」

すると、再び風が吹き荒れ、龍兎の体を上に持っていく。そして頂点に来ると、龍兎は叫んだ。

「ジョーカーエクストリーム！」

「ぐわあああああ?!?!?!」

ドツガアアアアアン!!!

龍兎は途中で銀の線に沿って二つに割れ、左半身でキックを決めると、時間差で右半身と共にドロップキックを叩き込んだ。爆発が起これり、二人の男は廃倉庫の壁に叩きつけられて気絶した。

「……………!!」モガモガ

「……………おっと、すまねえな」ピリッ!

「ぶはっ! いえ、ありがとうございます」

「……………アイツらが言ってたが、アンタ七草のお嬢さんか? 護衛はどうしたんだ?」

「……………えっと、それは……………」

「……………まあ、レディのプライバシーには深くはつつこまないが。さて、俺はそろそろ…………」スッ

「あ、あの!!」

「……………なんだ?」クルリ

かつこよく去ろうとしたが、真由美が呼び止めたので龍兎は振り返る。

「……………お名前を教えてくださいませんか?」

「……………ダブル。『仮面ライダーダブル』「いえ、本名を……………一つ教えておくれ、お嬢さん」スッ

龍兎は指を銃のようにして向けながら言った。

「男も女も、秘密がある方が輝くつもんだ。

あの三日月のようにな。それじゃ、アディオス」

龍兎はそのまま踵を返し、ハードボイルダーにまたがって廃倉庫を後にした。

?????????

——……数分後……

「……………つっわけだ、寿和さん。後処理は任せてもいいか？」
『勿論。しかし、君もとんでもないな。あの七草のご令嬢を助けたなんて』

「正義のヒーローは人を選別しないからな。あ、そういや『アクセル』の使い心地はどうですか？俺の手元にもありますけど」

『ああ、あれかい？最高だよ。部下からも評判良いしね。君が製作したんだろ？』

「そうですね。ある程度データ集まったら送ってくださいよ。一応モニターなんですから」

『わかってるよ。これの提供と引き換えに君の活動を認めるという契約内容ぐらい理解してるさ』

「ならいいんですけど。頼みますよ？それじゃ」

『またね』ピッ

「……………やっぱ。活動後の月は格別だな」

港でハードボイルダーを停めた龍兎は、月を見上げながらそう呟いた。

入学編

第3話 『天才とトラブル（天災）は紙一重って言うけど実際どうなんだろうね』

国立魔法科大学付属第一高校、通称『一高』。

全国に九つある魔法科高校の中でも屈指の有名校である。その理由としては、現在三年生である十師族である七草真由美、十文字克人、そして数字付きですらないにも関わらずこの二人と同格の渡辺摩利。

彼ら『三巨頭』が九校戦に出場して以来二年間優勝し続けているため、この学校の偏差値は当然高い。そのため一高に入学した時点でちよつとしたエリートなのだ。

しかし、その実力の高さには当然裏がある。

それが『一科二科制度』だ。

入試成績で合格した二百名の内、上位百名は制服に一高のエンブレムをあしらえた『花冠^{ブルーム}』。

後の半数はエンブレムを持たない『雑草^{ウイード}』。

この学校は、例え一年生でも入学時点で二つの身分が存在しているのだ。

「……なんて、カッコ良くしても要約しちゃえば実力しか見てないってことだよねえ……」チラリ

自身の肩に刺繍で施された一高のエンブレムを見ながら、一高正門の前で龍兎は呟いた。

「……大体、魔法師の数が少ないから半数にしか教師つけられないなら二科生にこそつけるべきなのに。強い少数よりそこそこの多数の方が圧倒的に効率がいいよ。加えてそこそこでも魔法に詳しいんだから教師に回せる魔法師も増える。こんな簡単なことをしないと意味わかんないよな……」

スタスタ

分厚い本を片手に龍兎は入学式がある講堂へと歩いていった。ちなみに、開始まで十分時間に余裕はあるがどうせ暇なので先に来ておこう、というのが龍兎がここにいる理由である。と、前から男子生徒が近づいてきた。平凡な顔つきだが、肩にはエンブレムが無い。

「……仕方ないとはいえ、同情するよ……」スツ

左に少し寄って、龍兎は男子生徒とすれ違う。その時、龍兎はある違和感を憶えた。

「……今の男子生徒、どっかで見たような……？」

………ま、気のせいかな」

奥歯に何か挟まったような感覚があったが、龍兎は気のせいだと割りきり、講堂に歩みを進めた。

?????????

席に座って数十分後、入学式が始まった。前のステージには入試主席の『司波深雪』という女子生徒がスピーチをしていた。その時、龍兔はまたあの違和感を憶える。

「……………やっぱりあの男子生徒といい、どつかで見覚えあるんだよね……………こうなるなら神様に頼んで只でさえ少ない原作知識を完全消去なんてしてもらうんじゃないかな……………まあ、知らないなら『検索』すれば早いよね」スウウ……………

龍兔は意識を集中させて目を閉じた。その直後、目を開けると、龍兔がいる白い空間の周りには数えきれない量の本を詰め込んだ本棚がこれまた大量に並んでいた。

「……………神様からもらった特典能力の一つ、

『地球の本棚』……………やっぱいつ見ても圧巻だな」

そう、ここは皆さんご存じ地球の本棚だ。ここには地球のありとあらゆる情報がある。軍の機密情報だろうと堂々と閲覧できるが、難点が一つ。そう、情報が多すぎるのだ。地球のおよそ四十六億年の記憶の全てがあるここで目的の情報を見つけるのは至難の技であるため、キーワードを絞って『検索』するのだ。

龍兔が貰ったのはライダーの『世界』の力。

そのため龍兔は、例えばエボルトの能力だって自由に扱える。『仮面ライダーダブル』の片割れであるフィリップの使う、この地球の本棚として例外ではない。ちなみに、ここでの一日は現実世界では一分も経っていない。

「さ、検索開始だ。キーワード：『司波深雪』」

龍兎がキーワードを口にすると、凄まじい速度で本棚が整理され、目の前に一つの本棚が現れた。

「やっぱ人名は楽だな。でもまだ十三冊…もう少し絞りたいな。キーワード：『第一高校主席』」

そう言った瞬間、本棚の本は素早く消え、龍兎の手元に一冊の本が出てきた。

「…ビンゴ」パシツ　パラリ

龍兎は本を手に取り読み始めるが、次第に顔が驚愕に染まっていった。

「……………おいおい、四葉真夜の姪って、とんでもないじゃねえか…まあでも、四葉なら主席も納得か。てかそれより、問題はコイツだよな……………」

龍兎が見ているページには、彼女の兄である

『司波達也』に関する情報が載っていた。

「……………キーワード：『司波達也』、『四葉家』」

龍兎がそう言うと、手元に再び一冊の本が浮かんでくる。

「……………はい、ぶっ壊れ。『分解』に『再生』ってどういう星の下に産まれたんだよ……………おまけに『トラス・シルバー』の片割れって……………どういうハイスペックだよって言えば俺もたいがいだし…取り敢えず、俺に関わるようなことは無いと信じたい…」パタン

龍兎は本を閉じ、意識を現実世界に戻した。

?????????

その後クラスのIDカードの発行があり、一年生たちは綺麗に並んでカードを受け取っていた。

「…………俺、は…A組か…面倒事が無いのを祈るしかないよねえ…………」

カードのクラスを見て、更に憂鬱になってしまった龍兎はふと周りをぐるりと見渡す。と、その先に彼らはいた。

「…ゲツ、司波兄妹じゃん。しかもこっち見た。取り敢えず、自然に自然に…………」クルリ

平静を装い、何やらトラブルに巻き込まれている兄妹を尻目に龍兎は帰路に着いた。

この時、自分のアルビノとしての特徴である白い地毛が相当他人の記憶に残りやすいということ、龍兎は完全に失念していた。

?????????

「…………やはり、か…」

「お兄様？」

「ん？ああ……………」

自身の言葉が気になったのか、妹の深雪が話しかけてきた。深雪は達也の方向に視線を向け、白い髪の少年を見つけた。

「?………!彼はまさか……」

「……気がついたか。三年前のあの少年だろう。まさか一高、それも同級生とは……」

忘れるはずもない。自分の最愛の妹を守った異形のアーマーを纏う戦士である白髪の少年。

あのアーマーは、六年ほど前から独自の『Rシステム』によってCADの一大企業へと大躍進を遂げた『Rインテリジェンス』が最初に発売したRシステムである『ゼロワンシリーズ』の派生型の『バルカンシリーズ』だと今は知っているが、後で知った情報では自身も触れた軍用のタイプでもあれほどの威力は出ないはず。つまりあの少年の『バルカンシリーズ』の特化型CADである『ショットライザー』と専用のデバイスである『プログライズキー』は軍用を超えているかかなりの高性能だということだ。そしておそらく、自分も考えていた完全独立思考CADを搭載したベルト型CADに関しても何かを知っているだろう。

「(……コネクションを作るのも、悪くはないかもしれない……)」

龍兎からしたら傍迷惑もいいところなプランを達也は頭の中で練っていた。

?????????

Y O ☆ K U ☆ Z I ☆ T U ☆

「徹底してるなあ…：なにも昇降口まで別々にしなくてもいいだろうに」ガララッ

龍兎はクラスの前を開けると、何やら一つの席に生徒が集中していた。どうやら主席の深雪と仲良くないたい連中らしい。何人かはこちらに気づいて珍しいものを見る目を向けてきた。おそらくアルビノである彼の見た目が珍しいのだろう。

「さて、履修登録完了よ…ん？この音…！！」

そう言いながら自分の席に着いてキーボード操作で素早く履修登録を済ませると、鞆から着信音が鳴った。龍兎は鞆から素早くプログライズキーに似た形状の端末——仕事用に使っている『ライズフォン』の応答に出た。無論、教室内なので音は控えめに。

「ちよつ、父さん！何電話してくれてんの？今教室なんだけど！」コソコソ

『そうだったか、すまんすまん。なるべく早く伝えとくことができな。『クローズチャージ』と『グリス』、『ローグ』がようやく完成した。それだけ伝えとこうと思つてな』

「そつか了解。それじゃ」ピッ

電話を切った龍兎は鞆にライズフォンをしまい、代わりに紙媒体の小説を出して読み始めた。

尚、深雪と二人の女子生徒が物珍しげにその様子を見ていたことには気づいていなかった。

????????

——…：昼休み、一高内の食堂…

龍兎はメニューからデミグラスソースがたっぷりかかったハンバーグ、胡麻ドレッシングサラダ、白ご飯、コーンポタージュ、天然水をトレイに乗せて席を探していた。と、向こう側に一人席が空いていたのを見つける。

「おっ！ラッキー…：じゃ、ないなあれは…」

なぜ龍兎のテンションが急降下したのか、それは簡単だ。

「なんでこっちが席譲らないといけないのよ！」

「黙れ！二科生なんだから一科生の命令は聞いて当然だ!!さっさとどけ！」

目の前で物騒かつ龍兎からすればしよもない一科二科の争いが勃発していたからだ。どうやら深雪が達也と食事をしようとしたら深雪と仲良くなりたいたい一科生が暴走した、といったところだろう。しかし、ここ以外に通れる道はどうやらなさそうだ。

「はあく、どうか巻き込ませませんように…」

そう思いつつ龍兎が一科生たちの後ろを歩いた時だった。

「司波さんは僕たち一科生といえるべきなんだ！いいからさっさと席を空ける!!」ブンツッ！

一番前にいた男子生徒が大きく後ろに右手を振り抜いてしまった。
ガッシャアアン!!!

『!?!?』

「……………」ポタ……………ポタ……………

男子生徒が手の方を見ると、龍兔がいた。

ただし、真新しい制服はデミグラスソースとコーンポタージュ、ドレッシングのミックスで塗られた上に天然水が顔面からかかり、ポタポタと床を鳴らしている。

「……………」ジツ…………… スツ……………

龍兔は腕を自分のトレイにぶち当てた男子生徒——森崎を見た後、床に飛び散った昼食と制服を見た。

その姿は言葉こそ発していないが、肩がプルプルと、いや、この場合はワナワナと震えている。

誰がどう見ても怒りがオーバーフローしていた。

「……………あーあ、せつかくの昼飯が……………」ギョロリ

『!?!?』

「……………で、俺の昼飯と制服どうしてくれんの?お前」

「な、なんで俺が!!」

「逆に聞くけど、この状況でお前以外に悪いやついる?何?もしかしてそんなこともわかんないの?そっか、それで自分たちがこんな狭い通路で群がってて通行の邪魔になってることに気づきもしないんだ。そっかそっか。あとお前バカなの?たかが入試成績で上位百名に入ってたってだけで他人を好き放題見下してさあ。自分でクズだ

なつて思わないの？高一になつて他人をバカにしたり見下したりしたらいけないつて小学生どころか幼稚園児でもわかることも理解できないの？一高どころか保育所から出直してこいよ。それとも何？お前たちが他人に誇れるのは魔法の腕だけで頭も品性も二科生にすらボロ負けだからそうやって魔法の成績で見下して見栄張つてんだ。だつたらここに居る価値ないから君たちさっさと早退なり自主退学なりしたらどう？君たちがやってんのは同じ一科生どころかこの学校全体の品性を貶めてるんだよ？二科生からしたら一部除いて一科生は魔法の腕だけであと全部人として生きる価値すらないつて思われて当然だよ？普通自分の一切必要無い無駄極まりないジエスチャーのせいで他人がこんな大惨事になつたらまず開口一番に謝るでしょ？それすらできてない時点で人なのかどうかすら疑うよ？取り敢えずお前ふざけんよ？あと服と昼飯の弁償すらもしないとか言つたらぶちのめすからね？」

「…そ、それは……………」

「…ま、この程度ならどーとでもなるんだけど」

そう言つて龍兎は魔法で服のソースやらを蒸発、拡散した。

「ふう、クリーニング完了。さてと、それじゃ聞いててバカみたいに思えてくる時代遅れな差別主義の演説、精々頑張つてね。それじゃ失礼。一科生の面汚しさん」クルツ

龍兎はそう言い残し、食堂を後にした。

「……………も、森崎……………」

「……………あの野郎……………!!」ギリリツ

クスクスと笑われている森崎は龍兎の後ろ姿を憎々しげに睨んでいた。

?????????

……………放課後……………

「……………あゝ、ほんつと迷惑だよ……………あーいうバカが出てるのになんでシステム変えないかなあ……………」

龍兎はブックサ言いながら正門に向かっていった。ちなみに、龍兎は次席だったものの、部活には入らないつもりだ。理由は簡単、Rシステムの開発とダブルとしての活動があるため、入っても幽霊部員になるのは確実だからである。

「……………あ、ソーだ。後でライズフォンで電話しとかないと。スクラッシュドライバー系が完成したってことはツインブレイカーも完成したってことだしね」

ツインブレイカーの使い方を思い出し、シミュレーションをしながら正門に向かうと、途端に龍兎のテンションはダダ下がりになる。

「……………はあ……………ホント懲りないよね

「アイツら……………学習能力無いの……………」

そう、食堂の論争パート2が正門で勃発していた。しかもメンバーまで同じという、最早やらせで龍兎を困らせようとしていると考える方が自然に思えてきた。

「……………ま、あんなこと言った以上は止めないわけにはいかないし、アイツの身元も割れたから対処はさつきより楽だろ……………」スツ

「……………！貴様は!!」

「君たち何？学習能力無いの？俺の話聞こえてないの？それとももう

「忘れたの？さつさと病院行ってきたら？今なら良いところ紹介するし」
「黙れ!!これは俺たちの問題だ!!一科生の自覚もないやつが口出しするな!」

「一科生の自覚……ねえ。二科生を嘲るのが自覚だって言うならそんな自覚可燃ゴミにして捨てて欲しいとこだけど……ねえ君たち。なんでこういう状況になったか教えてくれない?」

「!俺たちか?」

「そ。こーい泥沼展開の時は両方から話聞いた方が早いし」

そう言つて龍兎は二科生たちから話を聞く。要約すると、深雪が兄の達也とそのクラスメイトの二科生——エリカ、レオ、美月と帰ろうとしたら、食堂で絡んできた一科生たちが交友を深める、と言つて深雪を連れていこうとしたらしい。

「……よし、良い案があるよ。この問題を一瞬で解決する方法が。とゆーわけで司波さん、だっけ?」

「!ええ……」

「司波さんはお兄さんたちのグループと彼らのグループ、どっちと帰りたいか今ここで正直に言ってみてよ。どっちと帰るかの論争なら争つてる原因の人にハッキリ決めて貰うのが一番だし」

「な!!なんだそれは!!」

「なんだそれは!!……要は司波さんがどっちと帰るかで揉めてるんでしょ?だったら本人の意思が最優先じゃないか。まさかだけど、本人を無理矢理連れていこうとしてたとかないよね?」

「ぐっ……」

「ごめんなさい。今日はお兄様と帰りたいの。悪いけど、また明日」

「し、司波さん!!なんで雑草なんかと——」

「はいはい、とやかく言わないでよ。本人がお兄さんと帰りたいって言っただから諦めなよ。司波さんは君たちの道具じゃないんだから」

「くくく!!黙れええええ!!」ガチャリ!

『!?』

先頭にいた森崎は龍兎の言葉でついにキレ、ホルスターのCADを引き抜いた。狙いは無論龍兎だ。そして引き金を引こうとして——龍兎の拳によって弾かれた。

「なっ!!?」

「……………ふう、ギリギリセーフ」

「こ、この!!」

「……………あのさ、お前ホントに一科生?」

「なんだと!!」

「自衛、また緊急事態を除く公共の場での魔法の使用は法律で厳重に禁止されてる。魔法師からすれば当たり前の法律すら守れないとかいよいよ頭おかしいんじゃないの?」

「……………ぐ……………!!わ、悪いのは二科生だろ!なんで俺たちが犯罪者なんだ!!」

「そうだ!!なんで二科生を庇うんだ!」

「……………—ピッ—……………はあ、もういい。ここまで言っても分からないなら、もう僕も黙っちゃいられないね。ホントはしたくなかったけど……………」スツ

「!?……………ふ、フン!お前ごときが何をできるんだ!!俺たちは一科生の中でも優秀な——」

「もう黙ってる森崎駿」

「……………は?」

すると、龍兎の様子が豹変した。温厚そうな声は一転、殺意すら感じ取れる。

「森崎駿。数字つきの分家。一族の特技は『クイック・ドロウ』。実家はいわゆるボディガードの派遣会社。そして……………数日前、Rインテ

その爆弾発言で、周りは一斉に叫んだ。

「さて、森崎駿。今回の一件、及びお前の実家のショットライザー購入申請の件は社の方で慎重に検討させて貰う。貴様のように、立場で人を見下すことを是とするような奴がいる会社に売る商品は、わが社には無いのでね」

「な！ま、待て!!そんなの——」

「横暴だ、などとは言わせんよ？元はと言えばお前の発言、態度……それらが招いた結果だ。恨むなら過去の自分を恨むんだな」

「……このー！たかが副社長だからってー！」キイイン！

と、後ろの男子生徒が魔法を放とうとする。それを見てハツとしたようにそこ横にいた女子生徒が魔法を放とうとした。

「……まあ、お前たちを裁くのは俺の仕事じゃあないがな」シユウウ

龍兎が変身を解除すると同時に、女子生徒の魔法式を何かが撃ち抜いた。龍兎と達也以外の全員はハツとして正門の方を見る。

「風紀委員長の渡辺摩利だ。全員動くな」

……まだまだトラブルは終わりそうにない。

第4話 『坂道で林檎とか落とすとどンドン転がってって手がつけられなくなるよね』

「風紀委員長の渡辺摩利だ。全員動くな」

ボーイッシュな見た目の女性が目の前に現れた。この学校の風紀委員は、主に学校での魔法の不適正使用を取り締まるという仕事を担っている。つまり、そろりリーダーである彼女は相当な強者だということだ。

「(……………変身したのはバレて…なきそうだな)」

タイミング的にギリギリだったので、龍兎はホツとする。と、後ろからひよこっつと見覚えのある女性が出てきた。

「……………あつ」

「!どうしたんだ機丈」

「い、いやーなんでも!(やばっ!!思わず声出ちゃった!!怪しまれてないよね!!)」

「……………? (……………今のあの子の声、あの人に似てたような…)」

尚、出てきた女性——真由美に怪しまれていることには気づいていないようだ。と、達也が摩利に一歩踏み出す。

「……………すみません。悪ふざけが過ぎました」

「悪ふざけ?」

「ええ。森崎一門のクイツク・ドロウは有名ですから。後学の為に見せて貰おうと思ったのですが、思ったより熱が入り過ぎていたようです」

「……………事実か?そこの君」

「……………え？あ、はい…」

「……………では、その彼女が攻撃魔法を使おうとしていたのは？」

と、摩利は短い茶髪を両サイドで纏めた一科生の方を指して言った。

「いやいや、彼女を責めるのはお門違いです。あの娘が放とうとしたのは閃光魔法、それも目眩ましレベルの物です。悪くても目が多少チカチカする程度の威力で攻撃魔法だなんて過激ですよ」

「ええ。おそらく彼女なりに場を静めようとしたのでしよう」

「…ほう、君たちは魔法式を読み取れるのか？」

「実技はできませんが、分析なら」

「CADには詳しいもんで」

「…ま、まあまあ！達也君も龍兎君も、悪気は無かったのよね？」

「はい」「ええ」

「……………そうか。なら今回は不問とする。実習はちゃんと学校に申請するように。……………ああ、それと最後に。君たち、名前は？」

「一年E組、司波達也です」

「一年A組、機丈龍兎です」

「……………覚えておこう」クルッ

そうやって、摩利と真由美は校舎に向かった。

「……………借りだなんて思わないからな」

「貸したと思っただけだから安心しろ」

「お前に貸しなんか作っても微塵の得にもならんとわかってるから心配するな」

「司波、機丈。俺はお前たちを認めない。司波さんは俺たちと一緒にいるべきだ。覚えておけ」

クルッ

「あ、そうそう。根拠もない持論は妄想って言うんだよ。覚えといて

損はないからね」

「ッ!!」

森崎たちは二人の女子生徒を残して悔しそうに去っていった。

「……………あくく、どつと疲れた。さっさと帰ろ」

大きくため息をつき、龍兎はポケットをまさぐりながら駅に向かうとしたが、それを呼び止める声があった。

「待ってください」

「!」ピタッ

声の主は、深雪だった。

「私たちを覚えていませんか？三年前、沖縄の国防軍の基地で——」

「……………ああ、覚えているさ。見違えたね、

深雪さん。相変わらずお兄さんと仲良さそうでよかったよ。まさか君たちと同級生になるとまでは思わなかったけど」

「……………龍兎。つもる話もある。よければだが、一緒に帰らないか？」

「……………わかった。達也、でいいかな？俺も龍兎でいいから」

「ああ。よろしく頼む、龍兎」

「オツケー達「あ、あの!!」…何か用？」

「さ、さつきはありますがとうございまして！もしよければ、私たちも一緒にいいでしょうか!!」

「……………達也、深雪。どうする？」

「俺たちは構わないが」

こうして、達也たちと龍兎、そして和解した一科生——光井ほのかと北山雫は全員で帰路に着くこととなった。

?????????

「……そう言えば、龍兎さんはRインテリジェンスの副社長なんだよね?」

「そうだけど?」

「コンピューターの中で龍兎たち八人が会話していると、唐突に雫が質問してきた。」

「次のRシステムはどんなタイプをいつ発売するの?教えて欲しい」

「えなんで唐突に?」

「雫はRシステムの大ファンなんです。今まで発売されたタイプも、市販用と軍用を両方全種類買ってるぐらいで……」

「あ、それであの会社軍用タイプを何度も申請してたのか。毎度お買い上げありがとうございます。あと、実は最新作が今日完成してね。今いつ発表するか検討中なんだ」

「ほんと?!いつ?!」

「いや、だから今検討中だ……」

「ねえ龍兎くん。あの『スチームブレード』とか

『ビートクローザー』ってやつも龍兎くんが開発したの?」

「いや、『DORA^ドTTO^ト』って言うウチ専属の技師が設計してる。俺や父さんも多少デザイン考えたりはしてるけど」

「へー!センスいいんだね!ウチの連中もRシステムが大のお気に入りできさ〜」

「知ってるよ。千葉家関係の警察官は国防軍に次ぐお得意先だからね」

「じゃあ、あの『パンチングコング』もソイツが作ったのか!」

「うん。あれ一応硬化魔法や自己加速魔法併用の近接想定だから」

「バカにコングはお似合いね」

「んだとテメェ!!」

「ふ、二人とも落ち着いて…」

と、どうやらここにいるほとんどのメンバーはRシステムに触れているようだ。

「でも凄いわよね。『夢を現実に変える』なんて正に龍兎くんの会社だからこそ言える台詞だわ」

「百年前の特撮とかをモチーフにしてんだろ？」

「うん。ああいう変身して戦うっていうのは今でもまさしく人の夢だからね。こうして使ってくれてる人がいるのは開発者冥利に尽きるよ」

「……そう言えば龍兎」

「?どしたの達也」

「お前は『ダブル』について知っているか?」

『!!』

その言葉でコンピューター内の全員がハツとした。

『ダブル』

最近八王子を中心に犯罪者などを捕らえている、所謂ヒーロー的存在としてネットなどで騒がれている存在。一部ではファンクラブや正体の考察専用サイトまでできているほどだ。

「……………これはオフレコで頼みたいんだけど、

『ダブル』はウチのモニターなんだよ。ただ、開発の過程で見つかったある問題が原因でダブルシリーズの発売はできないんだけど」

「問題?」

「……………ダブルの変身に使う『ガイアメモリ』っていうデバイスが厄介でね。やろうと思えば危険物として量産されかねない代物なんだ。

ガイアメモリを体に装着処理したスロットに差し込んで怪物になっちゃうっていう、とんでもない代物に。それで変身した人間を会社では『ドーパント』って呼んでる。使用すると薬物みたいに高揚感と充足感がするけど、次第に力を使いたいって衝動に飲み込まれて暴れてしまうんだ。それもガイアメモリに内蔵された様々な特殊能力を使って」

「……………それって滅茶苦茶マズいんじゃない？」

「二個人に渡るだけならまだマシだけど、問題はそこそこ大きなテロ組織とかにその製造法が渡ってしまった場合なんだ。下手すればソイツらの手でドーパントの軍団とかが編成されかねないんだよ。そうなれば世界中が大混乱に落ちてしまう。だから、悪用の危険性があるダブルシリーズは販売するわけにはいかないんだ」

「……………そんなヤバイやつなのかな？」

「ウチの会社で特殊な装置使って生成したやつなら無害化されてて問題ないんだけどねえ……………あ、俺この駅だから。それじゃまた明日」
スツ

コミュニーターが停止し、龍兔だけが降りて行った。その足で龍兔は近くの人気の無い路地裏に向かう。

「……………さあ、ダブルの時間だ」スカチャツ

龍兔は鞆からダブルドライバーとガイアメモリを取り出し、素早く変身した。

【Cyclone!! Joker!!】

そして、サイクロンメモリの力で浮かんだ龍兔は日の落ちかけた街に向かっていった。

?????????

その日の収穫はひつたくり二人、チンピラ三人だった。取り敢えず、いつものように警察署の前に縛って放置し、近くの大きな湖がある公園に来ていた。

「……………出てこい。俺から見て七時の方角の木の後ろだろう？
バレている」

「……………いや、さすがは『ダブル』くんといったところかな？幻術には自負があるんだがねえ」

スルリと木から出てきたのは、片目に傷があり、眉以外を完全に剃っている僧のような

——ただし、どこか胡散臭い——男だった。紺色の和服に草履という、現代では滅多に見ない服装をしている。

「……………一応、名前を聞いても？」

「そうだねえ。九重八雲、と名乗ろうかな？」

「……………誰かと思えば、かの忍術使いが俺に何の用だ？」

「ほう、僕を知っているのかい？」

「情報は銃より強い武器になる、と言うからな。

(ま、今地球の本棚で調べただけなんだが)

……………すまないが用件を聞いてもいいかな？」

「簡単だよ。君の腰のそれをいただきたい」

「……………なぜ？」

「さあ。これ以上は高くつくよ？」

「……………仮に、だが。「断る」と返答すればどうなるんだ？まさかだが、僧が世俗にあーだこーだ言えるようなご時世じゃあないよな？」

「ククク、そうだね。たしかに僕は世俗とは縁を切っている。ただ、それと好奇心は別さ」

「……………つまり、好奇心で俺のアイテムを奪うと？」

「まあね」

龍兎は瞬時に考える。少なくともこの男は近接にかけては世界でも指折りだ。幻術抜きでも侮れないほどに。しかし、調べた限りではその力をこんなこそ泥のように使う性格ではなかった。

つまり、この男は本当に好奇心で龍兎のアイテムを奪うつもりなのだ。

「……………なら断る。お前にこれを渡すわけにはいかない立場だからな」

「それは『会社の』雇い主が怒るからかい？」

「……………ククツ…」

「？」

「…失敬。どうやらかなり見聞が広いようだ」

無論、これは嘘だ。龍兎が思わず笑ってしまったのは別の理由である。

会社の雇い主。それはつまり、ダブルについて知ってる人物から情報を得たということだ。

ダブルに関する詳細を知っているのは、父を除けば寿和と達也たちのみ。この時点で犯人は大きく絞られる。そして、あのメンバーの中で八雲と繋がりがありそうなのは……………

「……………まあ、おかしいとは思ったが。取り敢えず俺の返答は否。お前にこれは渡さん」

「そうか。なら——力づくで貰うよ」

「それをできるのなら、な」

「言う…ねえッ!!」ダツ!

その瞬間、八雲が仕掛けた。幻術を展開し、背後に回り込もうとしている——ように見えるのが実は分身で、本体は一直線にダブルに向かっている。

【LUNA!! Joker!!】

だからこそ、八雲の反応はギリギリだった。

「はっ!!」バツ!

「!?っ!!」サツ

ダブルは右半身を黄色に変化させ、そのまま腕を鞭のように薙ぎ払った。八雲はギリギリジャンプして後ろに下がる。

「……………まさか、見抜かれるとはね……」

「言っておくが」スツ

【TRIGGER!!】

「俺に幻術は通用しない!」ガキン!

【LUNA!! TRIGGER!!】

そのままダブルは左に青いメモリをジョーカーメモリの代わりに装填し、左半身を青に変えた。そのままいつの間にか持っていた蒼い銃——トリガーマグナムを八雲に向けて連射した。

「はっ!!」「ドドドドドドドドドド……」

「こちらも、そんな飛び道具は——」

「効かない、とは言わせない」

龍兎がそう言った時だった。

グニヤリ!!

「なにっ!!? くうっ!!」 サツ!

突然、放たれた弾丸が軌道を大きく変えて八雲を四方八方から襲った。なんとか避けられたものの、何発かはカスっている。

「…………アレを避けるか。どうやら偽者とか影武者じゃあなさそうだな」

「君相手にそんなものけしかける余裕はないよ」

「そうか。あと悪いが叩き潰す」

【TRIGGER!! MAXIMUM DRIVE!!】

「おおっと……………これはさすがにマズイね」

「トリガーフルバースト!!」

ドツガアアアアアン!!!

トリガーマグナムから放たれた必殺技が八雲を捉え、着弾したように見えたが、煙が晴れると八雲は消えていた。

「…………チツ。逃げられたか。一応確認しときたかったんだが、まあ……いいか」

龍兎はそのまま監視カメラが無い路地裏で変身を解除し、帰宅した。

第5話 『面倒事って一回起きると迷惑メール並みに立て続けにやって来るよね』

——…翌日、一年A組教室内…

「……………アレをわざわざ学校に持ってくる意味あったのかな……………」

事務室に預けてきた自分のケースに入っているCADを思い出しながら龍兎は呟いていた。と、深雪が教室に入り、龍兎の方に向かっていく。

「…………龍兎君。少しいいかしら?」

「どしたの深雪?」

「昼休み、空いてるかしら?」

「今日の?今日なら…………大丈夫だけど」

「良かった。実は私たちと一緒に生徒会室に来て欲しいの」

「…………え?どういう成り行き?」

深雪曰く、朝に正門で真由美に遭遇し、達也、深雪、龍兎の三人に生徒会室に来て欲しいという用件を言ってきたそうだ。

「…………それ絶対面倒事じゃん。まあ、了承した以上は行くけど」
「ありがとう」

そんなこんなで時は流れ、昼休みのチャイムが鳴った…………。

?????????

「面倒事だけはごめんだけどねえ…」

「そうだな」コンコン

『はくい』

「一年E組、司波達也、一年A組、司波深雪、機丈龍兔です」

『今開けるわね』ガチツ

真由美が応答した直後にオートロックが開いたので、達也たちはドアを開けて中に入った。

「失礼します」ペコリ

「さ、遠慮しないで入って」

「お魚と肉と精進、どれにする?」

「部屋に自動配膳機まであるんですね」

「恥ずかしい話、遅くまで仕事する時もあるからね」

「(……役員は絶対避けられないなあ……)」

三人は精進料理を選び、席につく。

「それじゃあ、紹介するわね。まず、風紀委員長の渡辺摩利」

「よろしく頼む」

「それと会計の市原鈴音、通称リンちゃん」

「私をそう呼ぶのは会長だけです」

「そして書記の中条梓、通称あーちゃん」

「か、会長っ！後輩の前であーちゃんはやめてくださいっ!!」

「(……なんでだろう。この人だけそのあだ名がめっちゃしっくりくるんだけど……ん?)」

渡辺先輩、その弁当もしかして手作りですか?」

「?そうだが…意外か?」

「いえいえ、まあ………少し苦勞したんだな、と思わしてね」トン
トン

「……………あっ」／／／

龍兎はそう言って自分の右手を指差すと、摩利は恥ずかしげに絆創膏が貼られた自分の手を後ろに隠した。

「…………お兄様、私たちも明日からお弁当にしましょうか？」

「ああ、ただ食べる場所がな…」

「…兄妹と言うより恋人同士の会話ですね」

「そうですね？でもまあ、確かに…血の繋がりが無ければ、恋人にした
いと考えたことはありませんが」

「ええ!？」／／／

「なっ!？」／／／

「……………」／／／

「ふえええっ!？」／／／

「……………」シラー

「…………」クルツ

「…………もちろん冗談ですが？」

「ええっ!！」

「ん？」「あ？」

「あっ……………」／／／

「(…なんだろ、この兄妹いちやつくためにわざわざここに来たの？
じゃあ俺もう帰っていいかな?)」

「…………えっと、いいかしら？」

と、雰囲気を変えようと真由美が本題に入る。

「深雪さん、生徒会に入ってくれないかしら？」

「……………皆さんは兄の成績をご存知ですか？」

「？」

「深雪!!？」

「(あ、だいたいこの後の展開察した)」

「成績優秀者であれば、私より兄の方が素晴らしいです。入れるのなら、兄の方が入るべきです」

「(デスヨネー)」

「残念ですが、それは無理です」

鈴音が言うには、今の校則では二科生が生徒会役員になることはできず、それを变えるには九月に開かれる集会で過半数の票を得るしか無く、一科生至上主義の生徒が多い現状でそれを実現するのはかなり厳しいそうだ。

「…そうでしたか。分を弁えぬ発言、許して下さい。役員の方は頑張らせてもらいます」

「分かったわ。じゃ、書記としてあーちゃん、いろいろ教えてあげてね」

「ですからあーちゃんはやめてください!」

「……………あ。そうだ鈴音」

「はい?」

「確か風紀委員には、一科二科の制限は無かったよな?」

「はい、そうですが」

「!それよ!!」

「……………は?」

「(あ、この流れはもしかして……………)」

「確か風紀委員の生徒会推薦枠が今ちょうど二つ余ってたわよね!?よし!生徒会は達也君を風紀委員に指名します!」

「いや待って下さい!俺は風紀委員がどういう職務かすら知らないんですが」

「ああ。簡単に言うと、魔法の不適正使用などを取り締まる、いわば警察と検察を兼ねたような機関だな。まあ、懲罰に関しては懲罰委員会があるが」

「あのですね!俺は実技の成績が悪いから二科生なんです!」

「達也。諦めな。この人たち一度思いついたら絶対諦めないタイプの人間だ」

「まあ、そういうことだ。あと、風紀委員会は君にもやって貰うぞ」

「……………もし断ったら?」

「……だいたい察してるんじゃないのか？」

「……まあ、いいですけど」

「待て龍兎。俺はまだ——」

達也が続けようとした時、予鈴が鳴った。

「取り敢えず、話は放課後に持ち越しですか？」

「そうね。じゃあまた放課後ここにきて」

真由美が言い、一旦この場は解散となった。

?????????

——……放課後……——

「んじゃ行くっか」

「ああ」

「ええ」

「来ましたー」

『どうぞ』ガチャツ

「(……ん？あのあたしか……この前会長さんと一緒にいたような……)」

龍兎たちの視線を先には、真由美と一人のどこかで見覚えのある男子生徒がいた。

「ん？」

「来たか。では達也君、龍兎君、早速だが風紀委員室まで一緒に——」

「待って下さい」

「なんだ？服部刑部少丞半蔵副会長」

「フルネームはやめてください!!学校にもちゃんと服部刑部と——ではなく!!私はこの雑草ウイードを風紀委員にするのは反対です」

「おい。それは禁止用語だぞ。私の前でよく堂々とやるな」

「取り繕ってもしようがないでしょう。それとも、全校生徒の約1/3を取り締まるつもりですか？」

「!!何ですって!?!」

「あなたが深雪さんですか？魔法師は常に冷静を心掛けるべきものです。身内だからとせっかくの目を曇らされては困ります」

「……委員長、この人ほんとに副会長ですか？」

「なに？」

「いやいや、風紀委員長と後輩の前で堂々と禁止用語を吐いて、更にはそれをアホみたいなの屁理屈で正当化するような人が生徒会副会長って正直人選的にどうかと思うんですけど」

「何だと貴様!!?!」

「あと副会長さん。記憶しっかりしてます？『魔法師は冷静を心掛けるべき』なんでしょ?この程度で激昂するようじゃ、そんな台詞は到底言えた義理じゃねーですよ」

「なっ!!?くっ!こ、この!!」

「………で、何か反論は？」

「~~~~!!」

「………まあ、こちらとしても友達の実力も確かだし目も曇ってないと証明したいですし、模擬戦でもします?」

「……いいだろう。誰に生意気な口を聞いたか見せつけてやる!!」

こうして、龍兔と服部の一騎討ちが始まる。

?????????

——…一高、第三演習場…

事務室からケースを受け取り、それを持って龍兎は演習場に来た。

「ほいっと」ピッ

パカッ!!

「まさかほんとに使うとはね………まったく、運が良いのか悪いのか………」カチャ

アプリを起動してライズフォンをケースに付いた窪みに付けるとピッタリと嵌まり、認証システムが作動してケースが開く。そして龍兎はケースの中から一つのCADを取り出し、フィールドに立つ。

「…さて、最後にルール説明だ。致死性の攻撃、後遺症が残るような攻撃などは禁止する。もしそうなったら、全力で止めるので、そのつもりでいておけ」

そういうと摩利は手を挙げて二人を交互に見る。二人はそれに軽く頷いた。

「…まったく、戦う気なんて無かったですかね」

「なんだ？今さら負けた時の言い訳か？」

「いえ。戦う気はあんまり無かったですね、それと同時に…負ける気も無いので」スッ

「スクラアアッシユドオライバー!!!」

『?!?』

「さあ、新商品のお披露目会と——」

シャキン!!

「いきましようかつ!!」ヒョイツ パシッ!

【ROBOT JELLY!!】

龍兎は右手に持っていた、レンチと試験管のような物が付いたCAD——スクラツシユドライバーを腰に当て、ポケットから黄色と黒を基調とした容器——ロボットスクラツシユゼリーを取り出してキャップを回し、軽く放つてキャッチすると、ドライバーに差し込んだ。するとスクラツプ場のようなプレス音と蒸気を噴出する音が混ざったような待機音が流れ始める。

「変身!!」

ガギン!!!

【潰れる!流れる!溢れ出る!】

【ROBOT IN GREASE!!】

【ブウルルウウアアアアツツ!!!】

レンチを思いっきり下げると、スクラツシユゼリーが両側から押し潰された。その直後、龍兎の周りをビーカーのような装置が包み、中に黒いゼリー状の液体——液化装備である『ヴァリアブルゼリー』が満たされる。ヴァリアブルゼリーが顎あたりまでくると、ビーカーが捻れて収縮し、龍兎のスーツになった。そしてミイラのようになった頭部——スクラツシユファウンテンから大量のヴァリアブルゼリーが噴き出る。

噴き出されたヴァリアブルゼリーは龍兎の上半身に降り注ぎ、徐々にアーマーを形成していく。すると突如ヴァリアブルゼリーが弾け、上半身を黒いアーマーで固めた龍兎が姿を見せた。

『仮面ライダーグリス』……見参」

『……はあああああ!!!?』

当然、生徒会メンバーは大声を出す。鈴音さえも目を大きく見開き、梓はなぜか滅茶苦茶ハイテンションになっている。

「ま、まさかRシステムか!!?そんなのをどうやって!?何なんだそれは!!!」

「……ああ、そういや自己紹介してませんでしたね。Rインテリジェンス代表取締役社長補佐を務めています、機丈龍鬼です。以後よろしく。コイツはつい最近完成した最新型ですよ」

『ええええええ!!!?』

唐突なカミングアウトに生徒会メンバーは再び奇声を上げた。

「……さて、いきましようか?」

「……!は、始め!!」

「さーてと」パンツ!

「ひっ!!!」

「心火を燃やして……ぶっ潰すツ!!!」

ガギン!!!

【SCRAP FINISH!!】

「オルルルウアアアア!!!」バシユウウウウ!

ドゴオオオオツツ!!!

「ぐっはああああ!!!?」ドガアアン!

レンチを再び下げると、肩と背中に付いた噴射口——スクラツシユノズルから大量のヴァリアブルゼリーを噴き出し、その反動で加速した龍兎のつま先蹴りが服部の腹を正確に捉え、壁に叩きつけた。服部はそのままうつ伏せに倒れる。気絶したのか、ピクリとも動かない。

「……………し、勝者！機丈龍兎!!」

「ふう、テスト完了つと」 シュウウ…

龍兎はドライバーからスクラツシユゼリーを抜き、変身を解除した。

「き、機丈くんって、Rインテリジェンスの副社長だった、の……!?!」

「はい。そうですけど?」

「そ、それってRインテリジェンスの最新作なんですか!!?」 キラキラ

「うおっ!!?な、なんすか!?!」

「ふわああ…………この独特なフォルム、しっかりとした作り込み…………精巧なアイテムの挿入口…………全てにおいてかっこいいですう…………」

「…………よし、しまうか」

「あの、機丈くん！貸してください!!」

「いやあの、これ一応明日公表しますんで」

「なら触るだけでも!!」

「いやちよつと」

龍兎がケースにドライバーをしまおうとすると、梓が小動物のように纏わりついてきた。鈴音曰く、どうやら彼女はデバイスオタクのようだ。

「……………で、狸寝入りが下手な副会長。何か言うことあるんじゃないですか?」

「……………ああ…すまなかつた司波さん。目が曇っていたのは僕だったようだ。こんな実力者に気づくこともできなかつた…」

「…………いえ、もう気にしていませんから」

「…………じゃ、今日はお開きですか？」

「いや、服部の了承も得たことだし、達也君と一緒に風紀委員室に来てくれ」

「…………さつさと行くか」

「そうだな」

手早く用事を済ませるため、二人は演習場を後にする摩利についていった。

第6話 『バトル要素あるラブコメかその逆って少ないかも一人はめっちゃくちや強いけど生活力皆無な美少女いるよね』

——……風紀委員本部にて

「少し散らかってるが、適当に腰かけてくれ」

「これは……」

「……………ひつでえ……」

達也と龍兔の二人は決闘——という名の新商品お披露目会——に勝ち、晴れて風紀委員となったので、その本拠地であるごみ屋敷……もとい、風紀委員室に来ていた。尚、この部屋は生徒会室から直で来れる。

「はあ…委員長、この部屋を片付けても？ 魔工技師志望としてこの状況は少し看過できません」

「魔工技師？ 君の腕でか？」

「国際基準では、取れてC級ライセンスですよ」

「自分はそもそもCADに触れるのは日常茶飯事ですから。この状態は見過ごせません」

そう言つて二人はテキパキと片付け始める。

「すまないな」 トン

「机の上に座るのは行儀悪いですよ」

「おっとすまない」

謝罪してきたが、反省してるつもりがなさそうなので、龍兔は切り替えて掃除を続ける。

「委員長。これの中身を見ても良いですか？」

「構わんよ……そうそう、達也君を風紀委員会に勧めたのはイメージ改善の意味もある。君が風紀委員に入ってくれば、二科生からの反感も減るだろ」

「その代わり一科生からの反感が増えそうですがね」

「同感」

「一年ならそう悪しき風習に染まってないだろ」

「ところがどっこいなんですよ……」

「ええ。昨日いきなり認めないと言われました」

「森崎か？ 彼は教職員推薦で風紀委員に入る事になっている」

「なるほど……えっ!？」

「ほいっと」パシツ

「すまない」

軽く流しそうになった達也だったが、その意味をすぐに理解して操作中の端末を落とした。ギリギリで龍兎がキャッチしたので問題はなかったが。

「意外だ、君でも慌てるんだな」

「それは、一応人間ですから」

「人間誰でも慌てたりはしますよ。てか、アイツ入れたら達也入れる意味無いんじゃない？」

「そうか？」

「いや、「そうか？」じゃないでしょうよ……」

「戻りました委員長！速捕者ありません！」

「姐さん、戻りまし……ありや？姐さん、こりや貴方が片付けたんで？」

「……………」コツコツ

スパアン!!

「ごふっ!!?」

「わークリーンヒットだー(棒)」

「その言い方をやめろと何度言ったらわかるんだ鋼太郎!」

「わかりましたからそんなポンポン叩かないでくださいよ姐さ……委員長。……ん?ソイツら新入りですかい?」

「そうですけど?」

「…………へえ。紋無しですかい」

「辰巳先輩!その表現は禁止用語に抵触する恐れがあります!この場合は二科生と言うべきかと!」

「お前ら、そんなんじや足元をすくわれるぞ? 此処だけの話、さつき服部が横にいる生徒に足をすくわれたばかりだ。二科生の彼は相棒らしい」

摩利の発言に、入ってきた二人——辰巳鋼太郎と沢木碧はさつきまでとは違う意味で達也たちをジロジロと見てくる。そして、鋼太郎が口を開いた。

「ソイツは逸材ですね」

「は?」

「風紀委員は一科生である事の優越感に浸ってるばかりのヤツじゃないんだ。アタシがこう言った性格だからね。真由美も十文字もそういった意識の少ないヤツを推薦してくれる。まあ、教職員枠のヤツはそうはいかなかったがね。だから君にとっても此処は居心地が良いはずだよ」

「ああそうだ、三年の辰巳鋼太郎だ。よろしく」

「二年、沢木碧です」スッ

「一年の司波達也です」パシッ

「……………ん?なんで離さないんだ?」

そろって出された手を握り、自分も自己紹介をした達也だった。しかし龍鬼は、沢木が達也の手を離してくれないのに疑問を覚えた。

「十文字さんと言うのは、課外活動連合会、通称部活連の会頭の事だよ。それから、自分の事は苗字で呼んでくれ。く、れ、ぐ、れ、も、名前で呼ばないようにな。無論君もだ」

その瞬間に達也の手に凄まじい圧力が掛かってきた。龍兔の耳にミシミシと幻聴が聞こえるほどのパワーで。

「分かりました、沢木先輩」

しかし達也は手首を細かく捻って、握られた手を素早く解く。その体術に、沢木より辰巳が驚いた。

「へえ、大したもんだな司波。沢木の握力は百キロ近いってのによ」

「魔法師の体力じゃありませんね……」

「そうか？」

「(……………だめだこりゃ)」

?????????

数日後、部活勧誘期間が始まり、龍兔と達也は集まってすぐに森崎に絡まれたりしたものの、パトロールを始めた。

「……………さて、どこに行こっか……ん？」

龍兔がスタスタ歩いてみると、第二小体育館に向かう達也とエリカがいた。どうやら見回りに行くようだ。

「……………どうせだし一緒に行くか。おーい!!達也ー、エリカー!」

「ん？あつ、龍兔くんじゃん！」

「パトロールはいいのか？」

「それこっちの台詞だよ。第二小体育館行くんでしょ？一緒に行こうよ」

「いいね！早く行こっ！」

そう言ったエリカに、達也と龍兔が続いた。

?????????

第二小体育館では、剣道部が演習をしていた。

「ふーん、魔法科高校なのに剣道部があるんだ」

「何処の学校にも剣道部くらいあるだろ」

「ところが、そうでもないんだなこれが」

「そ。魔法科高校では、剣道じゃなく剣術をやる生徒の方が多いから、剣道部は珍しいのよ」

「そうなのか、剣道も剣術も同じだと思ってたよ」

「本当に意外ね……達也君は武器術の腕も相当だと思いの……あそっか！達也君って武器術に魔法を併用するのは当たり前だと思ってるでしょ！ひよつとして魔法以外にも、闘気とかプラーナとかで術を補完するのが当たり前だと思ってるんじゃない？」

「ちよいちよいエリカ、ボリユーム下げて」

「へ？……あつ」

急にエリカが出した大声に反応して、周りから少しキツイ視線が集まった。

「当たり前じゃないのか？ 身体を動かしてるのは筋肉だけじゃないんだぞ？」

「達也君には当たり前でも、他の人にはそうではないのよ……………」
「しても……………」

その視線の先で、レギュラークラスの女子が綺麗に一本を決めていたのを見て、二人は感嘆の息を吐いた。鮮やかに決まったかに見えたのだが、エリカは何やら不満そうにしている。

「……………どしたの?」

「だってさ、台本通りの一本なんてつまらないじゃない?これって演習じゃなくて殺陣だよ殺陣」

「いくら真剣勝負だとは言っていても、仕方ないんじゃないか?」

「何ですよ?」

「本当の意味での真剣勝負は、要するに殺し合いだからな。そんなものを学校で見せる訳には行かないだろ」

「たしかに。それで新入生がドン引きしたら勧誘どころの次元じゃないからね」

「……………二人とも大人なんだね」

「思い入れの違いだと思うが」

「価値観の違いもあるんじゃない?……………てかなんかマズイ展開になってるのは気のせい?」

「!?」スツ

龍兎たちの視線の先では、二人の生徒が何やら言い争っていた。

「……………つて、あの二人!」

「知ってるのか?」

「まあ、直接の面識は無いけどね。女子の方はさつき話したように全国女子剣道大会準優勝の壬生紗耶香で、男子の方は桐原武明、コッチは正真正銘剣術の関東大会チャンピオンよ」

「全国大会には出てないのか?」

「剣術大会で全国戦があるのは高校からなの。だから関東チャンピオンでも十分凄いのよ」

「なるほど」

「……感心してるとこ悪いけど、早く行こう」

「ああ」

そう言つて、達也と龍兎は争いの起こっている方へ向かった。

?????????

「桐原君！如何して大人しくしてられないの！」

「おいおい心外だぜ壬生。俺は剣道部のデモを手伝ってやったんだぜ？」

「見え透いた嘘言わないで！貴方が先輩に暴力を振るつたと風紀委員に知れたら、最悪貴方一人の問題では済まないのよ！」

「暴力？お前こそ何を言ってるんだ？俺は面の上から竹刀で叩いただけだぜ？それで気を失つたのはソイツが未熟だからだろ」

「…如何やら口で言つても分からないようね」

「へえ。なら如何するんだ？」

「(……………うっわ、一触即発だなあ……)」

桐原と言う男子が暴力を働いたのか、それとも剣道部の人間が弱かっただけなのかは、その現場を見てない二人には判断出来ないし、ここまで盛り上がってるのに水を差すのも無粋だと思つて達也は一且傍観する事にした。尚、龍兎は既に腰にCADを着けている。

「ここまで口で分からないって言うなら剣で分かせてあげるわよ！」

「おいおい、剣道で剣術に勝てるつもりか？可哀想だから魔法は使わないでやるよ」

「魔法ありきの剣術で、純粹に剣の道を磨いた私に勝つつもりなの？」

「自惚れもそこまでいくと滑稽よ」

互いに互いの競技を貶しあつてゐるようにも見えるが、二人はいたつて真剣だ。三人にもその事は分かつていた。

「始まるな」

「そうね……」

「個人的には壬生先輩に軍配かな？」

辺りが静まりかえり二人が構えた……と思つたら桐原がいきなり壬生の面を狙つた。防具は着けてないので当たれば怪我では済まない可能性だつてあるのだ。

「いきなりね」

「あれはブラフだな。桐原先輩に面を打つつもりは無い」

「同感。ただ、それは悪手だね」

二人には桐原の面は壬生が避けることを見越した牽制だと思えた。実際に決めに行くなら途中で勢いを殺したりはしないからである。

「準優勝でこれなら、優勝者はどれだけ凄かつたんだ？」

「これ以上つてちよつと想像つかないな」

「違う……アタシの見た壬生紗耶香の剣はこんなレベルじゃなかつた」

目の前で繰り広げられている剣捌きを見て、二人は純粹に驚き、感心していたのだが、エリカの驚き方は二人とは少し違つた。

「たつた二年で此処まで腕を上げるなんて」

驚きながらも、好戦的な視線を隠しきれてない所をみると、エリカはきつと彼女と戦いたいんだろうなと達也は思つたのだつた。龍兎は見ないフリをしている。

「どっちが勝つと思う?」

「壬生先輩だろ」

「あ、やっぱそうだよね」

エリカの質問に、達也は一瞬の間を開ける事なく答えた。龍兎はそもそも壬生が勝つと思っていたようだ。

「理由は?」

「技を制限して勝てるほど、二人の実力には差はない。そして桐原先輩は面を狙えない分更に不利だ」

「そうだよ。桐原先輩はあんなこと言ってるけど、どこか躊躇してるところがある」

「なるほど……」

二人の解説に、エリカは納得したようにしきりに頷く。と、そんなやり取りをしてる間に互いが決めに掛かった。

「!!」

バシイイイ……!!

「桐原先輩の小手は浅いな」

「その上壬生先輩のはかなり深い」

「二人の言った通りだったね」

僅かの差で壬生の突きの方が深く決まっている。正式な試合でもこの状態は壬生の勝ちだと判定されるだろう。

「諦めなさい、桐原君。真剣なら致命傷よ」

「……真剣だったら? そうか壬生、お前は真剣勝負をお望みか? な

ら——」ピピピッ

負けを認めるように壬生が言うと、桐原は不敵に笑い出した。そして腕に巻いてあったCADを操作して、魔法を発動する。

キイイイイイイ!!!

「なんだこれ!?!」「うつるさつ…!?!」

「そおらっ!!」ブンッ!

「くっ!!」チッ!

「如何だ壬生、これが真剣だ!そしてこれが、剣道と剣術の差だ!」
ブオンッ!

「達也!振動系魔法の『高周波ブレード』だ!」

「ああ。止めよう」

「ラジャー!『ビートクローザー』!!」

龍兎がそう言うと、音声認証システムが作動して腰に着けたCAD——ビルドドライバーから一本の剣——ビートクローザーが顕現される。それを持って、龍兎は二人に割り込み、桐原の高周波ブレードがかかった竹刀を受け止めた。

「はい、ごめんなさいね!!」ガギイン!

「な!!?誰——うおおおっ!!?」グオッ!

ドガアアン……………!

「…お粗末さまです」

「使い方がおかしくないか?」

「な、なんだあいつら?」

「おい、アイツ二科生だぞ!?!」

「嘘だろ?二科生で風紀委員?」

二人を、正確には達也の肩を見て周りが騒ぐ。

「…こちら第二小体育館。魔法の不適正使用による逮捕者一名。多分肩イッてると思うんで担架をお願いします」

『了解した。すぐにそちらに向かわせる』

「ありがとうございます」

「おい!?なんで桐原だけなんだよ!?剣道部の壬生だって同罪だろ!!?」

「魔法の不適正使用により、桐原先輩には同行をお願いします」

「俺らのお仕事は校内での魔法の不適正使用の取り締まりですから」

「ふざけるなよ!後輩と雑草の分際で!」

剣術部員の一人が龍兎に殴りかかろうとした時だった。

「来い!『クローズドラゴン』!!」

ヒュン!

「うおっ!?な、なんだ!!?」

『ピイイイイ!!』カシヤツ!

突然、窓から掌サイズの胴体が異常に太い龍——クローズドラゴンが剣術部員の前を掠めた。そのままクローズドラゴンはガジェットになって龍兎の手に収まる。

「ふっ!!」カチャチャチャチャ シャキン!

【WAKE UP!!】

【CROSS—Z DRAGON!!】

【トンカンテンカントンカンテンカン!!】

龍兎はガジェットとなったクローズドラゴンをドライバーに挿し込み、横にある『ボルテックレバー』を回転させると、龍の雄叫びの

ような音声と共にすぐ横にあるエネルギー生成機関である『ボルテックチャージャー』が虹色に輝きながら臨界駆動を始める。すると、クローズドラゴンに挿し込まれたドラゴンフルボトルの中の『トランスジェルソリッド』がボルテックチャージャーによって顕現された超高速ファクトリーである『スナップライドビルダー』に流れ込み、二つのドラゴンハーフボディと龍を模した追加アーマーを形成する。

【ARE YOU READY!?!】

「変身!!」

【WAKE UP BURNING!!! GET CROSS—Z
DRAGON!! YEAH!!】

「な、なんじやそりやああ!!?」

「あ、Rシステム!」

「ビビんな!!市販モデルだろ!虚仮威しだ!」

「魔法で吹っ飛ばせ!!」

「市販モデルかどうかは試せばわかるさ。一つ言っておくが、今の俺は負ける気がしねええ!達也行くぞ!逮捕者のバーゲンセールだああ!!」

「ハア……………つ!!」ダツ!

龍兎は面倒事に巻き込まれると人格が変わるな、
と思いつつ、達也は龍兎に続いて襲いかかる剣術部員たちを迎撃した。

尚、この数分後に剣術部員は桐原を除いて外の運動場に全員纏めて龍兎の手によって犬神家状態になった、とだけ補足しておく。

第7話 『逆光とかで素顔分らない奴が変身すると
かつこよさ二割ぐらい増すよね』

あれから数日が経った。

部活勧誘期間が終わってCADの携行制限が復活したとはいえ、まだまだ問題はあつた。原因は二人への——正確に言えば達也への嫉妬と一科生としてのプライドが引き起こす事故に見せかけたトラブルだ。

達也が一人の時には、地面を陥没させようという輩もいたらしい。

そして、ある日の昼休み、生徒会室——

何の変哲もないランチタイムに、摩利が爆弾

——ダイナマイト100本分のレベル——を投下した。

「そう言えば達也君、昨日剣道部の壬生をカフェで言葉責めにしてた
と云うのは本当かい？」

『!!』

この発言に、生徒会室の時間が止まった。深雪も真由美も鈴音も、あ
ずさまでもが摩利の発言を真に受けたようだった。龍兎に至っては
ハンバーグを持つ箸がバグった映像のように固まっている。

「…委員長も年頃の淑女が言葉責めなんてはしたないですから言わな
い方がいいですよ」

「フツ、ありがとう。私を淑女扱いしてくれるのは達也君だけだな」

本気で照れ掛けている摩利に、達也は反撃とばかりに言葉を続け
た。

「自分の彼女を淑女扱いしないとは、先輩の彼氏は紳士的ではないんですね」

「!!そんな事ない! シュウは……あつ」／／／

それを言ってから失言だったと気付いた摩利は、立ち上がりかけた格好で固まった。その隣では真由美が噴き出しそうなのを必死に堪えているのを、摩利は視界の端で捉えていた。無論、射殺さんばかりの鋭さで。

「……オホン。それで、君が壬生を言葉責めにしてたと言うのは本当か?」

「あの、それあんまり言い換えてないです」

「委員長、深雪の教育に良く無いのでそのような言葉はちよつと……」

「あの、お兄様? 私の年齢を間違えてはおりませんか?」

「(………シスコンというか親バカかな?)」

自分の事を言われ、深雪は少し慌てたように達也に抗議した。龍兎はしらけた顔をしつつ、脳内での確にツツコンでいる。そして達也は、先日壬生と話した内容を全員と共有した。

「……という内容です」

「そんな事が……」

「しかし、だ。それは完全に壬生の勘違いだ」

摩利が言うように、風紀委員は完全なる名誉職であり、内申に影響する事も無いのですがみついでまで就く役職では無い。その事を知っていた達也は、紗耶香が誰かに洗脳されているのを疑っていた。

「そのようなデマを流してる連中に心当たりは?」

「ううん、噂の出所なんて探しようが無いでしょ」

「あれば注意してるさ」

「(……………なんかわざとらしいな)」

何かを誤魔化そうとしている二人を見て、達也と龍鬼は、真由美が真相を知っていて隠そうとしていると核心した。さつきから深雪が達也の袖を引っ張り、「踏み込みすぎでは？」と言う視線を向けているが、今の達也は踏みとどまろうとはしなかった。

「俺が聞いているのは末端である事無い事吹き込んだるヤツらでは無く、その背後の連中の事です。恐らくですが、『ブランシュ』が絡んでると思われます」

『!!?』

「え!? ブランシュって、あのブランシュ?」

「ああ」

反魔法国際政治団体『ブランシュ』。この名前は秘匿情報扱いで、国が情報を完全にシャットアウトしているはずなのに、一介の高校生である達也が何故この名前を知ってるのか、というのが三人が驚いた理由だろう。

「秘匿情報と言っても噂の出所を全て塞ぐ事は出来ませんよ。こう言った事は隠さずに全て公開した方が良いのですが」

「……………まあ、情報隠蔽なんて言うのは簡単だけど、いざ実行ってなると勝手が違うものですね」

「そう……………よね……………なのに私たちはこの事から避け……………いえ、隠そうとしてる」

二人が言った事を自分でも思っていた真由美は落ち込んだようにそんな事を言う。その言葉に鈴音も頷き、若干凹んでいる。

「仕方ないですよ」
「え？」

だから達也からの慰めの言葉があるとは思って無かったのだろうか、真由美がガバリと顔を上げた。

「此処は国立の施設で、国の方針に縛られるのは仕方ないと思いますよ。会長のお立場では、隠すのは仕方ないでしょう」

「司波君……慰めてくれるの？」

達也がぶつきら棒に言い放った言葉に、真由美の表情がすぐに晴れていく。落ち込んだ真由美を慰める形になったのを見て、摩利がイタズラっぽい笑みを浮かべてからかう。

「何だ？ 真由美も完全に達也君にやられてるようだな。落ち込んだ所を慰められて完全に惚れたか？」

「ちよつ、摩利!？」

完全にからかつて遊んでるのだと達也は分かっていたのだが、真由美も鈴音も本気に受け取ってるようだった。そしてもう一人本気で受け取った少女が……

「お・兄・様？」

「み、深雪？」

「達也君も隅に置けないな。落ち込んでる女をしっかりと慰めてハートを驚掴みにするんだから」

「でも、追い込んだのも司波君では？」

「(……あちよ、委員長、止め——)」

あずさの発言に、摩利が便乗するように言葉を続ける。龍兔は止めようとしたが、遅かった。

「自分で追い込んで慰めるか、凄腕ジゴロだな」

ちなみに、この発言で生徒会室に猛烈な吹雪が吹き荒れたとか吹き荒れなかったとか。

「……………さてと、そろそろ時間ですし、俺は教室に帰ります」

「ああ待て、最後に一つだけ」

「何ですか？」

立ち上がった達也に、真由美とじゃれあっていた摩利が静止の声を掛けた。

「壬生の誘いに、君は何て答えたんだけ？」

「答えを待ってるのは俺の方ですよ」

そう言い残し、達也と深雪は教室を去った。

「(……………にしても、『ブランシユ』かあ……………反魔法師集団が魔法師使
うってなんかアレだけど……)」

龍兎はそんな素朴な疑問を抱いていた。

?????????

その日の放課後、龍兎は帰宅途中だった。

「……………さて、今日はフルボトルの続きを——」

っ!?なんだこれ!キャスト・ジャミング!?なんだってこんな街中で

——!!あの制服!!?」

龍兎は一つの路地裏を見た。そこで一瞬チラついたのは、紛れもなく第一高校の制服だった。

「っ!!」パカッ!

「スクラアアツシユドオライバー!!!」

龍兎はスクラツシユドライバーを腰に当てて装着し、服を大きく揺らしながら路地裏に駆け込んだ。

「——何してくれてんだ?お前ら」

?????????

「この世界に魔法師は必要無い!」ブオツ!

懐から出したナイフで倒れている三人に襲い掛かる暴漢、この時ほか、雫、赤髪の少女——エイミィは死を覚悟したのだった。

「何してくれてんだ?お前ら」
『!?!』

暴漢たちは、路地裏の先——三人の背中の方を凝視する。そこには、同じ一高の制服を着た誰かがいた。男子だろうが、逆光でよく見えない。

「……………まあ何にせよ……」スッ

「…お前らを逃がす道理も、義理も無い」

【DANGER!!】

『!!?』

【CROCODILE!!】

男子生徒——龍兔が罫のような模様が入った紫のボトル——クロコダイルクラックフルボトルのキャップを回すと、罫が入るような音と共に不気味な待機音が流れる。龍兔はそのままそれを腰のスクラッシュドライバーに装填した。

「変……身……!!」

ガギン!!

【割れる!喰われる!砕け散る!】

【CROCODILE IN ROGUE!!】

【オオオオオルウアアアア!!】

【キヤアアアアア!!】

龍兔がレンチ状のレバー——アクティベイトレンチを下げると、ビーカー状の装置——ケミカライドビルダーが展開され、龍兔を包む。すると、ケミカライドビルダーの中にボトル内部のトランジエルトリッドが満たされる。次の瞬間、横から鰐のような装置がケミカライドビルダーを噛み砕いた。そして龍兔は、鰐を彷彿とさせるスーツを纏った戦士——『仮面ライダーローグ』へと変身した。

「なに!!!?」

「オーケーエイミィ。で、だ。お前ら何でこんな危ないことしてたんだ？」

「……………え、えくくとそれは……………」

「……………説明して？」

話によると、三人は達也に魔法攻撃を仕掛けたと思われる生徒——剣道部主将の司甲を追ってこの路地裏に来たが、暴漢たちに待ち伏せされていたとのことだ。

「……………わかった。この件は俺たちがやる。君たちは金輪際こういうことを独断でしないように！俺が来なかったら死んでたかもなんだからね!？」

「……………ごめんなさい……………」 シュン……………」

「……………まあ何にせよ、間に合ってよかったよ。もし間に合わなかったら、自分でも何してたらわかんなかったから」

「……………ありがとう」

「よろしい。じゃ、僕は帰るから」

「あ、あの！ありがとうございました!!」

「次にこんなことするなら、ちゃんと行ってね」

「……………はい！」

その後寿和に連絡をして、龍兎は帰宅した。そして上着を脱いだ時、ある違和感に気づいた。

「……………あれ？スタッグフォンの疑似メモリが……………どっかで落としたのか？まあ……………疑似メモリだし、問題は無いか……………また作ればいいし」

??????????

「(…なんとか撒いたか……………)」

路地裏から出てきた眼鏡の男は、一高の制服を着ていた。ただし、肩に一高のエンブレムは無い。

「義兄さんにこのことを知らせな——ん？」カチャ…

男が歩こうとした時、何かが足に当たった。男は訝しげに当たった物——USBメモリのようなアイテムを拾う。

「……………何だ…これは…？」

この日のことを、後に龍鬼は後悔する。

第8話 『塵も積もれば山となるって言うけど塵の山は要らないよね』

龍兎が暴漢たちを倒したわずか三日後――

「……全校生徒の皆さん!!」

「うわあっ!!!?」

「うっせっ!!」

「ポリュームのしぼりの調整ミスったのか!? てか授業中に何なんだよ!!」

『――失礼しました、全校生徒の皆さん! 僕達は学内の差別撤廃を指す有志同盟です!!』

「うるさいぞ! どの馬鹿だ! 抗議してやる!」

「……………何が起きてんの?」

突然のことに龍兎はポカンとしていたが、尚も放送は大音量で続く。

『校内の差別は魔法科実習以外にも及んでいます! 例えば魔法競技系のクラブに割り当てられている予算はそうでないクラブよりはるかに優遇されています! 僕達は魔法師を目指して魔法を目指す者です! しかし同時に僕達は高校生です! 魔法だけが僕達の全てではありません!! 僕達はこの差別撤廃について生徒会と部活連に対し、対等な立場での交渉を要求します!!』

「……………わからんでもないけど、それ今やることなの?――お?」スツ

龍兎の少し膨らんだ特徴的な端末――私用で使っている『ビルドフォン』に着信があった。どうやら深雪にも来ていたようで、深雪も端末を見ている。曰く、放送室が占拠されたらしい。

「……先生！風紀委員の呼び出しがあったので、失礼します!!」

「私も会長から連絡が」

「わかった。行ってきたくれ」

指導教官の百舌谷から許可を得て、二人は——深雪は達也と合流しに行った——放送室へと向かった。龍兎が到着すると、三巨頭らも集まっている。どうやら連中はマスターキーごと鍵を中に持ち込んで立て籠っているらしい。そこにちようど達也と深雪も来た。

その後、達也が壬生に連絡し——深雪はなぜ壬生のプライベートナンバーを知っているのかを問い詰めていた——鍵が開いた瞬間に壬生以外を拘束。その後の話し合いで、二日後に討論会を開くこととなった。

??????????

——……一方その頃、とある廃工場……

「………」様

「なんだ？」

「例のアイテムの改造が完了しました。市販のUSBメモリとは完全に仕組みが違うのと、構造の理解に時間がかかり、できたのはこの一本のみですが……」

「………まあいい。一本あれば十分だ。この一件が終われば複製は可能か？」

「……いえ、かなり難しいかと」

「……おそらく、あの機丈龍兎とかいう餓鬼が何らかの秘密を握っている。司波達也同様我々のモノにすればこの国から魔法師を一匹残

らず消すのも容易い……まあ、これだけでも十分だがな」スツ

【WEATHER!!】

「これさえあれば………クク、ククク………」

フツハハハハハハ!!!」

男——ブランシユ日本支部のリーダーである

『司一』は持っていた骨のようなパーツで包まれた一つのUSBメモリを持って狂喜の笑いを響かせた。

第9話 『狂信的なテロリスト集団とかのボスって大抵ろくな人いないよね』

討論会には多くの——かなり、と言うか完全に真由美の言い出しつぺな割に——生徒が来ていた。割合としては全校生徒のおよそ半分ほどといったところだろうか。

「如何やら皆さんよほど暇なようですね。もう少しカリキュラムを増やすよう校長に進言した方が良いでしょうか？」

「市原、冗談を言ってる余裕があるのは良いが、あまり洒落に聞こえないぞ」

「これ以上増えたら過労死ならぬ過脳死する人が出ると思いますよ」

「なんですかそれは？」

「脳の使い過ぎが死因のことです。今でっちあげた造語ですけどね」
「そうですか」

感情が読みにくいなあ、と龍兎は思いつつ、周囲を警戒していた。

「お兄様、壬生先輩のお姿が見えませんが」

「別の場所で待機してるのかもな。それとも……」

「達也君？ どうし——…なるほど、たしかに」

摩利は、達也が何を考えていたのか聞こうとして、直前に理解した。

「ええ、事前に調べ上げたメンバーの半分しか講堂に来てませんね。司波君の思ってる通り、別の場所に控えてるのかもしれない」

「実力行使組か……面白い」

「委員長、ご自分のお立場をお忘れなき用に」

「……分かってる」

「(……釘刺さなかつたら闘つてたなこりや)」

達也に釘を刺された摩利は、不貞腐れたように短く答える。龍兔は戦闘狂だなど心の中で呟いた。

「此方から打って出るのはマズイよな?」

「専守防衛といえば聞こえは良くても、向こうが仕掛けてこない以上此方から仕掛けるのは駄目ですよ」

「討論しようって言ったのはこちらサイドなのにこちらから手エ出したらさすがに不味いでしょ」

「そうですね……— 始まります」

こうして、真由美対差別撤廃同盟の討論会の火蓋が切つて落とされた。

?????????

——……のだが。

『二科生はあらゆる面で一科生に劣る差別的な扱いを受けている!生徒会長はその事実を誤魔化そうとしているのではないのか!?!』

『今、あらゆるとういご指摘がありました。具体的にはどのようなことを指しているのでしょうか?』

『一科生の比率が大きな魔法競技系のクラブは二科生の比率が高い非魔法競技系のクラブより明らかに予算が手厚く配分されています!これは一科生に対する優遇が課外活動においてもまかり通っている証ではないですか!!』

『それは各部の実績を反映した結果です。非魔法系のクラブであったとしても全国大会などで優秀な成績を収めていれば魔法競技系クラ

ブにも見劣りしない予算が配分されています』

「……………委員長、やっぱ帰っていいですか?」
「なぜだ?」

「これもうただの公開論破ですよ。見ててなんか味気が無いというか……………まあ、もうそろそろ終わりそうですね」

龍兎たちの視線の先では、真由美が最後の一言を言おうとしていた。

「……………私も今の状況を良くは思っていないません。だからこそ、私が生徒会長として開ける最後の生徒総会で、生徒会メンバーの二科生の登用禁止を撤廃する案を提出したいと思います。校則の変更はその生徒総会でしかできないことです。だからこそ、このルールを撤廃することを、私の最後の生徒会長としての成果としたいと思います」
そう真由美が締め括ると、講堂には生徒たちの拍手の嵐が巻き起こった。そこには一科生と二科生の差はなく、純粋な称賛と期待だけが込められていた。

……………こうして万事解決となるはずだったその時、トラブルは発生した。

ガツシャアアアアン!!!

突然、窓からガスを撒き散らす手榴弾が投げ込まれる。しかし、服部が魔法で手榴弾ごとガスを外に排出した。

「風紀委員は直ちにマークしていたものを取り押さえろ!!」

摩利の指示で、風紀委員たちは素早く講堂にいたブランシユの下部組織『エガリテ』のメンバーを取り押さええる。とその時、外から轟音

が響いた。

「!委員長!!俺外の鎮圧に行きます!」

「わかった!気を付けろ!!」

「はい!」

そうやって龍兎は外に出る。

「いくぜ!!」

【ZERO—ONE DRIVER!!】

【JUMP!!】

【AUTHORISE^{認証完了}】

龍兎が腰に装着したベルト——ゼロワンドライバーの認証装置——オーソライザーにバッタがデザインされたキー——ライジングホッパープログライズキーを翳すと、はるか宇宙にあるRインテリジェンス謹製の人工衛星『ゼア』からライダモデルが一高に投下される。数秒後、地上にバッタのようなライダモデルが現れ、威嚇するように鳴くと龍兎の周りをジャンプし始める。龍兎がそのままプログライズキーを構えると、ゼロワンドライバーからパワードスーツ——ライズアーキテクターがフォトンとして正面に出現する。そして龍兎はプログライズキーを展開して叫んだ。

「変身!!」

【PROG RISE!!】

【飛び上がライズ!!】

【ライジングホッパー!!】

【A^空 jump^の to^跳 the^躍 sky^は turns^ラ to^イ a^{ダー} rider^ト who^キ can^ツ fly^ク again^リ】

プログライズキーをライズスロットに装填すると、ライズアーキテクターが投影されたフォトンが龍兔を通過し、直後にライザモデルがいくつかのパーツになってライズアーキテクターを纏った龍兔を守るアーマーとなった。

「いっくぜオオオルウアアアア!!!」

【ATTACHE CALIBER!!】

【BLADE RISE!!】

手に持っていたカバンのようなアイテム——専用武器であるアタッシュカリバーを展開し、龍兔はテロリストたちに向かって駆け出しました。

?????????

「……………取り敢えず、この辺り一帯の掃討は完了した、かな?……………ん?」

倒したテロリストたちを一ヶ所に纏めていると、龍兔は一つの影を見つけた。一瞬見えたその顔には、見覚えがあった。

「……………ほのかたちの写真にあった…ま、やろうとしてることはわかるけど……………ッ!」

状況からして、男——司甲は逃げるつもりだと理解した龍兔はライジングホッパー特有の跳躍力で距離を詰めんと駆け出した。

?????????

「早く逃げねば……!!」

甲は犯人として特定されるのを避けるため、人目を盗んで脱出しようとしていた。が、現実はそう上手くはいかない。

「……………よう司、今日はもう帰るのか?」

「……………辰巳か…この騒ぎだ、部活は休みだろう?だから早めに帰ろうと思つてな」

「そうかい。悪いんだが今しまった携帯の履歴を見せてくれるか?」

「!?…何で……」

「いやなに、簡単な話さ。ウチのボスはちいとばかし感心しない特技があつてな。それでお前が侵入者を手引きした事を自白させてるんだよ」

「ッ!?!」

自分の身が危険に晒されていると理解した司は、自己加速魔法で辰巳から距離を取ろうとした。が、突如現れた人影のせいで足を止める。

「司先輩!…ご同行願います!」

「お前は二年の沢木!!?風紀委員でも指折りの実力者が如何して図書室に向かつてない!?!……………ならば!!」

前方には魔法近接格闘術マーシャル・マジック・アーツ部のエースの沢木、後方には三年の中でも屈指のスピードファイターである辰巳、司は隠し持っていたアンテナナイトを取り出してキャスト・ジャ

ミングを発動し沢木を振り切ろうとした。

魔法ありきの沢木なら、魔法を封じれば勝てると思ったのだ。だが
……

「いいいよいよいしょおおおお!!!!」

ラ イ ジ ャ
グ イ ン パ ク ト

「ごっはああああ!!?!?」

鋼太郎をジャンプで飛び越えてきた龍兎による不意打ちのキックをモロに喰らい、地面とキスしながら頭からスライディングするハメになった。

『!!?!?』

「先輩。やるなら手早くいきましょ?時間は有限ですよ。特に今みたいな緊急事態だと」

「……機丈か?」

「はい。すみませんが、この男の始末は任せてもよろしいですか?」

「ああ。元は我々のやるべきことだったからね」

そう言って、沢木と鋼太郎は甲をずるずと引きずりながら校舎に向かっていた。

数分後……………

「……………お？達也たちだ」

龍兔が正門でアイテムのメンテをしていると、校舎から達也、深雪、エリカ、レオ、桐原、そして部活連会頭である十文字が歩いてきた。

「…どうしたの？」

「今からブランシユのアジトに向かう」

「……………はいい??？」

「すまないが一緒に来てくれ」

「いやいやいやいや、まずなんでそういう流れになったか説明してくれない!!？」

達也曰く、壬生たちはブランシユのリーダーである司一に操られていたらしく、壬生の罪を消すためにブランシユの殲滅に向かうそうだ。

「……………ちなみに、移動手段は？」

「十文字先輩が車を用意してくれる」

「……………僕は先に行くけど、一応一人だけなら同行できるよ？」

「なに？今すぐ乗り物を用意できるのか？」

「はい。バイクですから、同行できるのは俺とあと一人だけですけど、誰が行きます？」

「……………俺が行く」

「桐原先輩がですか？」

「ああ。いけるか？」

「わかりました」

そう言つて、龍兔はバイクのハンドルのような装置——アクセルドライバーを腰に装着する。

【Acceler!!】

「準備するので、できたら俺に乗ってってください」

『……………は?』

「変……………身……………」

ドルルン!!

ブオオン!!ブオオオン!!!

【Acceler!!】

ブオンブオンブオンブオンブオブオブオオン!!!

龍兔がアクセルドライバーに専用の『アクセルメモリ』を装填し、ハンドルを捻ると、エンジン音と共にメーターのようなエフェクトが展開される。次の瞬間、龍兔は紅のバイクのようなアーマーを纏う戦士——『仮面ライダーアクセル』へと変身した。そして龍兔はアクセルドライバーを腰から外し、正面に掲げる。

「はっ!!」

ガチャジャキキキン!!!

ドルルウン!!

「……………」

『……………」

『(お前(貴方)がバイクになるの)!!?』かよ!』

達也と十文字以外の全員の心がシンクロした。

「早くしてください」

「……………つたく、わーっつたよ!!」

桐原は頭を数回搔くと龍兎に飛び乗った。

「振り切りますよ!!十文字先輩。お先に行ってくださいね」

「ああ」

ドルルン!!

ギギヤギヤギヤバルルルル!!

「うおおおおお!!?」

そのままエンジンを吹かし、桐原を乗せた龍兎は大きく一度ウイリーをすると、タイヤを素早く回転させて一路ブランシユのアジトに向かった。

第10話『バトルシーンで強敵と戦う時って大抵強化フォームとか最終フォームがなぜか使えるようになるよね』

龍兎と桐原は現着し、近くにいたテロリストたちを薙ぎ倒していた。それが完了して数分後、爆音を響かせながら達也たちを乗せた装甲車が突撃してきた。そして打ち合わせの結果、龍兎は外にいる残党の殲滅を担当することとなり、エンジンブレードで敵を斬り伏せて一ヶ所に積み上げていた。

「…やっぱ向こうに行ったらよかったかな？」

と、龍兎が呟いた時、ドアから一人の男が転げ出てきた。

「ひ、ひいいいい!!!」

「……………アイツが、司一か…」

「なっ!!」

「逃がすつもりは……………あ、達也。深雪も」

「龍兎か」

「なっ!?!くっ!!!」バツ

「最後のチャンスだ。投降しろ」ガチャリ

達也はCADを向けて言った。

「……………く、ククク……………」

『?』

「ふざけるな……………貴様ら魔法師ごときに使うまでもないと思っていたが、もうやめだ…」スツ

【WEATHER!!】

『!?!?』

「!?それは!!!なんでお前がそれを!!」

「こうなれば……皆殺しだアアア!!!」 バッ!

【WEATHER!!】

「くくくあああああああ!!!」

バチバチバチイイ!!!

一がガイアメモリのスイッチを押し、右耳に刺すと、白を基調とした怪人——ウエザー・ドーパントへとその姿を変えた。

「そんな……なんでアイツがガイアメモリを……」

!!まさか、あの時に落としたやつか!!!」

「……クハハハハ、やはりこれは素晴らしい!!これなら、お前たちごときいい!!!」 バッ!

バチバチバチ!!!

「皆逃げろおお!!!」

龍兔が叫んだ瞬間、一から放たれた雷撃が達也たちを襲った。十文字が障壁を張るも、ウエザー・ドーパントの雷撃はそれをすり抜け、深雪に迫る。

「!!!」

「!深雪!!!」

達也が手を出そうとしたが、間に合わないと思われた。しかし。

「っ!!」 バッ!

バチバチバチイイ!!!

「ぐあああああ!!!」

「機丈!!」

「龍兎!?!」

「龍兎くん!!!」

雷撃が当たる寸前、深雪と雷撃との間に龍兎が間一髪割り込み、雷撃を喰らった。

「ごめんなさい龍兎くん!!私が避けれてさえいれば……………」

「…いや、元はと言えば疑似メモリを落とした俺の失態だ…………ぐっ!!」
ガクツ

龍兎はなんとか立つが、受けたダメージは小さくなさそうだった。

「……………しっかし、よりによってウエザー・ドーナントとはな……………こりや、こつちも覚悟を決めないといけねえ、か……………」スツ

ガチャン!!

龍兎はエンジンブレードを捨てて、アクセルドライバーからアクセルメモリを引き抜き、一つの装置がついたガイアメモリを取り出した。

「…全て……………振り切るぜ……………!!」ガチャリ!

〔Trial!!〕

ドルルン!!

ブオオン!!ブオオオン!!!

〔Trial!!〕

パツ

パツ

パツ

パーーーー!!!

ギャギャギャギャ!!パアアアアアン!!

龍兔がメモリー——トライアルメモリを挿し込んでハンドルを捻ると、レースのカウントダウンライトのように装置が発光し、龍兔の身体が一瞬黄色になったと思った瞬間、レーシングカーのような機械が龍兔の周りを高速回転し、レーサーのような蒼いスーツに変身した龍兔が現れた。

『!?!』

「ほう…奥の手があったか………だが!!」バツ!
バチバチバチイイ!!!

「!!」

ギユンツ!!

「はあああつ!!」ドガツ!

「ぐおっ!?!……なるほど、たしかに速い………だがっ!!」バツ

一が雷撃を放つが、龍兔は凄まじい速度でそれを躲して一の腹にストレットをぶつけた。一は反撃に蹴りを放つが、龍兔はすぐさま後ろに跳んで衝撃を殺す。

「フンツ!!」

バチバチバチ!!!

一はすぐさま紅い雷光が点滅する黒雲で龍兔を囲った。

「所詮私の前では虫ケラと同じだ!!」バツ！
バチバチバチイイ!!!

「ふんっ！はっ!!はあっ!!!」ババババ！
「なにっ!?!」

黒雲の間で雷撃が放たれるが、龍兎は凄まじい速度でそれを全て躲し、黒雲の包囲網から出た。

「見せてやるよ…トライアルの力を…！」ガチャツ

そう言うと、龍兎はトライアルメモリをアクセルドライバーから引き抜いた。

「…!!ダメよ龍兎くん!!!」
『!?!』

と、ここで深雪が龍兎を止める。

「貴方、先日言っていたじゃない!!——」

「……………フンフ〜ン♪」キュツキュツ

龍兎は机の上で何かを丁寧に磨いていた。

「……………あら、龍兎くん。それは？」

「!深雪。これ？ダブルにデータを集めてもらって漸く完成したんだ

よ。その名も『トリアルメモリ』。コイツを使えば、ダブルどころか全Rシステムの中でも一、二を争う速度で動ける。んだけど……」

「けど？」

「コイツの『マキシマムドライブ』が欠陥品レベルでね。ボタンを押してからマキシマムドライブまでに、10秒でケリを着けないといけないんだ。それを切るのがめっちゃ難しくくてね。完成から今日まで、自己ベストでも10秒02以上にどうしてもなっちゃうんだよ」

「そうなの……いつか越えられるといいわね」

「越えられるじゃない、越えてやるさ」

「……ああ、そうだな。だが、上等じゃねえか」

『!?!』

「今ここで決めねえでいつやるんだ？今までできなかつたなら……今、限界なんざ越えてやるさー！」

カチツ ブンツ！

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP

龍兎はトリアルメモリのボタンを押して上に投げ、一に向かって駆け出した。

「ぬうううっ!!!」

バチバチバチイイ!!!

「はっ！ふっ!!おおっ!!」バババツ ドガツ！

「ぐふうっ!!!」

「たっ！ふっ！オオオオ!!!」ドドドドドド！

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP

「ぐうううううう!!?」

龍兎は一に肉薄して残像を残しながら連続蹴りを叩き込む。その蹴りも、Tの字のような残光を何本も映していく。そして龍兎は一際強く一を蹴り跳ばし、落ちてくるトライアルメモリをキャッチした。

【Trial!! MAXIMUM DRIVE!!】

98

「9. 8秒。それがお前の絶望までのタイムだ」

「ぐおおおおお!!?!」

チユドオオオオン!!!

龍兎の言葉と同時に、一は爆発した。そして爆炎の中から、満身創痍の二が吐き出される。

「……………あり、えな……………い……………まだ、終わ、ら……………」

息も絶え絶えになりながら、一は身体から排出されたガイアメモリに手を伸ばす。

パリイ…ン……………!

「……………!!」ドサッ

しかし、龍兎の必殺技の衝撃でボロボロだったメモリは砕け散り、それと同時に一は倒れた。

こうして、一高を騒がせたブランシユによる襲撃事件は幕を閉じたのだった。

?????????

——……事件から数日後。

「……お兄様。今日で壬生先輩は退院ですか？」

「ああ。医師が言うには、先日から急に体調が回復したそうだ」

「………」ジーツ

「…使っていないぞ?」

「?ではなぜ………」

深雪はてつきり、達也が固有魔法の『再生』を使って壬生を治したと思っていた。しかし、達也は違うと言っている。深雪は首を傾げつつも、達也、龍兎、エリカ、桐原と一緒に壬生がいる病院に向かう。しかしその道中でも、なぜ壬生が急に快方に向かったのか気になっていた。

「(………いや、バレなくてよかった)」

尚、その犯人が龍兎だということには深雪どころか全員気がついていないようだ。

「(壬生先輩が回復したのは、昨日こっさり病院に入って『ドクターフルボトル』持たせて振らせたからなんだけどね。ま、言わないほうがいいか)」

「桐原君! 達也君も!!」

「先輩、退院おめでとうございます」

「ありがとう。皆のおかげよ」

「さーや、なに言ってるのよ。せっかく桐原先輩いるんだしいいからさっさと告つちやいなよ〜」

「ちよつとエ、エリちゃん!!?」

「『さーや』に、『エリちゃん』ねえ……すっかり意気投合してるよね……何があつたんだろ……でも）自分は片手で数える程度でしたけど、そういうや桐原先輩毎日来てましたよね」

「よね〜。目を覚ましてないのいいことに『壬生、すまねえ』とかカツコつけて言ってたもん」

「てめゴルアアア!!!」ズドドドド!!

「キヤーヤバンジンヨータスケテー」タツタツ…

「……………」U

「……………」スツ

「!達也。どしたの?」

「…まだ礼を言っていなかったからな。深雪を助けてくれて、ありがとう」

「いやいや、司一の件なら、元はと言えば俺の失態だったんだから言わないですよ。これからはもうちょい危機感持たないといけないなあ…」

「……………」

「……………」師匠。どうでしたか?」

「いや〜、無理だったよ」

「!?!」

「どうやら彼には幻術が効かないみたいでねえ。かなり頑張ったけど、あれの相手をするのはさすがに僕一人じゃあ難しいよ」

「……………」

—

—

「……………」

「…ん？どしたの？」

「！いや、なんでもない。深雪。行こう」

「はい♪」

「んじゃ俺も」

そう言つて、三人は歩き出した。

空は快晴。涼しげ微風がとても心地好い。

九校戦編

第11話 『他校と一緒にする体育大会とか憧れるよね』

『九校戦』

それは、全国に九つある魔法科高校から選抜された選手らが、各々の高校、そして自身の誇りを賭けて凌ぎを削り合うものだ。

各校の代表選手は六つの競技で競い合う。

『スピード・シューティング』

選手たちから『早撃ち』と呼ばれるこの競技は、選手のいる台の両サイドから飛んでくるクレイ、合計100発をどれだけ魔法で壊せるかを競う。

この競技で大切なのは、先を考えて綿密に練る戦略だ。互いの選手の魔法力、スタミナがどこまで持つか、どんな魔法でクレイを壊すか、そういった選手と作戦スタッフ、エンジニアとの複雑な連携が大切になる。

『クラウド・ボール』

この競技は、現代でいうところのテニスに似ていると言えるだろう。

仕切られたコートの中で、複数の——最大で9個のボールをラケット又は魔法を使って相手側のコートに打ち込み、何回相手のコートに

ボールが落ちたかを競う。

この競技は、選手のスタミナと動体視力、判断力が鍵となる。ボールの軌道を察知し、打ち返すのか、はたまた一つのボールを諦めて複数のボールを相手コートに入れるか、そういった試合中の選手同士の駆け引きが大切だ。

『バトル・ボード』

この競技は、サーフィンとカーレースを組み合わせた競技だ。

ルールは簡単、一番早くゴールした選手が勝ち。

ただ、ここに魔法が加わるので単純かと言われるれば、そうではない。何故なら、この競技では、魔法による妨害などが許可されているからだ。無論選手に直接放つのはアウトだが、『水面に対して魔法を使う』のはアリだ。

さすがに水を沸騰させる、というレベルはダメだが、魔法で波を起すにしても、それが自分の加速に使うのか、はたまた相手の妨害に使うのか、選手の工夫も大事な要素になる競技だ。

『アイスピラーズ・ブレイク』

互いの陣地に設置された12本の氷柱を倒し合い、先に相手の氷柱を全て倒した方の勝利となる。

氷柱は何も倒すに留まらず、粉々に粉砕するなど、とにかく壊せばいい。つまり選手の魔法力がいかに高いかが鍵だ。というのも、この競技はその性質上、決着は早く着く。なので、開幕と同時にいかに強力な魔法で氷柱を倒すかが勝負の決めてとなりやすい。だが、敢えて長期戦に持ち込み、相手のスタミナを削ってチャンスを待つのも手の一つだ。

『モノリス・コード』

男子限定の競技で、三人の選手が草原や市街地、森林といった様々なステージに配置された互いの『モノリス』と呼ばれる板を専用の無系統魔法で割って、そこにある512桁のコードを打ち込むか、相手選手を全員戦闘不能にすることで勝ちとなる。この競技は、ステージに応じた戦術や、他のメンバーとの連携が大切だ。防御に徹してカウンターを狙うか、一人を罠にして回りこんでモノリスを開けるか、そういう戦術の幅が試される。

『ミラージ・バット』

『九校戦の花形』とも言える女子限定の競技だ。

選手たちは、空中に投影される球体を魔法を使って跳躍し、叩くことでポイントになり、三ラウンドで一番ポイントを獲得した選手が勝つ。このため、ミラージ・バットの体力の消費量はフルマラソンに匹敵するとも言われている。ちなみにこの競技は、選手たちが妖精のようなコスチュームを纏うことから、通称『フェアリー・ダンス』とも呼ばれている。

以上六種目を十日間、二、三年生の本戦と一年生の新人戦に分けて、各競技に振り分けられたポイント合計が最終的に最も高い高校の優勝だ。尚、新人戦のポイントは本戦の半分だが、半分だからと油断してはいけない。

ちなみに、今年は一高の三連覇がかかっている。というのも、現在三年生の『七草真由美』、『十文字克人』の十師族の二人に加えて、二

人に匹敵する実力を持つ『渡辺摩利』の三巨頭は、一高の『黄金世代』とまで言われている。その三人が今までの九校戦で無双しているからだ。

だが当然、それを知っている各校からのヘイトや対策もまた半端ではないのだが。

?????????

「……というわけで、九校戦にエンジニアとして出てくれない？
達也君」

「……………なぜそんなことに？」

生徒会室では、真由美が他のメンバーがいるにも関わらず達也に頼み込んでいた。

「ウチはエンジニアの数が如何せん少なくてな」

「Rインテリジェンス副社長でもある龍兎君に頼もうとしたんだけど……」

「俺は次席としてスピード・シューティングとモノリス・コードに出ないからだから、できたとしても精々サブなんだ。んで、この学校で他にCAD調整ができそうなやつと言えば……………」

「…俺になる、と？」

「そゆこと。あ、先に言っとくけど二科生だからなんて言い訳は効かないぞ。エンジニアに魔法云々の腕は関係ないからな。純粹にこの腕の見せ所だ」

自身の頭をトントンと叩きながら龍兎は言った。

「まあ、ついでに言うのと深雪も今回はこっちの味方だからねー」

「深雪!？」

「……………すみませんお兄様」

「…なぜだ?」

「……………そ、その…」／／／

『達也にCAD調整してもらえ』って言ったら快く承諾してくれました☆

「……………ハア……………わかった」

「んじや頼むよ?」

「ああ」

その後、選抜テストを余裕で突破した達也は晴れてエンジニアとして九校戦に参加することとなった。

数日後、達也が生徒会室でCADの手入れをしていると、あずさが詰め寄ってきた。どうやら例のデバイスオタクが暴走したようだと、真由美が口を開く。

「そう言えばあーちゃん、昼休みの間に課題を終わらせるんじやなかったの?」

「……………会長~~~~!!」

泣きそうな——実際に涙目になってしまっている——声で継るように真由美を呼ぶあずさを見て、龍兎は何をしてんだと心の中でツツコンだ。

「そんな情けない声出さないの。少しくらいなら手伝ってあげるから。それで、課題はいったい何なの?」

「スミマセン……………実は『加重系魔法の技術的三大難問』についてのレポートなんです……………」

「……………」

「な、なんですか？」

「毎回上位五名から落ちた事のない中条が悩んでるからどんな課題か
と思ったら」

「毎年必ず一回は出題される定番のテーマじゃないの」

「そうなんですか？」

「まあな」

「それであーちゃん、今回の設問は？」

このテーマは、定番だけあって設問のバリエーションも出尽くした
観があるくらい豊富に存在する。校内の課題だけでは無く魔法大学
の入試にも時々出題されるくらいなので、大抵の参考書にはこれの答
えが載っているのだ。

「課題の内容は『三大難問』の解決を妨げてる理由についてです。他の
二つは分かったんですが、汎用型飛行魔法が何故上手く実現出来ない
のかが上手く説明出来なくて……」

「つまり中条さんはこれまで示された回答に納得がいけない訳です
ね」

「そうなんですよ！重力に逆らって自分の身体を浮遊させる魔法は現
代魔法が確立された当初から実用化されてますよね。それなのに如
何して飛行魔法……空を自由に飛びまわる魔法は実現出来ないの
でしょう？」

「正確には誰にでも使える定式化された飛行魔法が何故実現され
ないのかですね。古式魔法の使い手には少数ですが飛行魔法を使える人
が居るようですし」

「でもそれはBS魔法師の固有スキルに近いものです。共有出来なく
ては技術とは言えません。実際に跳んだり撥ねたりする魔法は技術
として定式化されているのに、何故空を飛ぶことは出来ないのか
……」

「その設問に対する答えは、少し高度な参考書になら大抵は載ってる

だろ」

「何だ、あーちゃんもちやんと分かっているじゃない。それなのに何をそんなに悩んでたの?」

「これって結局魔法が作用中の魔法に掛けようとするのが問題なんですよね? だったら作用中の魔法をキャンセルしてから新しい魔法を発動すれば良いと思うのですが」

「いえ、それは無理ですね。……ですが、面白いアイデアではありません」

「でも、それだったら既に誰か試してるんじゃないの?」

「少々お待ちを……ああ、ありました。一昨年イギリスで大規模な実験が行われています。コンセプトは会長が仰った通り事後的領域干渉による飛行魔法実用化です」

「それで結果は!」

興奮を隠しきれないような勢いで真由美が鈴音に問う。

「完全な失敗ですね。普通の魔法を連続発動する時よりも急激な要求干渉力の上昇が認められたとレポートにはあります」

「そう……理由は書いてある?」

「いえ、そこまでは……会長は如何思います?」

「先行する魔法の作用は止まっているわよねえ……達也君と龍兎君は如何思うの?」

「まずその実験はコンセプトの時点で間違いだらけですよー」
『?』

龍兎の言葉で、達也以外の全員が「え?」という顔になった。

「え、ど、どういうこと?」

「終了条件が充足されていない魔法式は時間経過により消失するまで対象エイドスに留まりますよね? 新たな魔法で先行魔法の効力を打

ち消す場合、先行魔法は消失してるように見えますが、それは見掛けの上だけです。仮に効力を打ち消される魔法式を魔法式Aとして、打ち消す魔法式を魔法式Bとしましょう。魔法式Bを発動する事で魔法式Aは事象改変の効力を失います。しかしそれはあくまで効力を失っただけで依然として魔法式Aは対象エイドス上に残っています。この状態は言うなれば魔法式Aと魔法式Bが対象エイドスに対して同時に作用し続けているんです。それが単に魔法式Bの効果だけが表に出てるに過ぎません。そもそも魔法式は魔法式に作用出来ません。それは領域干渉にも適用されます。魔法式を直接消し去る魔法でも無い限り、対抗魔法であってもこの原則の例外ではありません。ま、詰まるところは——おっと」

『?』

龍兎は唐突に「これ以上はまずい」と言わんばかりに口を閉じた。

「龍兎君? 詰まるところは、何なの?」

「……………オフレコでいいですか?」

龍兎の言葉で、全員が頷く。

「……………実はウチ、もう飛行魔法を搭載した市販型Rシステム完成してるんです。発表は二日後ですが」

『……………?』
「ええええええ!!!」

龍兎が予め聴覚遮断の魔法を使っていなければ校内中に響いていただろう。達也と鈴音、深雪も大きく目を見開いている。

「え? え!? ちょ、龍兎君どういうこと!」

「いや、理論では簡単です。まず単一の魔法式だけでビュンビュン飛び回るシステムは無理なので複数の魔法式を使う、ここまでは同じで

す。でも、先ほど言ったように終了条件が充足されていない魔法式は時間経過により消失するまで対象エイドスに留まりますよね？じやあ、タイムレコーダーなどで発動時点を記録して、それを変数処理して起動式を連続処理し、魔法式を連続発動…まあ、簡潔に纏めると短い魔法をタイムラグほぼ0で連続発動するんですよ。一つ一つの魔法式の時間が短いから想子の燃費も少ないですしね。ちょうどトールラス・シルバーが発表したループ・キャストと真逆のシステムなんですよ」

『……………』

「無論、それに耐え得る機体が必要ですが、それをクリアして先月完成し、明後日発表するのがゼロワンシリーズの『フライングファルコンプログライズキー』です。あと、Rシステムとは別にウチ独自に飛行魔法に最適化したCADも同時発売予定です」

「……………えっと、龍兎君。それってつまり、Rインテリジェンスは加重系魔法の技術的三大難問の一つを解決した、ってことかしら？」

「ま、そゆことです」

『…………………………』

何をあつさりといんでもないこと言ってるんだ、とこの時生徒会室のほぼ全員が思ったそうさ。

「……………同じ技術者だからなのか、まさか俺が考えていたシステムとほぼ同じとは……………フツ、先を越されてしまったか。牛山主任にどう言えばいいのやら……………」

そんな中、達也は少しばかり悔しがっていた。

第12話 『校外学習とかで遅刻するとすっごい悪目立ちするよね』

八月一日、達也たちは九校戦に向かうバスに乗っていた。そこに龍兔の姿はない。なぜなら、龍兔は現在Rインテリジェンス本社にいるからだ。

「……………」ガシューーン

『!』

龍兔が開発室に入ると、中のメンバーが龍兔に気づいた。

『大頭!!』

「一海はいるか?」

「ちよつと待っててください。カシラー!大頭が呼んでますぜー!!」

「つたくわーってるよ」スッ

龍兔と反対側の部屋から出てきたのは、真夏にも関わらず暑そうな茶色いジャンパーを着ている茶髪の男だ。

ここは、Rインテリジェンスの中心とも言える開発〇一課、通称『マルイチビルダーズ』の本部。中心と言われる理由は、ここがRインテリジェンス内で唯一Rシステムを製作している部所だからだ。Rシステムは看板商品だが、製作に関わる人数は少ない。俗に言う少数精鋭ということだ。

そんなマルイチビルダーズは、主に三つのチームで構成されている。カシラーと呼ばれる男——猿渡一海がリーダーを務めているのは龍兔のアイデアなどを元にシステムを試作する開発班『北都三羽鳥』だ。

「んで、用件はなんだ？」

「例のヤツを取りに来た。今どこだ？」

「例のつて……ああ、アレか。アレだったら」

『AIMS』の奴らが試用して、今『ファウスト』の連中が最終調整してるはずだぞ」

「そうか。なら——」

「よう。龍兔が来たって？」

龍兔が続きを言おうとした時、何やらのんびりとした声が聞こえた。

「惣一か。ちょうど呼ぼうと思ってたんだ」

「そうか。まあ、コーヒーでもどうだ？」

喫茶店のマスターを彷彿とさせるエプロン姿で現れたのは、壮年より若干若い男性だ。

この男は『石動惣一』。マルイチビルダーズの調整班チューニングである『ファウスト』のリーダーを務めている。

「おう。……相変わらずだな。そういや例のRシステムはどこだ？」

「ここだよ」

「お、幻徳………何だそのTシャツ」

「これか？結構良いだろ？」

アタツシケースを持ってきた男——ファウストのメンバーで惣一の部下の『氷室幻徳』が着ているTシャツを見て、龍兔は飽きれ声を出した。

Tシャツには『(；OwO) オンドウルルラギツタンデスカー!』
という言葉(?)が白無地のTシャツにデカデカとプリントされて
いる。

誰がどうみてもダサイ以外に言葉が見つからないのだが、本人は自
分の壊滅的なセンスをまったく自覚していないのが更にめんどくさ
い。

「おいおいどうした？俺の天賦の才に言葉も出ないのか？」

「ええ。ある意味天賦の才ですよそれは」

「成彰か。大変だな」

「いえいえ、副社長に比べればこのぐらいなんともありませんよ」

幻徳の後ろからひよっこり出てきた眼鏡の男は、同じくファウスト
のメンバーである『内海成彰』だ。惣一も比較的常識はあるが、ファ
ウストで一番まともなのは彼と言えよう。

「さてと……うん、全部揃ってるな」

「しつつかし、レギュレーションを落としたりRシステム搭載のCAD
作ってくれなんて、最初は何に使うのかと思いましたがよ」

「アイツらの度肝抜くならこのぐらいはしないと無理だからな。それ
じゃ、行ってくる」

カチャカチャカチャ シャキキン!!

【タカ!】

【ガトリング!】

【BESTMATCH!!】

【トンカントンカントンカントンカン!!】

【ARE YOU READY!】

「変身!!」

【天空の暴れん坊！

ホークガトリング！イエーイ！】

「留守番よろしくー!!」

龍兎は、仮面ライダービルドホークガトリングフォームに変身し、アタッシュケースを持って室内にあるハッチから身を投げると、背部にある

ソレスタルウイングを展開して九校戦の会場に飛んでいった。

?????????

龍兎がいない頃、バス内は緊急事態に見舞われていた。

対向車線の大型車のタイヤがパンクし、火花を上げて道路を削っているからだ。現代のハイウェイは間に強固なガード壁がある為、対向車線の事故は若者にとつては対岸の火事では無かった。しかし、タイヤがパンクした事で制御出来なくなっていたのか、大型車はスピニングしてガード壁へとぶつかると思われた瞬間、突然残っていたタイヤが跳ね上がり、あろう事かガード壁を大きく飛び越えてバスの車線に飛んできたのだ。

急ブレーキがかかり全員がつんのめる。何人かが悲鳴を上げたが、注意事項を無視してシートベルトをしてなかったからだろう。

バスは止まり直撃は避けたが、大型車は炎上して此方に向かってきている。このままでは衝突必至だ。

「吹っ飛べ！」

「消えろ！」

「止まって！」

「っ！」

パニックを起こさなかつたという点には褒められる事かもしれないが、今回のような事態では、それが善しとはとても言い切れなかつた。

無秩序に発動された魔法が無秩序な事象改変を同一の対象物に働きかけ、結果的に全ての魔法が互いの魔法を打ち消す『相克』を起こし事故回避を妨げてしまっている。

「馬鹿、止めろ!! 十文字！」

「わかっている。が…」

「っ！」

克人は既に魔法発動の体制に入っていたが彼の顔には滅多に見れない焦りがあつた。

キャスト・ジャミングに似たこの状況下では、いくら克人でも火と衝突の二つを防ぐ事は無理なのだ。摩利は気づいた。

「私が火を！」

「しかしこの状況では！」

いくら深雪が鎮火をするといつても変わらない、と摩利が言いかけた時だつた。

【ONE—HUNDRED!!】

謎の人物が頭部を覆うヘルムの右部分を右手で押さえると、ヘルムが収納され、顔が露になる。

その人物は、龍兔だった。

—
—
—

数分前……………

「……………」

龍兔は九校戦会場に向かって飛行中だった。そしてふと下を見ると、一高のバスを見つけた。

「おっ、みつけ。さっさと合流…………ん？」

視線を少しずらし、龍兔は異変に気づいた。

「…………事故? ……いや、違う!!」

自身の直感に従い、龍兔はホークガトリンガーをビルドドライバーから取り出し、側面のリボルマガジンを何度も回す。

【TEN!!】

【TWENTY!!】

【THIRTY!!】

【FORTY!!】

【FIFTY!!】

【SIXTY!!】

【SEVENTY!!】

第13話 『立場で人を見下すキャラって大抵嘸ませ役だよ』

九校戦前の懇親会は、九つある魔法科高校の代表選手、エンジニア、作戦スタッフなど、欠席や行かないという人物を除いてもおよそ300人が参加する。

龍兔も父の連れとして大手企業の社長と会食したりするが、本人はあまり乗り気ではなかった。

「……………」

「…龍兔君?…」

「ほえ?ああ深雪。ごめんごめん。ちよつとボーツとしてただけだから。にしても、パンフレット見た?今年の三高、あれはおかしいでしょ…『クリムゾン・プリンス』に『カーディナル・ジョージ』がコンビとか他校からすりゃチートもいいところだよ」

「あら?それならRインテリジェンス副社長の貴方はどうなるの?」

「……………それは言わないお約束だよ…ん?」

「どうしたの?」

龍兔は突然何かを察知したように、会場をキョロキョロと見回した。

「……………いや、なんでもない。誰かの視線を感じただけけど気のせいだったみたいだし」

「?…そう」

「……………少しいいかしら?」

「?…」

声の方を二人が見ると、三人の臙脂色の制服——三高の制服を着た三人の女子生徒がやってきた。

「……………どなたですか？」

「さ……………さぞかし名家の御出身とお見受けするわ。私は第三高校一年、一色愛梨。そして同じく十七夜葉、四十院沓子よ」

少女——一色愛梨の自己紹介に合わせて二人の女子も頭を下げる。

「そうです。第一高校一年、司波深雪です」

「司波……………？」

彼女は脳内で『司波』という名家について思い出すが、彼女の脳内にあるリストにはそのような名家は存在しなかった。そのため彼女は深雪のことをこう理解した。

「あら、一般の方ですか。名のある名家の御方かと思ってお声掛けしましたの。勘違いでお騒がせしてごめんなさい。試合頑張ってくださいね」

「なっ!!？」

その態度にほのかが文句を言おうとした時、冷ややかな声が響いた。

「ちつちええな」

その瞬間、周りは時間が止まったかのような静寂に包まれた。

「……………なんですって？」

「ちつちええなって言ったんだよ。あれ？もしかして聞こえなかったかな？これは失敬」

言葉では謝罪しているが、その気は微塵も龍兎の顔にはなかった。

「…随分と無礼なのね。私が誰だか分かって言っているのかしら？」

「知らないよ。そもそも家庭の都合上君みたいに有名かそうでないかだけで人を判断するような人間にはまともなやつはいないから相手にするなって教わってるし」

「!!さつきから、何様のつもり!!？」

「それはごつちのセリフだよ。まだ戦うどころか競技のステージにすら立ってないのに何を偉そうに言う権利があるの？だいたい、名家の出でなくても強い人なんて腐るほどいるよ。じゃあ、ウチの委員長の高の三巨頭の一角を担っている。さて、改めて質問だけど君は名家の出でない彼女に一对一で勝てるのかな？」

「っ……………!!」

「沈黙は肯定と受け取らせて貰うよ。てか今さらだけど、君って師補十八家なの？多分いつまでもそこから上に行けないのって、散々他人を煽り散らすその性格が一番の問題なんじゃない？」

「!!!」

この言葉は、完全に彼女の逆鱗に触れた。

「あ、そうそう。最後に一つだけ。多分君たち、ウチの一部女性陣よりは弱いから。それじゃ上から目線な宣戦布告、頑張ってるね。てか今どんぐらい進んでるの？まだ一高だけ？他の高校にも回るの？順番的に次は二高かな？どうなの？」

「~~~~!!葉！杏子！行くわよ!!」ズンズン！

顔を大きく歪ませ、愛梨は二人を置いて他の所に向かった。

「……………君たちごめんね。仕掛けたのはあっちだけど、ちよーつと言

い過ぎたかな」

「……いや、あのような言い方をした愛梨も愛梨じゃ。こちらもすまぬ」

「ああ言っちゃった後で難だけどき、お互い全力を尽くそう」

「うむ。葉。行くぞ」クルリ

「うん」スツ

そう言つて、残った二人も去っていった。

「……まともな人はいるって理解してるつもりなんだけどなあ……」

「少し言い過ぎよ。……でも、ありがとう」

「いいよいよ。てかこつちも巻き込んで——」

ごめん、そう龍兔が言おうとした時、突然照明が消え、会場の一ヶ所にスポットライトが点灯した。

その状況で、会場にいた全員が誰が出てくるか感づいた。

——九島烈。

十師族の『九島家』の当主の座を引いて尚、日本の魔法師の世界に強い影響力を持つ『最高』にして『最巧』と言われ、『老師』の異名を冠する魔法師。

九校戦が好きで毎年見に来るのだが、壇上に出てきたのは少し派手なドレスを着た女性だ。

「……あら？閣下は……」

「……いや違う。閣下は奥にいる。多分だけど精神干渉魔法だ。範囲は大きいけど、効果は微量なタイプだよ。それでも、前の女性に気を引き付ける視線誘導ミステイクシオンと組み合わせる気づかれにくくしてるんだ。流石

は『最巧』と言われる魔法師だね……!」

と、自分を見る龍兎に気がついたのか、烈は子供のようにニヤリと笑う。龍兎は周りに気づかれないように目礼をした。そして女性に耳打ちをし、女性が横に下がる。他の生徒からすれば烈が突然現れたように見えただろう。

「……まずは悪ふざけをした事を謝罪しよう。だが、これは非常に弱い魔法だ。しかしこの魔法に気がついたのは私が見た限りでは六人だけだった。つまり私がテロリストで、此処に居る人全員を爆弾で殺そうとしていたとしても、止めようと動けたのは六人だけと言う事だ。諸君、私は君たちの活躍と共に、君たちの工夫を期待している。先ほどのように小さな魔法でも、使い方次第ではとても有効な魔法へと化ける。使い方を間違った大魔法よりも、精度の高い小魔法の方が役に立つ事もあると言う事を覚えておいて欲しい」

烈が言い終えると、会場からは万雷の拍手が響き渡った。

「(……魔法を道具のように言う……十師族のトップクラス、日本の全魔法師の上に立つ人間とは思えないセリフだ。しかし、閣下はそれを実践して見せた。まったく、一生懸けても敵うかどうか怪しいな。流石は十師族。これが『老師』と言われ、未だ数多の日本魔法師たちに敬われる男の実力、か)」

龍兎の拍手にも、ただただ純粹な敬意だけが込められていた。

第14話 『天は二物を与えずとか言うけど全然そんなことないよね』

九校戦初日、龍兎たちは朝早くに競技場に來ていた。彼らの目的は今から行われるスピード・シューティングとこの後行われるバトル・ボードの予選、つまり真由美と摩利の出番がある試合だ。尚、この二人が龍兎と達也に何度も試合を逃さず見るよう念押ししていた、と補足しておく。

そんな中、龍兎は前日の事を思い出していた…

懇親会の後、龍兎は敷地内を散歩していた。CADの調整をした直後だったため、ショットライザーとプログライズキーを持って。

しかし、そんな性格が功を奏したのだろうか。龍兎は前方から來る気配に感づいた。

「……数は三つ、全員拳銃その他諸々で武装…なんとまー殺意マシマシ、敵意カタメだねえ…まったく、トラブルには巻き込まれるけど悪運だけは強いよね俺って………」ガチャリ

【BULLET!!】

【AUTHORISE】

〔KAMEN：RIDER：KAMEN：RIDER：KAMEN：RIDER：KAMEN：RIDER：KAMEN：RIDER：〕

プログライズキーのスイッチを押して展開し、ショットライザーに差し込むと待機音が流れる。そのまま龍兎はベルトからショットライザーを引き抜き、トリガーを引いた。

「変身」

〔SHOTRISE!!〕

〔シューティングウルフ!〕

〔The ^{弾丸} elevation ^{が放た} increases ^{る時}
as ^{射角} the ^は bullet ^{増大} is ^す fired. ^る〕

変身し、茂みに隠れた龍兎はこっそりと顔を覗かせる。と、不審者たちの真上に魔法の発動兆候が出た。同時に不審者たちが術者とおぼしき少年に銃を向ける。

「!!」

ダウン!!

龍兎は躊躇無くトリガーを引き、弾を放った。ちなみに、この軍用、及びフルチューンのショットライザーは、キャスト・ジャミング対策——龍兎の持つフルチューンモデルはANCHI MAGICS SYSTEMがあるので効かないが——として、グリップに付いているスライド式スイッチで実弾モードとCADモードを自由に切り替えることが可能である。

銃弾は不審者の足元に着弾する。龍兎はハワイにて父である龍誠

に銃を教わったため、外れることは滅多にない。ではどうして外れたのか。否、外したのだ。何故なら、敵から注意を逸らすだけで後はどうとでもなったからだ。

不審者の拳銃はバラバラになり、直後に雷が不審者たちに落ちた。不審者たちは当然気絶し、倒れる。

「誰だ！」

「(……………これは出た方がいいよね)」ガサリ

龍兎はショットライザーを腰に戻し、ゆっくりと歩み寄った。

「どうも……………つて、達也かい」

「龍兎？何故ここにいる」

「そのセリフそのまま返すよ。俺はただ散歩しに来ただけ」

「…達也、知り合いかい？」

「ん？あく、お初だよね。一年A組の機丈龍兎。以後よろしく」

「……………一年E組、吉田幹比古だ」

「幹比古、でいいよね？俺も龍兎でいいし」

「ああ」

「……………やはり死んではない。いい腕だな」

二人の挨拶を他所に、達也は不審者たちの状況を確認しながら言った。幹比古は自分が褒められたにも関わらずどこか卑屈そうな態度で達也に話す。

「……………でも、二人の補助が無ければ僕はやられていた。本来なら僕は死んでいたかもしれないんだ」

「……………阿呆か」

「右に同じく」

「え？」

その通りだ、と言われると思つていた幹比古にとって、二人の発言はかなり思いがけないものだった。

「俺たちの助けがありお前が敵を倒した。これが唯一の、そして紛れもない事実だ。本来なら？ 幹比古、お前は何を本来の形だと思つてるんだ？」

「それは……」

「まさかとは思うが、どんな手練を相手にしようが、どれほど敵がいようが関係無く、一人で全てを片付ける。そんな事を基準にしてるんじゃないだろうな？」

「そんなのできたら、それこそ人かどうかを真つ先に疑うよ」

「もう一度言うぞ、幹比古。お前は阿呆だ」

「……達也……」

「何故お前はそうまでして自分を低く見せようとする？ 俺たちにはわからない」

「達也に言つてもしょうがないよ。これはどうにもならない事なんだ」

「ところがどっこい、どうにかなつちやうんだなこれがまた」

「何で分かるんだよ」

「幹比古、お前が気にしてるのは魔法の発動速度じゃないのか？」

「……エリカに聞いたのかい？」

「いや、違う。お前の術式には無駄が多すぎる」

「……何だつて？」

「お前自身の能力では無く、お前が使つてる術式に欠陥があると言つたんだ」

「何故君にそんな事が言える！ 僕が使つてる術は吉田家が長年かけて編み出したものだ！ それを一回やそこら見ただけで欠陥扱いするなんてー！」

龍兎から見て、いかにも温厚な幹比古は激昂した。その様子を見

て、龍兎は「吉田」という名前を思い出す。確か、古式魔法の名家と言われている家系だったはずだ。

「俺には分かるんだよ。無理に信じてもらう必要は無いがな」

「……何だつて？」

「俺もわかるよ」

幹比古は先ほどと同じ言葉を違う意味合いで使う。この二人が嘘を言うようには見えなかったからだ。

「俺には視ただけで起動式の記述を読み取り、魔法式を解析する事が出来る。まあ無理に信じろとまでは言わんが」

「俺はRインテリジェンス副社長をしてるから、魔法やCAD、魔法媒体には詳しいんだよね」

「………はあ？」

「ま、Rインテリジェンス代表取締役社長の機丈龍誠は俺の父さんだからね」

「………それでそのCADを……」

「…それで、コイツらを如何するかなんだが、俺が見張ってるから幹比古が警備員を呼んできてくれ」

「わ、分かった」 タツタツタツ

幹比古は施設の方へ走っていった。

「俺ももう行くけど任せていい?」

「ああ」

「そっか、それじゃおやすみ」 スツ

龍兎はその足で宿舎に向かった。

「…………と、龍兔！」

「…………ほえ？」

「どしたの、ボーっとして」

「え？ああいや、ちよっと考え事を」

「？ふくん…………てかなんでそんなの着けてんの？」

「これ？」

エリカが指したのは、龍兔に装着されている黄色いアンカーが付いた装置——フォースライザーだ。

「念のためだよ。会場に来る時にちよっどトラブルが、ね」
「？」

「おい、始まるぞ」

達也の言葉でその場のメンバーはステージに注目する。

直後、試合開始のブザーが鳴った。

?????????

龍兔たちは現在、バトル・ボードの会場にいた。理由は簡潔。真由美の試合が一方的過ぎたのだ。百個のクレーを全て破壊し、堂々のパーフェクト。そのため、龍兔たちは比較的早く摩利が出るバトル・ボードの会場に来れたのだ。

そして試合開始と同時に大きな水飛沫が発生した。どうやら大波で自分を加速させようとしたが、却って自爆戦術となってしまったようだ。その上摩利はその波をも利用して独走する。

「……………移動魔法と硬化魔法のマルチキャスト。自分とボードを同一視して掛けることで落ちないのか。それに加えて振動魔法、加速魔法も含めて常時三種類から四種類の魔法を同時展開…さすがは十師族にも劣らない才能の持ち主、三巨頭の一角、かな。にしても…これ中々使えそうだな」

試合を見る達也たちの横で、龍兎はあるアイデアを何度もこね練り回していた。

?????????

達也は現在、会場にあるホテルの一室を訪れていた。この一室からは、普通の高校生であれば近付いただけで追い返されるような雰囲気がかからかなり漂ってきているのだが、達也は気にせずドアの前に立っている男に声を掛けた。

「風間少佐、お客様です」

「入れ」

「失礼しま……………!!」?

達也は部屋に入り、絶句した。なぜなら――

「…お。達也叫ばれたの?」

風間たち『独立魔装大隊』のメンバーと一緒に、紅茶に砂糖を入れ

る龍兔がいたのだ。

第15話 『偶然入った店で友達とバツタリ会うと緊張するよね』

「……………何故お前がここにいる」

「ちよつとひどくないかな？俺はRインテリジェンス代表取締役社長、機丈龍誠の息子でRインテリジェンス代表取締役社長補佐を務めているんだよ？Rインテリジェンスの最大のお得意先である独立魔装大隊の方たちとお茶をしてもなんら不思議ではないと思うけど」
「問題はない達也君。彼は全てを知っている」
「はっ？」

達也は一瞬、風間のセリフの意味が理解できず、彼に似つかわしくない間拔けな声を出した。

「言ってなかったね。俺にはある特殊能力みたいなものがあるんだ。下手すれば『質量爆散』マテリアル・バーストを上回る脅威となる、ね」
「!?」

達也は目を見開く。彼の最強の切り札である『質量爆散』を知っているのは独立魔装大隊と四葉家を除いていない。

ではなぜ、数字付きですらない彼がそれを知っているのか。その理由は本人から語られた。

『地球の本棚』ほんのほんだな。この地球の46億年の歴史の中にある全ての情報にアクセスできる能力だ。未来を見るようなことはできないが、俺に知れない情報はこの世に存在しない」

「……………それは、どんな情報に使えるんだ？」
「全部さ。人だろが動物だろが、機械、鉱物、植物、歴史、そして

軍事機密……どんな情報だろうが俺は全てを知ることができる。つまり、俺に隠れて何を考えようと意味ないってことだ」

「……………」

確かにそれは大きな脅威だ。他国にとって軍事機密とは生命線ですらある。

それを何の媒介も使わず、つまりどんなファイアウォールなども素通りして世界中の情報を閲覧できる……こんなことを他国が知ったら、即座に龍兔を——ひいては日本を潰しにかかるだろう。

「……………達也君。気持ちはわかるが、今回私たちは君を『戦略級魔法師・大黒竜也特尉』としてでは無く、我々の友人『司波達也君』として呼んだんだ。立ったままだと我々の友人関係にまで上下が存在するみたいじゃないか」

「それに、君が立ったままだと話し難いしな」

「……………失礼します」

取り敢えずそう言って、達也は椅子に座る。

「……………龍兔。お前はその能力を使って飛行魔法を開発したのか？」

達也は座ってすぐ問いかける。もし、自分たちのデータを地球の本棚を使って盗んだのなら、それはきちんとケジメを着けたいからだ。

「いやいや、そもそもFLTも飛行魔法を開発してたことすら最近知ったんだよ？シルバーさん。それに言ったでしょ？俺の能力はあくまで今ある知識を得れるだけ。未来の情報なんて、さすがの俺でも検索のしようがない」

「……………そうか」

達也は納得する。確かに、龍兎は自身の全てを知っているようだ。

「そう言えば、昨夜はご苦勞だったな」

「少佐、奴らはやはり…」

「ああ、ノー・ヘッド・ドラゴン無頭 竜の工員だった」

達也は九校戦のメンバーに決まった日の夜に注意は受けていたのだが、実際に香港系の犯罪シンジケート——無頭竜の工員に出くわすとは思って無かったのだ。

「達也君、お手柄だったね。もしかして警戒してたの？」

「いえ、散歩していたら偶々気配を掴んだだけですよ」

「お散歩？あんな遅い時間に？」

「試合用のCADのチェックをしていたんですよ。その後で少しブラブラとしてただけです」

「あ、僕もです」

「聞いているよ。ところでなんだが、君はエンジニアとして参加してるようだが、チームメイトは君たちが『シルバー』や『DRATTO』だと知ってるのか？」

「……なに？」

「……ちよつと」

「山中先生、それは一応秘匿情報ですので」

「おっと」

「…ハア…達也。俺前にRシステムを開発したのはウチの専属技師の『DRATTO』だって言ったよね」

「ああ。それがお前だと？」

「そういうこと。ただし、DRATTOは俺一人の名前だよ。由来は龍と兎から」

「なるほど。DragonRabbit 龍 兎というわけか」

「そ。安易でしょ?」

「そうだな」

「……でもまあ確かに、高校生の大会に君たちが参加するのは場違いなような気もするけどね」

「あら、真田大尉、達也君も龍兎君もれっきとした高校生なのですが?」

「そうなんだけどね………ところでだが龍兎君。君の能力で奴らを調べられないか?」

風間の言葉で龍兎が目を開ける。

「そう言うと思って、今調べました。ちよつと失礼しますね」スツ

龍兎は手頃な位置にあった椅子を中央に持ってきて、その上に何かのアプリを起動したライズフォンを置いた。その直後、ライズフォンからプログラムでできたボードのような物が出てくる。そして龍兎はペンのようなアイテムを出し、そのボードに図を書いていく。

「まず、奴らのボスの名は『リチャードⅡ孫』。

表向きでは『孫公明』と名乗っている人物です。

住所、及び幹部クラスのメンバーの詳細は——」

そう言つて、龍兎は饒舌に、それでいて纏めつつ説明していく。

「——とまあ、だいたいはこんなところですね。言つてしまえば先ほど言った通り、奴らの切り札とも言える『ジェネレーター』さえ無力化すればあとは一つつきで瓦解です」

「なるほど。感謝する」

「……でも達也君。選手としては参加しないの?」

『マテリアル・バースト』は兎も角としても、『フラッシュ・キャスト』キャスト・デイスバージョンや『雲散霧消』があるんだから結構良い所まで行くと思うわよ?」

『トライデント』は持ってきてるんでしょ？」

「トライデントはCADのレギュレーション違反で使えませんし、フラッシュ・キャストは四葉の秘匿技術ですから」

「そもそも軍事機密の魔法である『マテリアル・バースト』を衆人環視の中で使わせる訳にはいかないだろ」

「藤林さん。この会場ごと国防軍の基地を更地にして丸ごとリフォームでもするつもりですか？」

「そもそも殺傷ランクAの『分解』を使えるとは思えないけどね……七草家の令嬢や十文字家の御曹司の魔法とは訳が違うんだから」

「あら、真田大尉はご存知無いですか？ 殺傷ランクが高い魔法でも、スピード・シューティングとピラーズ・ブレイクでは使えるんですよっ。」

「藤林、それくらいにしておけ。達也には隠さなきゃならない事情が多い。下手に注目されるのはマズイだろうが」

「(………なんだろう、すっごい物騒なワードがポンポン出てきてるんだけど)」

上官の一声で藤林は大人しくなった。達也としても競技に参加するつもりは無かったので風間の対応には感謝するしか無い。そんな大人たちの会話を、龍兎は内心呆れながら聞いていた。

「まあでも、面白いとは僕も思うけどね」

「自分が選手として参加する状況にはならないと思いますが」

「万が一そんな場面になったとしても……分かってるだろうな？」

「ええ。『雲散霧消』を使わなければいけない状況になったら、大人しく負け犬になりますよ」

「なら良いが」

「ですが、さっきも言ったように自分が選手として参加するとは考え難いと言うかありえないと思うのですが……」

「心掛けの問題だ」

「てか、こういう会話大抵フラグになりますよ」

『……………』

言わないでおいたことを、という目で龍兔を睨む風間たちだった。

?????????

時は流れて、九校戦三日目。

真由美は無事にスピード・シューティング、及びクラウド・ボールで優勝し、一高の滑り出しは好調といった所だろう。そしてもうすぐ、摩利が出る女子バトル・ボードの準決勝が始まろうとしていた。龍兔は急いで席に着く。

「もうスタートですよ」

「ふー、ごめんごめん。ちよつとやることがあつて」

龍兔が息を軽く切らしながら深雪の隣の席に着いたのとはほぼ同時にスタートのブザーが鳴り、摩利を含む三人の選手が加速した。準決勝からはレースの参加人数が五人から三人になるので、予選より個人を狙った攻撃がしやすくなるそうだ。準決勝も摩利の独壇場となる…かと思いきや、そこは各校から選抜されたエリートということだろう。

「渡辺先輩についていつてる!?!」

「さすがは『海の七高』。海や水上はあの高校にとってホームグラウンドみたいなものだからね」

「というか去年の決勝カードですよ、これ」

摩利の背後にピツタリとついて行っている選手がいる事に、観客席は驚きと興奮の声で盛り上がっている。しかし七高の選手が必死な顔をしているのに対して、摩利の表情はまだまだ余裕そうだ。

「……………委員長、楽しんでないかあれ？」

龍兎がそう思った時、事件は起きた。

「ん？」

最初のコーナーを曲がると、そこからの試合は観客席から直接見ることはできないため、スクリーンにその映像が映し出される。その映像になにやら異常が見られたので、達也はそつちに目を取られていたのでその瞬間は見逃してしまった。

「あっ!？」

観客席から悲鳴が漏れる。達也がレースを映すスクリーンに目をやると、そこには大きくバランスを崩した七高の選手の姿があった。

「オーバースピード!？」

誰かが叫んだ。確かにそう見えない事も無い。バランスを崩し、自分の動きを制御出来ない七高の選手は、コーナーを曲がりきれずにフェンスに突っ込む未来しか無い。

しかしそれは、前方に目の前に誰もいなければの話である。

先ほど美月が言ったように、摩利とこの七高の選手の対戦は去年の決勝カード。つまり、ラップタイムにそれ程差がある訳では無いのだ。先ほどまで摩利の後ろについていたのだから、当然摩利もコー

ナーに差し掛かっている。

「!!」バツ!

【FORCE RISER…!】

【WING!!】

ヴーッ!ヴーッ!ヴーッ!ヴーッ!

龍兎は腰のフォースライザーにピンク色のプログライズキー——
フライングファルコンプログライズキーを差し込む。すると警告音
のような待機音が辺りに流れる。そのまま龍兎はフォースライザー
のアンカーに手を伸ばしながら摩利たちの方に駆け出した。

「龍兎君!?!」

「龍兎!」

「変身!!」

ガギン!!!

【FORCE RISE!!】

【フライングファルコン!!】

【強制認定突破完了
BREAK DOWN……………】

龍兎がアンカーを引くとプログライズキーが無理矢理展開される。
そしてフォースライザーからハヤブサのライダーモデルが現れ、龍兎を
背中から抱くように包み込む。するとピンク色のスパークが走り、龍
兎はピンク色のスーツを纏った。周りにはバンドのような物——リ
ストレントケーブルで繋がれた幾つものアーマーがゴムを引っ張る
ように周りに展開されている。次の瞬間、限界まで引っ張った輪ゴム
が元に戻るようにケーブルが縮み、龍兎のアーマーとなった。

「危ない!?!」

そう叫んだのは一体誰だったのかはわからない。
しかし摩利はスピードを押さええて素早くターン。七高の選手を受
け止めんとしたその時。

バシヤン！

「なっ!?」ガクン！

突然水面が沈み、摩利の体もそれに呼応して沈む。その身体に七高
の選手がぶつかり、纏れ合うように強度の高いフェンスに激突する――
――と思われた直後。

塵

隼

迅

芥

フライング

ユートピア

ドツガアアアアアン
!!!!!!

『!?』

突如フェンスが大きく吹き飛んだと思うと、摩利と七高の選手の姿
が掻き消えた。観客たちはキョロキョロと周りを見回し、誰かが水に
映る影に気づいた。

「?……………!いた!上だ!!!」

その言葉と同時に観客たちは一斉に上を見た。

そこには、ピンク色のスーツをベースに身体のあちこちを白や銀のアーマーで覆い、猛禽類を彷彿とさせる銀の仮面に碧の複眼の戦士がいた。両脇には摩利と七高の選手を抱えている。

「……………」スツ

すると戦士はゆっくりと降下し、フェンスの向こう側に着地する。そして両脇に抱えていた摩利たちをゆっくりと傷つけないように横たわらせた。

「……………」バサアツ！

そして戦士は翼——スクランブラーを展開して会場の外へ飛び去った。

それが引き金になったように、慌てて医療スタッフが摩利たちを担架に乗せて医療室へと運んだ。

第16話 『新しいものって思いつくとどんどん意欲湧くよね』

九校戦四日目。この日から本戦は一旦休戦となり、今日から五日間、九校戦九日目までは一年生のみで行われる新人戦が開催される。一年のみとは言っても、エンジニアまで一年なのでは無く、選手は一年だがエンジニアは上級生が担当する、というのがセオリーだ。

摩利は龍兎のお陰で戦力外こそ免れたものの、大事を取って本選ミラージ・バットは深雪に交代することとなった。

昼過ぎの今、達也たちが今いるのは女子スピード・シューティング、つまり雫の競技がある会場だ。しかし、ここには特徴的な頭髪を持つ龍兎はいなかった。

「……………ねえ達也君。龍兎君どこ？」

「……………何やら作業室でやっていたな。男子の試合は午前中だけだし、自分のCADを繋いでいたからおそらく調整だと思うが」
「……………そう」

選手でないエリカはただただ達也の説明に納得するしかなかった。

その当人はと言うと……………

?????????

「ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ

ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ
ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ
ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ
ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ
ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ
ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ
ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ
カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ
カタカタカタカタカタカタカタカタ

目をギラギラ光らせながらCADを繋いだパソコンのキーボードを神速とすら言える速さで打ち続けていた。

「(決勝戦まであと一日……完成率はまだ73%程

……今日で完成させないとアイツの――

『カーディナル・ジョージ』との試合には間に合わない。雫には悪いが、俺もいろいろと懸かってるんだ」

『カーディナル・ジョージ』

それは第三高校一年生、『吉祥寺深紅郎』に付けられた異名。

カーディナルとは魔法学で言う『カーディナル基本コード』の意だ。

そもそも、魔法は系統外魔法などの例外を除き、主に四系統八種類ある。それらの種類ごとの魔法にはベースとなる統一された魔法コードがある、というのが『カーディナル基本理論』だ。吉祥寺深紅郎は弱冠十三歳でその八種類の内『加重系魔法』の基本コードを世界で初めて発見した。それ故に付けられたのが『カーディナル・ジョージ』。『クリムゾン・プリンス』こと一条将暉に匹敵する、そして新人戦の男子スピード・シューティングに出場する、まさしく龍鬼にとって最大の関

門である。

この数日、真由美や摩利の試合を見て思いついた一つの『カーディナル・ジョージ』に対抗するある秘策を今現在、二日前から龍兎は急ピッチで製作しているのだ。

「…出来たあああああ!!! フオオオオオオオ!!!」

尚、その日の試合は全てパーフェクトで終らせていた龍兎が秘策を完成させたのはその日の午後11時。完成のあまり奇声を響かせた龍兎は奇声を聞いて駆けつけた警備員にこっつりと叱られたそう。

?????????

そして翌日、女子スピード・シューティングが雫の優勝で終わり、男子スピード・シューティングの決勝の幕が上がるうとしていた。

「……龍兎、大丈夫だよな……?」

「相手って『カーディナル・ジョージ』よね?」

「ああ。だが問題ないだろう。昨日どうやら、奴に勝つ策が完成したそうだからな……来たぞ」

達也たちの視線の先では、ライフル形態のCADを持った二人の選手——ここまで勝ち上がってきた龍兎と吉祥寺の姿があった。

「……お初、か? 『カーディナル・ジョージ』」

「そうだね、機丈龍兎。プロフィールで君がRインテリジエンス社長の息子だと知った時は驚いたけど。まさか、北山選手のCADは君が?」

「さあどうだろうな。俺の相棒がやったのかも知れんぞ」

「相棒…？」

「……………それにしても随分と余裕だな？先に言っておくが、俺はかーなーり、強いぞ？」

「そうか。でも、勝つのは僕だ」

「それはどうかな？」カツ

ジャキツ!!

二人がCADを構えると、スタートのランプが点灯し始めた。

?????????

——…会場、VIP席……

そこでは、二人の男女が会話をしていた。

男性の方は九島烈。十師族の『九島家』の当主の座を引いて尚、日本の魔法師の世界に強い影響力を持つ『最高』にして『最巧』と言われ、『老師』の異名を冠する魔法師。

そして女性の方の名は、四葉真夜。十師族の中でも最強と言われ、『アンタツチャブル触れ得ざる者』と呼ばれる一族の現当主である。

彼女とその姉である四葉深夜は、かつて烈の弟子として共に切磋琢磨した仲でもある。

そんな二人は、眼下にいる一人の白髪の少年を見ながら話していた。

「……少し荒唐無稽ではあるが、お前の話と、最近のあの会社を見る限り、事実なのだろうな……」

「ええ。……機丈龍兎……そしてあの羽のような白髪……見間違えるはずがありません……」

「しかし、本当に彼が33年前お前を救ったその『エターナル』と名乗る戦士……いや、世間では『仮面ライダー』なのか？」

「ええ。というより『紅い装置が付いたベルト』『白金色のUSBメモリ』そして『機丈龍兎』」

「……ここまで揃っているのが偶然だと先生は思いますの？」

「……たしかに、偶然にしてはちと出来過ぎているが、彼の見た目はどう説明するのだ？もし、あの時お前を助けたのが彼なら、今の年は少なくとも四十は超えている。それに彼の出生届も本物だ」

「それが引つ掛かっているんです……冷凍保存、成長停止、或いは……時を越えた、なんてのもあり得そうですが」

「……何にせよ、彼には興味が尽きんな……」スツ

烈の視線の先では、今まさに戦いの火蓋が切って落とされようとしていた。

?????????

パツ

パツ

パツ

プーーーーー!!!

「!!」キイイイン!

開始のブザーと同時に二人は各々の魔法を発動させた。スピード・シューティングの準々決勝以降では、紅白の二色の内、決められた方の色のクレーのみを有効範囲内で破壊しないといけない。しかもクレーはかなりハイペースで射出される。並の腕でパーフェクトは到底出せない。そして龍兎のクレーの破壊方法を見て、吉祥寺は絶句した。

「(……!あれはまさか、十七夜の『アリスマテイク・チエイン数学的連鎖』!?あれは十七夜レベルの演算と予測能力があつてこそ——)」

吉祥寺の科学者としての気質故か、彼は小さな、それでいて致命的なミスをしてしまった。

「……しまった!!?」

そう、龍兎の魔法に気を取られている隙に数個のクレーを逃してしまっていたのだ。

無論、龍兎が使ったのは三高の百家、十七夜葉の『アリスマテイク・チエイン数学的連鎖』ではない。そう、これこそが龍兎が用意した秘策。

『ピトリアル・バレット裏切りの弾丸』。

この魔法は見た目こそ『アリスマテイク・チエイン数学的連鎖』に似ているが、プロセスがまったく異なる。

まずは移動系魔法でクレーを破壊する。ここまでは基本的だし、問題はここからである。

破壊したクレーの破片いくつかに硬化、移動魔法を掛けて有効エリアのギリギリに待機させ、それをビリヤードのように使ってクレーを破壊。更に生成された破片のいくつかに硬化、移動魔法を掛けて有効エリアのギリギリに……と、クレーによるクレーの破壊をループさせるのだ。複数の破片を管理する演算能力があつてこそだが、それさえクリアすれば破片ごとに掛ける魔法は破片の軽さとループ・キャストで補えるので問題ない。

一つの破壊されたクレーが、裏切ったようにクレーを破壊し、更にその裏切りが鼠算式のように伝播していくことから名付けられたのが『裏切りの弾丸』。正真正銘、今この瞬間のために龍兎が編み出したオリジナル魔法である。

その破壊は留まることを知らず、発射されたクレーは有効エリアに入ると瞬く間に撃ち抜かれ、破壊活動に参加する。

「これで……ファイニッシュだツ!!」

ドパアン!!

最後のクレーが破壊され、結果は100vs95。

正真正銘、龍兎の完全勝利に終わった。

?????????

そして、女子アイス・ピラース・ブレイクは一から三位を深雪、雫、エイミイの一高が独占独占するという快挙などがあり、一高の優勝に拍車がかかってきた矢先、その事件は起きた。

——男子モノリス・コードの第二試合で、龍兔たちが四高のフライングとオーバーアタックにより大怪我を負った、と……。

第17話 『怪我した人の後を背負って戦うってカッコいいよね』

……何が、起こった、ん、だ………？

………ああ、そっか………

俺、また誰かを…庇お、うとし、て………

………やっぱ……楽しや、ねえ、な………

………悪イ、みんな………

「……………うー君」

「り——と君」

「りゅー兎君」

「……………あ、れ……………?」

目を覚ますと、こちらを覗く少女がいた。

「!! 龍兎君!!」

「……………みゆ、き……………?」

「お兄様!! 龍兎君が目を覚ましました!」

「……………!! そうだ! 試あいでででで!!?」

「! まだ駄目よ龍兎君!! 治癒魔法がかかっているけど下手したら傷口が——」

「いつつ……………ごめん深雪、俺のケースとライズフォンって、今あるか?」

「ケース?……………これのことかしら?」ガチャ

「あそうそう、それぞれ。ほい」ピツ ガチャリ

深雪がケースを手渡すと、龍兎はライズフォンを嵌め込んでケースを開け、白いボトルを取り出した。龍兎はそれを手に取り、軽く振る。

カチャカチャカチャカチャ…

「……………ふう〜……………多少はマシになった…」

「龍兎。 入るぞ」

「達也か？入ってくれ」

龍兎が促すと、達也が入ってきた。

「……………」

「…………ごめんな、俺たち棄権になったんだろ？あれさえ避けられていれば……………」

「…それなんだが、十文字会頭が交渉した結果、俺とレオ、幹比古が代役として出ることになった」

「……………ほんとか？」

「ああ」

「……………ちよつと待っててくれ」プルルル…

龍兎はライズフォンに番号を打ち込むと、誰かと話し始めた。

「俺だ…………ああ、今から言う部屋に例のアレを持ってきてくれ。部屋番号は…………番だ。…………」

ああ。ありがとう。じゃ」ピッ

龍兎が電話を切つて数分後…………

「入るぞ」ガチャリ

「悪いな…海。わざわざ」

「つたく。アイツら大慌てだったぞ。ほら」ゴトリ

「サンキュ」

「じゃあな」スッ

男——…海はケースを置いてすぐに部屋を出た。

「…………深雪。悪いけど達也と二人にしてくれ」

「?……………わかったわ」スッ

バタン…

「…コイツは、元々俺たちが決勝戦で使おうと考えて、この日のために特別につくったものだ。でも、生憎その俺たちはこのザマで、試合なんて出れやしない。だからよ…：達也。お前らに俺の、俺たちの夢を託す。使ってくれ」

「……………」

「審査なら通してる。コイツで、三高の奴らの鼻を俺たちの代わりに明かしてくれ」

「……………わかった。任せろ」

「……………後は任せた」

「ああ」

達也は三つあるケースの内一つに目をやり、龍兎の言葉に頷いた。

?????????

新人戦最終日、達也たち一高と一条率いる三高による決勝戦がいよいよ始まるうとしていた。

「……………ほんとにいいのか?」

「ああ。龍兎から頼まれている」

「…なら、頑張らないとね」

「そうだな……………行くぞ」

そう言うと、達也たちは目の前に広がる草原へと歩みを進めた。

?????????

「……………将暉。どう思う?」

「アイツらはよくやったが、ここまでだ。俺が気を引き付けるから、ジョージはディフェンスと遊撃を頼む」

「わかった。将暉も気をつけてね」

「俺は負けないさ……………ん?」

「将暉?」

「アイツら……………なんのつもりだ?」

「え?」スツ

吉祥寺が将暉と同じ方を向くと、そこには何かを腰に巻き付けるレオと幹比古がいた。

?????????

「行くぜ幹比古!!」ガチャリ!

「うん!!」ガチャツ!

【SHOT RISER!!】

【FORCE RISER…!】

【POWER!!】

【JAPANESE—WOLF!!】

【AUTHORISE^認完^了】

【KAMEN…RIDER…KAMEN…RIDER…KAMEN…RIDER…KAMEN…RIDER…KAMEN…RIDER…KAMEN…RIDER…】
ヴーツ!ヴーツ!ヴーツ!ヴーツ!

レオは腰のショットライザーに、幹比古はフォースライザーにそれぞれパンチングゴングプログライズキーとジャパニーズウルフゼツメライズキーを装填する。そして、自分たちの友人のセリフを思い、叫んだ。

「変身!!」

【SHOTRISE!!】

「おつりやああ!!」バキイーン!

【パンチングゴング!】

【E^山nough^を p^壊ower^滅 to^す a^るn^のn^にi^にh^にi^にl^にa^にt^にe^に a⁺ m^分o^分u^分n^分t^分a^分i

【FORCE RISE!!】

【JAPANESE—WOLF!!!】

【B^強RE^制A^認K^証 D^突OW^破N^完:...:~!】

レオはゴリラをモチーフとしたライダー、『仮面ライダーバルカン：パンチングゴング』に、

幹比古は両手にそれぞれ大きな四本の長い爪——ニホンオオカミノツメを纏ったライダー、『仮面ライダー亡』に変身した。

「必ず優勝する。……それが僕たちの望みだ」

「前だけを見て、突き進むぜ!!」

二人は固い意志を宿した目で三高を睨み付けた。

?????????

「あ、Rシステム、だと……?!?」

「……………！ …… そうか、迂闊だった…………… 一高に
Rインテリジエンス社長の息子がいた時点で警戒するべきだったん
だ……………！」

「？ジョージ、どういうことだ？」

「…………… 九校戦で制限されているのは、CADのレギュレーションだ」
「…………… !!まさか!!」

「ああ。Rシステムに関しては何一つ定義されていない!! 軍用は一般
的には買えないからと、完全に僕たちはたかをくくっていたんだ!! お
そらく、彼らのRシステム搭載の完全独立思考型CADはRシステム
に関してはかなり高いレベルだよ!!」

「…………… つまり、俺たちは今、地の利から来る有利が完全にひっくり
返った、ということか？」

「うん。草原ステージには一切の隠れ場所がない。たとえ逃げようと
必ず捕捉される」

「しかも、Rシステムは魔法ではないから、事前使用も許されている
…………… なっ!!」

「?…………… まさか、彼もか!!」

彼らの前では、達也が腰にCADを取り付けていた。

?????????

「…………… 龍兎。使わせて貰うぞ」ガチャリ!!

達也は腰に赤い回転式レバーが付いた装置…………… ビルドドライバー
を着け、横から缶のようなアイテムを取り出した。

シユワシユワシユワシユワシユワ……………!

カシユツ!!

達也が缶——ラビットタンクスパークリングを振ると、シュワシュワと心地良い音が響く。そしてプルタブ——シールディングタブを起こすと、缶の下部から突起——RT-SPコネクターが出る。

【RABBITTANKSPARKLING!!】

【トンカントンカントンカントンカン!!】

達也が缶をドライバーに差し込んで横のボルテックレバーを回転させると、ビルドのマークを象ったスナップライドビルダーが展開され、中に泡——ベストマッチリキッドを含んだトランジエルソリッドがスーツを形成する。

【ARE YOU READY!?!】

覚悟はいいか、とベルトが問いかける。達也はフツと、軽く笑い、そして二人に続いて叫んだ。

「変身」

【シュワつと弾ける!!RABBITTANKSPARKLING
イエイエーイ!!!
!!!!!!

達也が叫ぶとスナップライドビルダーが重なり、白い稲妻や炭酸のようなマークが所々についたライダー、『仮面ライダービルド・ラビットタンクスパークリングフォーム』へと変身した。

「……………勝利の法則は、決まった」

その言葉を合図にしたかのように、試合開始のブザーが鳴り響いた。

?????????

「ジョージ!!来るぞ!!!」

「わかってるよ!!」

将暉は大声で味方を鼓舞する。

しかし、それでこの状況が好転するならば、苦勞などするはずもないだろう。

ギョんツ!!!

『!?!?』

刹那、将暉たちの間を突風が吹いた。魔法攻撃か、そう思つて将暉と吉祥寺が振り向く。

そこには、割れるモノリスと、器用にも残つたモノリスの上に立っている達也がいた。

「……………!?!?」

「……………今の一瞬で、スタート地点からここまで移動し、モノリスを割つた、のか……………!?!?」

「……………ジョージ!残つた奴らは任せた!司波は俺が倒す!!」

「…わかった!気を付けて!!」

そう言い残し、将暉を除いた二人は一高のモノリスに向かって駆け

出した。

??????????

「……………防御に徹してたらジリ貧だとうようやく理解したか。まあ、遅すぎただけだね」

してやったり、といった顔で龍兎は試合中継を見ていた。

「……………いくらスパークリングフォームとはいえ、その身体能力は使用者に依存する。あれ程の速さが出せるのは達也の努力の賜物だ。さあ、存分にやってくれよ…!」

??????????

「幹比古!来たぞ!!」

「わかってる。レオ、手筈通りに!」

「おう!」

「どけええええ!!」キイイイン!

吉祥寺は、恐怖を彼に似合わない怒号で無理矢理押し殺し、二人を倒さんとCADを向ける。

「ふんっつ!!」バツ!

ドスウン!!!!

「なっ!?!」

レオはスーツの上から羽織っていたマントを引き抜いた。するとマントに硬化魔法がかかり、盾となって地面に突き刺さる。

「まさかそういった使い方だったのか!? これじゃあ『不可視の弾丸』が使えない!」

『不可視の弾丸』とは、基本コードを用いてつくられた魔法だ。対象の情報体ではなく対象そのものに働く魔法であるため、防ぐのは困難を極める。ただしその性質上、対象を視認しないと使えない。このマントは達也が予め用意していたものだ。

「幹比古行くぞおりやああああ!!!」ブオオツ!

「っ!!?」ドガアアツ!

それに気を取られていた吉祥寺はレオのCAD——『小通蓮』に吹き飛ばされる。そしてその先には、アンカーに手をかけた幹比古がいた。

「(達也。君が『クリムゾン・プリンス』を倒すのなら、僕はせめて『カーディナル・ジョージ』は倒して見せる!!龍兎、使わせて貰うよ!!)」

ガギンガギン
!!!!!!

心の中で言い放ち、幹比古はアンカーを戻して再び引く動作を二回繰り返し続けた。そして爪にどんどん灰色のエネルギーが纏わり付いていく。

白

煉

獄

狼

ゼツメツ

ユートピア

「はあああああああ
!!?!?!?!?!?!?!?!?!

「ぐあああああ
!!?!?!?!?!?!?!?!

交差させた幹比古の両腕の爪から放たれた四対のエネルギーは、幹比古がすぐさま発動した『雷童子』を飲み込んで白い雷を含み吹き飛ばされた吉祥寺を正面から捉えてその意識を瞬く間に刈り取った。

「……………え?」

一瞬、幹比古は啞然とした。そう、自分の発動した魔法の発動速度が、かつて『神童』と呼ばれていたあの頃をも上回っていたのだから。

『その術式には無駄が多すぎる』

「……………こういうことだったんだね、達也。龍兔」

幹比古は二人の言葉を噛み締めていたが、今はそんな時間ではないとすぐに悟った。

「この野郎よくも吉祥寺を!!」ゴゴゴゴゴゴ!!

本来ならディフェンス担当だった選手が『陸津波』を撃ってきた。幹比古は、回避しようとしたが、その瞬間、別の声があった。

「幹比古オオ!!跳べええええ!」

「!!」バツ!!

用している今の達也なら問題はない、という思い込みからきていた。そして、二十の魔法式が達也を囲むように展開される。

そして、二十の弾丸が達也を襲った。

「……………な!!?」

土煙が晴れると、将暉は狼狽した。

達也の姿は、どこにもなかったのだから。

「どこだーどこへ隠れた!!?」バツ

周りを見渡すが、達也はいない。そもそも、この草原ステージに隠れ場所などないのだ。

その時、将暉の顔に影がかかった。

「……………!!!」

手で太陽を隠しながら将暉を見上げると、空中で錐揉み回転をしながら跳ぶ達也がいた。

「トンカントンカントンカントンカン!!」

達也がボルテックレバーを再び高速回転させると、白い数式と共に赤と青のワームホールが現れ、エネルギーを吸収していく。

「はああああ……………!!!」

【READY・GO!!】

「ハアアアアアツ!!!」

【SPARKLING FINISH!!!】

ドツパアアアアン!!!!

達也のキックがワームホールの中央に入ると、反対側から大量の泡——デイメンションバブルが将暉に雨のように吹き荒れる。それが弾けると、中から更に大量の圧縮された泡——インパクトバブルが将暉に襲いかかる。

一つ一つの威力は精々成人男性のパンチ程に抑えられているが、それでもそれを何百、何千と喰らえばただでは済まない。

「うわああああ!!? くっ! この!!ぐっ……………」

ぐああああああ!!!」

インパクトバブルの濁流に押され、将暉は地面を転がる。数発が頭部に当たり、意識は既に朦朧となっていた。

「……………今回は、完敗だな……………だが、次は、次こそは必ず勝つぞ……………司波達也……………」ドサツ……………」

将暉が倒れてから数秒後、大音量のブザーが鳴り響き、スクリーンには『WINNER 第一高校』の文字が大きく映し出されていた。

第18話 『肝心な時に限って身体が不調な時ってあるよね』

九校戦九日目、この日から九校戦の本戦が再開され、今は九校戦の花形競技であるミラーズ・バットの予選が行われている。達也と深雪、龍兎はその試合を見にきていた。

「龍兎。怪我は大丈夫なのか？」

「え？まあ、よほど激しい動きしない限りは問題ないからだいじょぶだいじょぶ」

「……………それならいいが」

「それにしても小早川先輩、随分と気合が入ってましたね」

「まあ、委員長の代わりに自分が勝つって張り切りながら言ってたからね」

「そうですか……………何も無ければ良いのですがね」

「司波君はまだ何か起こると思ってるの？」

「まだ何も、何一つ解決してませんからね。警戒はしていますが、手口が分からない以上如何する事も……………」

「……………それなただけだし、ちよーつと心当たりがあるんだよ」
『!?』

龍兎の言葉に、全員が反応する。

「ほんと!!?」

「……………あくまで俺から見た感じですけど、ウイルスというよりはまるで、電気信号回路を狂わせてるような、そんな感じがしたんですよ。もしそうならウイルス検査に引っ掛からなかったのも理解できるんですが、如何せんでどこで仕込まれたかがさっぱりですよ」

「そう…」

真由美の言葉を区切りにして、一同は試合に集中する。小早川は順調に点数を伸ばしていつているが、やはりと言うべきか、三高がしぶとく食い下がってくる。第一ピリオドが終わり、小早川と三高の選手との点数の差はあまり無かった。

「やっぱりしぶといわね」

「ですが、小早川先輩もしつかりと点数を重ねてますからね。このまま行けば予選突破は確実でしょう」

「……………」

しかし第二ピリオドが始まって数分後、その望みは脆くも崩れ去ることとなった。

バチッ!!

「!? キャアアアアア!!」 ヒュウウ…

突如小早川のCADから鈍い電光が走ったと思うと、小早川の魔法が効果を失い、落下する。

「!!」 バッ!

【WING!!】

ヴーッ! ヴーッ! ヴーッ! ヴーッ!

「変身!!」

ガギン!!!

【FORCE RISE!!】

【フライングファルコン!】

【強制認証突破完了
BREAK DOWN……………】

「間に合え!!」ギョんツ!!

フライングファルコンの最速はマッハ1.7。その圧倒的な速度で龍兎は即座に落下地点に回り込もうとした、その時。

「あぐつつ??
!!!」ガクツ

突然走った痛みで龍兎は体勢を崩す。フォースライザーは、プログライズキーの性能を無理矢理引き出す。その性質故、多少ではあるが使用者に痛みが走るのだ。それに先日の一件で負った傷の痛みが重なり、龍兎の行動が遅れた。

「ダメだ!!今は堪えろ機丈龍兎!!」バツ!

走る痛みを無理矢理堪え、龍兎は上空に飛んで一直線に小早川の落下地点に回り込む。

「つつ!!」ガシッ!

「……………え?」

「間に、合った……………」

そのまま龍兎は小早川をスタート地点に降ろし、自身も元の場所に戻ってきた。変身が解除され、足元はおぼつかない様子で。

「龍兎君!貴方!!」

「……………ごめ、ん……………ちよつと、寝かせ、て…」

そう言い、龍兎の意識は転倒と共に途切れた。

?????????

「電子金蚕を見抜いただけでは無く、まさか飛行魔法まで使ってくるとは……………」

「このままでは一高が総合優勝してしまうぞ!」

「……………仕方あるまい。こうなったらジェネレーターのリミッターを解除して観客を殺すしかないな」

「ああ。さすがに武器は持ち込めなかったが、アイツなら素手で百二百ほどなら楽に屠れる」

「よし、異論は無いな。ではジェネレーターのリミッターを解除、観客の無差別殺害を命じる」

「顧客共が騒ぎ出すかもしれないが、そこら辺は知らん顔で押し通せば良いだろう」

「儲けは無いが損もなくなるからな」

横浜の中華街、その一室で今回の黒幕たちが蠢いていた。

?????????

横浜の主犯たちからの指示を受けたジェネレーターは自身に掛けられていた能力制限を解除され、命令された通りに観客を殺戮せんと動き出した。

会場に入つてすぐ、目の前を通りかかった男に襲いかかろうとしたが、そのまま自分の突進する力を利用して会場の外まで放り投げられた。

「……………何者だ。いや、答える必要は無い。どうせ答えられないだろ

うからな」

「……………」

彼にその事を考える能力は——思考はもう残されてはいない。相手——柳もその事を理解してるからなのか、そのまま自ら高速で思考をめぐらせている。

その格好はジェネレーターから見れば大きな隙だらけだったため、観客と認識した柳に再び襲い掛かる。が、またしても自分の力を利用して吹き飛ばされる。

「その身体能力からして、ただの魔法師ではあるまい。強化人間か？」

「…答える必要は無いと言ったのは君だよ」

「答えを期待してではない。ただの独り言だ……つと、来るぞ」

そう言つて柳が構えた時だった。

ダウンツツ!!!

『!?!?』

ジェネレーターの脇腹に銃弾が撃ち込まれ、ジェネレーターはよろめいた。

「不破!!先走るな!!!」

「うつせーな!いいだろうが!!」

「誰だ!」

柳が呼び掛けると、女性の方が返答する。

「我々はRインテリジエンス開発〇一課、テスト班『A. I. M. S.』。私は班長の、刃唯阿やいばゆあです。副社長からこの辺りで不審な動きがあるとの指示を受け、警戒体勢を取っていたのですが…よろしければ、加勢しますか？」

「……………頼む」

「行くぞ不破！」ガチャリ！

「ったく、ようやくか」ガチャツ！

二人の男女——ふわいさむ不破諫と刃唯阿は腰にショットライザーを装着し、プログライズキーを取り出す。

【BULLET!!】

【DASH!!】

【AUTHORISE認証完了】

【KAMEN:RIDER:KAMEN:RIDER:KAMEN:RIDER:KAMEN:RIDER:KAMEN:RIDER:KAMEN:RIDER:】

「変身」!!」

【SHOTRISE!!】

【シューティングウルフ！】

【The 弾丸 elevation が放た increases 増え as 射角 the bullet は増大 is fired す.】

【ラッシンググーター！】

【Try 圧倒 to outrun され this demon 悪魔 to get この left の in 速く the 走つ dust て.】

「行くぞ刃！」

「先走るなど言っているだろう!!!」

二人はジエネレーターに向かって駆け出す。ジエネレーターは魔法を放つも、二人は互いに逆方向に分かれて照準を外させ、そのままジエネレーターの周りを走りながらショットライザーを何度も撃ち込んだ。

「時間も惜しい。終わらせるぞ!!」

「わかってるよ!!」

【BULLET!!】

【DASH!!】

バ

レ

ッ

ト

ラッシンググブラスト

二人が放った特大のエネルギー弾は、互いに融合してジエネレーターと衝突、爆発した。爆炎から出てきたジエネレーターは黒焦げになったまま倒れ、沈黙した。

「…対象の沈黙を確認。任務完了だ」

「協力、感謝する」

「いえ。我々はこれで失礼します」

そう言うのと唯阿は踵を返し、不破も続いた。

?????????

「……親の顔ほどではないけど見知った天井だ」

「まったく、無茶をするなお前は」

「……自分で理解してる。でも、手が届く距離に救えるものがあるならどんな無茶しても手を伸ばして助けたい。馬鹿みただけさ、手を伸ばして届く距離なのに伸ばさなかったら、そっちの方が俺は一生後悔すると思う。それが怖いから俺は手を伸ばすんだ」

「……そうか」

「……！いや試合はどうなったんだ!?!」

「安心しろ。小早川先輩も怪我はないし、深雪が代役に出て優勝したよ。モノリス・コードも会頭たちの圧勝。今年の優勝は俺たちだ」

「……よかった」

「あと数時間で後夜祭もある。その怪我は治さないと」カチャリ

達也はCADを向け、トリガーを引く。達也が若干眉を潜めると、龍兎の傷はほぼ完治していた。

「……『再生』か。ありがとう。借り一つだね」

「いや。三年前のあの日、深雪たちを救って貰った恩には及ばない」

「……そっか。じゃ、さっさと行かないとね。会長や委員長に弄られない内に」

「…フツ、そうだな」

龍兎はベッドから飛び起きると、達也と共に後夜祭の会場へと向かった。

?????????

「!!お兄様!龍兎君!」

「怪我は大丈夫なんですか!?!」

「深雪、ほのか、心配かけてごめんね。今度こそ機丈龍兎、完、全、復、活!もうほとんど大丈夫だよ」

「……………」

「…今回はさすがに、な」

「……………」

「……………」

「?えつと……………」

「いえ、敬語は要らないわ」

話している龍兎たちるところに来たのは、懇親会で深雪に絡んできた愛梨だった。

「貴方、先日言ったことを覚えているかしら?」

「……………」

「クラウド・ボールで倒したはずの里美さんに、光井さん。貴方の言った通り、してやられたわ」

「……………」

「…どうやら目が曇っていたのは私だったようね。ごめんなさい」
スツ

愛梨はそう言い、深く頭を下げた。

「……………」

「……………」もういいよ。こっちもごめんね。今回は…俺も怪我ばっかだったし、俺たちの本当の勝負は来年に持ち越した。次は完全勝利するつもりだから、覚悟しといてよ」スツ

「フフツ…ええ。その勝負、受けて立つわ」パシツ

「…………俺もいいか？」

「！……一条将暉？」

龍兎と愛梨が握手をすると、将暉と吉祥寺がも合流してきた。

「司波。機丈。今回は俺たちの完敗だ。だが、来年こそは俺たち三高が勝つ。もう油断はしない」

「…………だつてさ、達也」

「そもそも俺は本来選手ではないんだがな」

「…………ん？司波？司波……………!!!」

『？』

達也が龍兎に返すと、突然気づいたように将暉が達也の——達也たちの名字を連呼し、目を見開いた。

「お前、彼女と兄妹か!？」

『……………』

龍兎たちに加え、吉祥寺と愛梨までもが「お前、今気づいたの?」と言いたげな目で将暉を見た。

「…達也を名字呼びしてたら普通気づくよね?」

「うぐっ…」

将暉が呻くと、ゆったりとした音楽が流れ始める。

「…深雪。ここでじっとしているのもなんだし、一条と踊ってきたらどうだ?」

「!!」

「…そうですね……………」

「!ぜ、是非とも……………!」

視線で深雪に問われ、将輝は壊れた玩具のように何度も首を縦に振った。それが面白かったのか、深雪は更に表情を明るくしたのだった。そのまま深雪をエスコートしていく途中で、将輝は達也の方を向いて目礼をした。恐らく自分がライバルだと考えていた相手から思わぬ助け舟が出たことを感謝してるのだらうと、周りにいた他の人にも分かるくらい浮かれている雰囲気だったのだ。

「現金なヤツだ」

「まったく」

そんなこんなで、九校戦の夜は更けていった。

?????????

——……同時刻、USNA、とある一室……

一人の少女が、食い入るようにディスプレイを見ていた。そこには九校戦新人戦、モノリス・コード決勝の映像が流れていた。

「な！なんですかあのスーツは!!変身したと思ったらあんなにかっこよく!!羨ましい………やってみたい………でもスターズ総隊長は忙しいし……!」

少女——アンジェリーナ・クドウ・シールズは変身する達也たちを羨ましがりつつ、自身の立場と葛藤していたそうだ。

横浜騒乱編

第19話 『天才からの贈り物』

時は八月中旬——

九校戦が終わり、達也から無頭竜の崩壊——というか達也が『分解』でジェネレーターごと文字通り塵にした——の報告を受け、やつとこさ一息着けると龍兔はRシステム開発に勤しんでいた。が、彼にはある考えがあつた。

「…オリジナルのRシステム作ってみるか」

そう、世界に^{自分が知っている}元からあるライダーではなく、完全に、龍兔が開発者であるRシステムを開発したいと思つていた。

「無論やろうと思えばできる。そのための^{桐生戦兔超えの}天才的頭脳なんだから。ただ問題は、誰にテスターしてもらうか、なんだよねえ…あ、やべ。間違つて押しちまつた……ん？」

そんな考え事しつつ、何かインスピレーションでも湧かないかと、端末——私用に使っているビルドフォンを弄っていると、間違えてあるサイトを開いた。そのサイトの画面を、龍兔は思わず覗き込んだ。

サイトは九校戦に関するもので、そこにはミラーズ・バットで跳んで——否、飛んでいる一人の少女がいた。

「……………これだ!!!」

その日の晩、機道家の地下開発スペースでは誰かに連絡をした後、何かをいじくる龍兎の姿があった。夕食も放ったらかして開発していたが、父の龍誠と母の兎瑠は顔を見合わせて「いつものことだ（ね）」と互いに苦笑いしていた。

——一週間後、司波家……

深雪がちょうど夕食の後片付けを終えると、玄関のインターホンが鳴った。深雪が応答用のモニターに向かうと、意外な人物が映っていた。

「?……………!…龍兎君?」

『やつほー、達也つて今いる?』

「ええ、いるわ、ちよつと待ってて」

龍兎にそう言い、深雪は達也が作業をしている地下に向かった。

「お兄様。龍兎君が来たのですが」

「龍兎が?……………ああ、例のアレか」

「?」

「いや、なんでもない。すぐに行く」

そう言つて達也は椅子から立ち上がり、龍兔の応対をするために、上に上がった。

「……………それで、どうして家に来たの？」

「実はね……………はいこれ！」

「……………これは？」

深雪、達也、龍兔がいる司波家の机の上には、丁寧にラッピングされた二十センチ四方と五十センチ四方の二つの立方体の箱があった。

「遅めの九校戦本戦ミラーズ・バットの優勝兼、早めの生徒会副会長就任のお祝いだよ。二つのお祝いだから箱も二つ。どっちから見たい？」

「あら、ありがとう。そうね……………あら？小さい方から見てもいいかしら？」

「あ、そっちから？いいよ」

箱が一瞬、ひとりでにカタリと動いたのが気になった深雪は、小さい方の箱を取り、ラッピングを剥がす。そして蓋を開けると――

『ピイイイイッ！』

「まあっ！」

「ほう…」

箱から勢いよく小さな機械が鳴きながら飛び出した。見た目は『クローズシリーズ』の自律稼働ガジェット『クローズドラゴン』とそっくりだが本来黒い部分はメタリックなホワイトに染まっており、黄色

の部分は氷を思わせる淡い水色、管の部分は茶色になっている。まるで晴れた日の雪山を見ているようだ。それは深雪の周りをパタパタと数回飛び回ると、深雪の両手にちよこんと降り立ち、そのままもう一度軽快に鳴いた。

「この子は？」

「ソイツは『フリーズドラゴン』。達也から提供してもらった深雪のデータを使って、クローズドラゴンをベースに創った、真正銘深雪専用のRシステムだよ」

その龍兎の言葉を聞いて、深雪は慌てて達也の方を見て言った。

「お兄様、今回のことを知ってたんですか？」

「ああ。実は……」

——
——
——

一週間前、達也が地下で深雪のデータを整理していると、パソコンに着信があった。

「！誰からだ？………龍兎？」

達也は訝しく思いつつ、応答した。

「龍兎。何の用だ？」

『達也にちよつと手伝って欲しいことがあるんだよ。主に深雪関連のお話』

「聞いっしょ」

少なくとも龍兎なら深雪の害になることはないだろうと思い、達也は促した。

『遅めの本戦ミラージュ・バット優勝祝いと早めの生徒会副会長就任祝いを兼ねて、新しいRシステムをプレゼントしたいんだけど、それに当たって深雪のCADのデータを送って欲しいんだよ。深雪のデータをベースに冷却魔法を補助する働きを付けたいんだけど、ベースのデータが無いと本末転倒だから。勿論、データはそれにしか使わないし、使用後は速攻削除するけど、どう?』

「……ということがあってな。そう言えば龍兎」

「ちやーんと完全削除してあるから安心して」

「それならいいが」

「と言うわけで、大きい方の箱はビルドドライバーだよ。ちょうど達也とパールツクにしといた」

「!!」

龍兎から衝撃の一言を受け、深雪の顔が瞬時に赤くなる。

「(ペ、パールツク!?そそそそ、そんな夢が現実に…!!これで……お兄様と…制服以外でのパールツクが……!!?)」

「……………えと、深雪さく…ん?大丈夫?」

箱から出したビルドドライバーをカタカタ高速で振動しながら持っている深雪を見て、龍兎は心配そうに聞いたが、どうやら杞憂

だったようだ。

「ありがとう龍兎君！最高のプレゼントよ!!」

「!?そ、そう…ならよかった…あ、そうだ。」

ボトルはこの専用の『F D フルボトル』フリーズドラゴンを使ってね」

「深雪。もしやりたいなら、地下でテストしてみるか？」

「ほ、本当ですか!!はい！是非やります!!行きましょう!」

『ピイイイッ♪』

ルンルンという擬音が聞こえそうなほど上機嫌な深雪につられ、フリーズドラゴンも深雪の周りをパタパタと飛びながら地下のテストスペースに向かっていった。

「…僕たちも行こ」

「そうだな」

達也と龍兎も、深雪のテンションの高さに若干苦笑いしつつ、深雪の後を追った。

?????????

——…司波家地下、訓練スペース…

「それじゃ深雪、早速やってみて」

「ええ。おいで!」

『ピイイイッ!!』

深雪が呼ぶと、フリーズドラゴンは素早く頭と尻尾を折り畳み、ガジェット形態となって深雪の右手に収まる。そして深雪は左手に持っていた『F Dフルボトル』フリーズドラゴンを軽く数回振ってシールディングキャップを回し、フリーズドラゴンに差し込んだ。

【ICE UP!!】

【FREE—Z DRAGON!!】

【トンカントンカントンカントンカン!!】

そのままボルテックレバーをゆっくり回転させると、それに呼応してボルテックチャージャーが水色と白に発光しながら回転する。そしてスナツプライドビルダーが展開されるが、通常と比べると、成分を流すファクトリアパイプラインや下部のランナーに所々霜が降りている。

【ARE YOU READY!】

ベルトの問いかけに、深雪は堂々と答えた。

「変身」

【WAKE UP ICING!! GET FREE—Z DRAGON!!! YEAH!!】

深雪が言うと、スナツプライドビルダーがバキバキと霜を砕きながら重なり、大量の冷気を吹き出しながら重なった。そしてそこにいたのは、白のアンダースーツの上にクリアブルーのアーマーを装着した深雪だった。頭部のドラゴンをモチーフとした複眼や口元を覆うマスクは半透明で、表情が見える分女性らしさが増している。そして額

には雪の結晶のようなパーツが誇張するように取り付けられている。胸部や脚部はジャストフィットスーツのように深雪の高いスタイルの良さを引き出しており、腰から下は白の生地にクリアブルーの装飾が施された振袖のようなスカートが下りている。ただし、動きやすいように前部のみ膝元までの短さだ。

そんな、雪の女神のような姿に変わった深雪を見て達也と龍兔はそれぞれそれぞれの感想を述べた。

「綺麗だよ深雪。まるでダイヤモンドダストを見ている気分だ」

「そうだな。深雪に似合う、とてもいいデザインだと思う」

「ありがとうございます、お兄様、龍兔君」

「あ、それと深雪。そのフリースドラゴンだけど、深雪の成長に合わせて今後改良を加えることもあるかもだから、そこはよろしくね」

「ええ、わかったわ」

その後、深雪はフリースドラゴンをかなり気に入ったようで、朝の達也の訓練や休み明けの学校などにも連れ回しており、生徒たちから「深雪に使い魔ができた」という話が広まったとか。

第20話 『なぜ彼女は生徒会長を断るのか』

夏休みが明けても、この生徒会室にはいくつかの問題が残っている。その内の一つが、『生徒会選挙』である。しかし、この第一高校の生徒会選挙は基本的には形だけのようなものだ。その中身は、入試首席の生徒を前生徒会長となる人物が推薦する形式を取っているためである。

治外法権ではないか、とは思いますが、これにもれっきとした理由が存在する。というのも、よく考えてほしい。

魔法科高校は全国に九つ。そしてそれぞれの高校から、毎年一人しか輩出されない生徒会長の肩書きを持っていた生徒——その肩書きは非公式ながら軍の高階級にも匹敵するとか。そんな肩書きを狙って、四年ほど前には負傷者が出るような大騒ぎになり、それ以降、生徒会長が次の生徒会長を推薦するというスタンスになったそうだ。

「……………いや、どこの紛争地帯？」

「実際にあつたからな。だからこうして中条先輩の説得に俺や深雪だけではなくお前も駆り出されたんだ」

「…まあたしかに、昨日言われた通り餌も持ってきたけどさ……………ここまでする？…普通」

「普通はないだろうが、生憎今回の件で普通は通用しないから安心しろ」

「……………あ、そ…」

次の生徒会長候補であるが、頑なにそれを拒否している梓の教室までの道のりで、龍兎はそんな物騒な話を達也としながら深雪を連れて歩いていた。

?????????

そんなこんなで、達也、龍兎、深雪の三人は現在カフェで梓を説得していた。

「中条先輩、生徒会長選に立候補してください」

「わ、私には無理です……私なんかよりもっと相応しい人が居ます」「そうですか」

達也のため息に耐えられず、梓は視線をさまよわせる。そして再び深雪とバツチリ目が合ってしまった。その感情の読めないアルカイックなスマイルに飲み込まれる錯覚に陥り、彼女は無意識に視線をズラした。龍兎の方にだが。

「なにか？」

「……………あ、あうう……………」

何の混じり気も無い無機質な視線を向けられ、梓が視線を下にずらしたタイミングで、達也のため息が聞こえてきた。

「良いんですか？ 五年前の悲劇を繰り返す事になっても」

「ッ!?!」

「(うわ……………)」

「当時の映像は残ってるんでしたよね？魔法による大きな負傷……………出来れば見たくない光景でしょうね」

梓は生徒会書記として勿論その時の映像を見ている。繊細な彼女はあの映像を見て吐きそうになったのを思い出し、もし自分が立候補しなかったらその光景を映像では無く生で見る事になるのかもしれないといわれていると理解し、明らかに動揺した。龍兎はその様子を

見てドン引きしている。

「わ、私にどうしろと言うんですか」

「中条先輩が立候補すれば良いんですよ。大丈夫です、先輩なら出来ます」

「少なくとも、俺たちはそう思ってますよ」

達也が脅し、深雪と龍鬼が手を差し出す。実にやり手な方法ではあるが、彼女にはとても効果的だった。

「で、でも私じゃなくても他の人を立候補させれば……」

「中条先輩なら七草会長のやり方を理解してまずし、一年間会長の下で勉強してたのは中条先輩と服部先輩です。そして服部先輩は時期会頭に内定してますし、やはり中条先輩が立候補するのが一番なんですよ」

達也が梓の逃げ道を一つずつ潰しにかかる。そして彼女が次の言い訳を考えてる間に、達也は自分が彼女の説得に用意した最大の飴を取り出す事にした。

「そういうえば、再来月発売のFLTの飛行デバイスが、モニター用に二つ手に入りました」

「えっ！それって飛行魔法を最も効率的に使えるという、あのシルバーの最新モデルですよね!？」

先ほどまで沈んで、活力がなかった梓の顔に唐突なエネルギーが入り込み、彼女は顔を赤くしながら勢いよく上げた。

「まあ、モニター用で非売品ですのでリアルナンバーはありませんが、製品版と変わらぬ効果を発揮してくれると思いますよ」

梓は欲しいという感情を盛大に晒していたが、その後の言葉は予想外だった。

「そ、それ、でも……………無理、です……………」

「!?!」

まさかの拒否。二人は珍しく目を見開くが、たった一人例外がいた。

「そーですか。じゃ、これも要らないんですね」

掌で何かを器用にクルクルといじりながら龍兔がわざとらしく言った。達也と深雪、梓はそちらを向く。そして梓が目にしたのは、更なる飴だった。

「そ、それは!!まさか——」

「そう。九校戦の第一高校優勝記念でRインテリジェンスが開く公式懸賞の一等賞品。世界にたった十個だけの激レアアイテム、『ゴールデンファルコンプログラミングスキー』ですよ」

「!!!!」

三人は普段からニュースを見ているが、これは昨日発表された話だ。Rインテリジェンス社長の機丈龍誠が息子である龍兔が通う一高の九校戦優勝を記念して、大々的に開催する予定の懸賞。今龍兔が持っているプログラミングスキー、従来の桜色とは一線を画す黄金色に輝くそのキーこそ、一等賞品である『ゴールデンファルコンプログラミングスキー』なのだ。変身時の外装パーツのほぼすべてが純金製のその価値は一等地に建てられた豪邸丸ごと匹敵するとすら言われている。しかもそれはあくまで純粋な価値であり、希少性などの付加価値を考えると、卒倒するような値段に跳ね上がる。しかし、達也たちの情報とは少し齟齬があった。

「龍兎。そのプログライズスキーは『九個』だったはずだが、俺の勘違いか？」

そう。Ｒインテリジェンスの発表では、懸賞に出されるプログライズスキーは九つ。今龍兎が持っている物と合わせると一つ多くなるのだ。

「そりゃあ、懸賞に出すのはN○・001〜009までの九つだよ？ た、だ、し。このプログライズスキーは幻のN○・000。本来この世に存在しないはずの激レア中の激レア。世界にたった一つだけの超激レアなんだよね〜」

「せ、世界に一つだけ!?!」

「はい。達也の飛行デバイス同様、会長就任のお祝いにも、とっていただくのですが……辞退されるのなら仕方ないですね。誰か他の人にでも——」

「やりますっ!!相手が怪物だろうと誰だろうと会長の座は1ミリも渡しません!!」

「ね?達也。こういう飴は最大まで引き寄せてからだよ。空腹は最大のスパイス、ってね」
「なるほど、参考になる」

まあ、彼女以外に立候補者はいないのだがそこは言わないお約束だと理解している三人だった。

?????????

こうして数日後、生徒会選挙当日がやってきた。一学期に真由美が

言っていたように、反発がほとんど押し退けられた生徒会の二科生禁止制度の撤廃が可決され、次に梓の承認演説が始まった。しかし、これもまたそう簡単にはいかないようだ。

「梓ちゃんはワイルドな年下が好みなの〜?」

「結局は能力で決めるんだろ〜?」

くだらない野次が客席から飛んだ。おそらくは梓なら反撃しないだろうという考えと、真由美の演説での不完全燃焼からきたものだろう。だが、彼らは誤算していた。

「誰だ梓ちゃんを侮辱したのは!?!」

「引きずり出せ!!」

このように、一部の梓の熱狂的なファンが犯人を探そうと躍起になり、場は騒がしくなった。とその時、災害が起こった。

「静まりなさい!!」

「!!!?」
「!!!」

その場の全員が壇上を見ると、深雪から吹雪のような想子が吹き出していた。その表情は怒りを称えている。かなりの出力のようで、いつも深雪の周りを飛んでいるフリーズドラゴンも近づけずにいる。

「達也!これ!!」

「!」

龍兎は達也に赤と灰色、二本のフルボトルを投げ、達也はそれをキャッチする。そして龍兎も、赤いプログライズキーを取り出した。

「取り敢えず止めるよ。このままじゃ講堂が氷漬けになっちゃうし

！」

【ZERO—ONE DRIVER!!】

【FIRE!!】

【AUTHORISE^{認 証 完 了}】

「扉を開けて!!」

龍兔がプログライズキーを認証させてそう叫び、風紀委員たちは反射的に扉を全開にする。と、空から赤い虎型のライダモデルが着地し、大きく咆哮を上げた。

《color:#ff2727》フェニックス

【フェニックス!】

【ロボット!】

【BESTMATCH!!】

【トンカンテンカントンカンテンカン!!】

【ARE YOU READY!?!】

達也もフェニックスフルボトルとロボットフルボトルをビルドドライバーに装填し、ボルテックレバーを回転させスナップライドビルダーを展開する。そして龍兔もプログライズキーを構え、二人同時に宣言した。

「変身」「変身!!」

【不死身の兵器!】

フェニックスロボ!

イエーイ……!」

【PROG RISE!!】

【G I G A N T ^大 F L A I R ^炎!!】
【フレイミングタイガー!】

【Explosive power of one hundred bombs ^爆 ^個 ^分 ^の ^爆 ^発 ^力】

達也の言葉によりスナツプライドビルダーが重なってスーツが形成された。左腕にはいかにも武骨なアーム——デモリツションワンが取り付けられ、右腕は炎のようなユニット——フレイムリヴァイバーで覆われている。そして複眼の形は炎を纏った鳥とロボットアーム。これが【仮面ライダービルド・フェニックスロボフォーム】である。

そして龍兔がプログライズキー——フレイミングタイガープログライズキーを装填すると、ライダーモデルが器用に階段をジャンプしながら龍兔のそばに着地する。そして周りを一周し、龍兔の真後ろに来たタイミングで分解され、龍兔を覆うアーマーとなり、龍兔は【仮面ライダーゼロワン：フレイミングタイガー】に変身した。

「行くよ!!」
「ああ」

【トンカンテンカントンカンテンカン!!】
【フレイミングインパクト!】
【READY・GO!!】

イ レ フ

パ ン イ

グ　ン　ミ

ト　ク

【VORTEC　FINISH!!　イエーイ!】

龍兔が両手をクロスさせて放った炎の斬撃が客席に迫る吹雪を相殺し、そこから達也の放った想子を大量に含んだ炎撃が深雪の周りを円を描くように包み込む。

その炎が晴れると、驚きつつも落ち着きを取り戻した深雪がいた。周りを飛んでいたフリーズドラゴンがその左肩にちよこんと乗り、心配そうに深雪を見詰めている。

「…………お騒がせしました。ですが、これはアイドルのライブでもなければふざけていい場所でもありません。野次を飛ばしたりするのは控えて下さい」

その深雪の一言と、無言で客席を見る二人の戦士から放たれる圧で会場の熱はすっかり収まり、投票は手早く終わった。

尚、票の内訳は深雪150票、龍兔132票、達也124票、梓が107票で、深雪の『スノークイン深雪様』や『鉄火の戦士司波達也』、『仮面戦士龍兔様』といったあからさまにふざけた票のせいで深雪が吹雪どころか一高に氷河期を起こすレベルで怒りかけていた、という事実を補足しておく。

第21話 『論・文・大・会』

食堂の一角で、いつものメンバーと昼休みを過ごしていた龍鬼たちの話題は十月に控えた『論文コンペ』になっていた。

九校戦が力を比べる大会ならば、論文コンペは知恵を比べる大会。九校戦ほどではないが、発表された論文は国際魔法協会や、それだけでなくも大手の魔法技術の雑誌に取り上げられるほど注目されている。毎年、日本の魔法協会の本部と支部がある京都と横浜で交互に開催され、今年は横浜での開催だ。達也はコンペの存在を最近知ったため出ないと思われていたが、三位の平河小春という三年生が辞退し、代わりに出るようになったとわかったところで、エリカは龍鬼にも問いかけた。

「……で、達也くんが出るのはわかったけど、なんで龍鬼くんは出ないわけ？」

「ああそれね。実は百山校長直々に止められた」

『え!?!』

達也と深雪以外の全員が声を出して驚いた。校長の百山は百家の一つに身を連ねており、その権威は魔法科高校の中でもかなり大きい。現代の日本における魔法教育の第一人者とすら言われている彼から直々に止められたというのはそれだけ大きな話である。

「なんでも、俺が出たらRインテリジェンスがスポンサーになりかねないから、公平性を保つためだっけ。そんなことしないってのに」「まあでも、多少はわかるかもな」

Rインテリジェンスは先日開かれた公式懸賞でとんでもない価値のアイテムを九個も一等賞品にした会社だ。そんな会社の息子がコンペを担当するということは、会社から最大限のバックアップが約束

されるようなものだ。今回龍兔が止められたのはこれを防ぐためと
いうことらしい。

「まあそういうこと……もう時間だ。行かないと」

話を切り上げようとしたところで予鈴が鳴ったため、この場は一時
解散となった。

?????????

——……のだが、達也はどうかやらトラブルに惚れられているよう
だ。

「義母の襲撃にホームサーバーへの攻撃って……どうやったらこの数
日でそんなトラブルの嵐がやってくるのか逆に教えて?」

「俺に言われても困る」

コンペで必要な物があつたのだが、購買部が丁度在庫切れだったた
めに、達也、龍兔、啓、花音の四人は近くの大通りへ買い出しに来て
いた。啓と花音は前でイチヤついているため、達也と龍兔はなるべく
聞こえないように会話している。

「おそらくは、義母の聖遺物^{レリック}狙いだろうがな」

「レ、聖遺物?なんでそんなものが……ああ、達也の魔法で解析し
ろってこと?いくらなんでもそれは無茶なんじゃない?FLTはU
SNAから飛行デバイスの大量受注受けてるんでしょ?わざわざそ
んなリスクを負わなくても」

「どうやら国防軍絡みのようだ」

「……………俺の力で手伝う?」

「それも考えたが、これは俺がやるよ」

「?そう………達也」

「ああ、まだ手は出さないほうがいい」

二人は何か悪意のある視線に気づいていたが、敢えて触れずにいた。が、その方針は買い物を終えるタイミングまでだった。

「それにしても啓とデート出来るなんて思ってたよ♪」

「花音、これ一応学校の用事なんだから浮かれ気分じゃ駄目だよ」

「でも最近はおたしも啓も忙しくなってなかなか一緒に出かけられなかったじゃん。学校の用事だとか関係無く、おたしは啓と一緒に出かけられて嬉しいよ」

「花音…」

許婚同士が雰囲気醸し出しているのを達也と龍兎は生暖かい目で見つめていたが、やがて今はそんな場合ではないと切り替えた。

「先輩」

「如何かしたのかい?」

「監視されているようなのでその雰囲気はマズイのではないでしようか」

「わかりますけど、今は切り替えてください」

「監視!?!どこ!!?」

「あ、ちよつ——」

花音が叫んだせいで、木の影に隠れていた人物——二科生の制服を着た少女は花音に閃光弾を投げつけて逃げ出した。それで花音が足止めされた隙を縫って近くに停めていたスクーターロード・エクステンションに乗り込み、急発進しようとしたが、啓が放った放出系魔法『伸地迷路』によってタイヤと道路の斥力が近似的に0となったことでタイヤは空回りしている。しかし、ここで予想外の事態が起きた。

少女がハンドルの近くにあった透明な蓋を開けてスイッチを押すと、スクーター後方の両サイドから一門ずつロケットエンジンが飛び出した。そのままロケットエンジンは噴煙しながら文字通り急加速し、あつという間に小さくなつていった。ただし、龍鬼はロケットから何かを取り出してそれをバイクが向かった方角に投げていた。

?????????

「……………——それで、例のものは？」

「はっ、件の司波小百合が持っているようです」

「先日訪れた家の事はどこまでいった？」

「はい、夫の連れ子が生活してるようです」

「義理の子供の機嫌を取りに行つたって事か。それで、その子供の名前は？」

「兄が司波達也、妹が司波深雪です」

「司波達也？…何処かで聞いた名前だな」

少女が逃げ込んだ車の中で、男は部下からの報告の中で聞き覚えのある人名を耳にした。その男——陳が達也の名前に聞き覚えがあったのは、今回の一件におけるとある協力者から千秋を使わせてもらう際にその事情を説明されていたからである。その事を思い出して陳は悪事を考えている顔をしつつ、部下に命じた。奥にいる虎のような雰囲気を持つ大男にも同様に命令する。

「内通者に連絡をしておけ。それと小娘への支援を強化。機密情報の漏洩が最も効果的な報復になると教えてやれ。あと小娘に武器を持たせろ。……呂上尉」

「是」

「現地で指揮を取れ。他所の犬が嗅ぎまわってるようなら排除しろ」

その命令にニヤリと獰猛な笑みを浮かべた男は無言で車から降り、消えていった。

——空から自分たちを撮影している、蝙蝠のような影に気づくことなく。

?????????

そんなことがあつて数日後、龍兎たちはいつものように昼食を摂ろうとしていた時、龍兎がある違和感に気づいた。

「……………あれ？エリカとレオは？」

「ああ、あの二人なら今日は多分休みだよ」

「えっ、二人一緒にですか？」

「…ああ、二人揃ってだ」

「(……………人が悪いなあ…………)」

達也はほのかが何を誤解したか、彼女が何を期待しているかを瞬時に理解し、その上で人の悪い笑みを浮かべながら若干言い回しを変えて頷いた。龍兎はその変化に気付き、内心呆れている。

「意外……………でも、ないのかな？」

普段感情をあまり表にしない雫も、口調は平然としていたが、その目付きはいかにも興味津々なのを隠せていない。

「え、そうなんですか!？」

「美月、貴女が私たちに訊いて如何するの」

「美月は二人と同じクラスだよね？」

エリカとレオと同じクラスである美月が目丸くしたのを、深雪と龍兎が反論した。二人のクラスメイトである美月の方が深雪たちよりもエリカとレオの関係に詳しいのは当たり前なのだから、二人の反論は至極当然のことだった。

「あうう……………そ、そうですね…な、何かあったんでしょか……………」

困惑した美月は助け舟を求めて目を泳がせると、幹比古が口を開いた。

「えっ? いや、特にそんな素振りは無かったと思うけど「そういえば、昨日は二人で帰ってたな」!？」

幹比古の答えで少し場が収まるか、と思われていたところへ達也が

再度膨大な燃料を投下した。その言葉にはしやぐ三人を横目に、深雪は少し生暖かい目を兄に向けた。

「(お兄様、先日の件でストレスが溜まってるのでしようか……?)」
「でもエリカちゃんとレオ君、本当に如何して休んでんでしょう?」
「そうだよ。あの二人に限って急病って事も無いだろうし……」

一旦沈静化かに見えた『二人が一緒に休んで何かをしている疑惑』は、全員のトレーから食べ物が無くなると再び展開された。

「それは言い過ぎと言いたいところだが、同感だな。昨日まで体調を崩してる様子は見られなかったし」

「そもそも、あの二人が体を簡単に壊すとはちよつと考えにくいし」

幹比古と達也、龍兔の三人は揃って「病欠ではない何か」と言う結論のようだ。

「もちろん偶然って可能性もある訳ですけど……」

「偶然じゃない、という可能性もあるよ」

「それは、まあ、そうだけど……」

「そもそも『偶然じゃない』というイベントが起こりうる仲なのかしら、あの二人?」

「起こっても不思議ではないと思うけど……」

「わ、私もそう思います」

「でも仮に二人が今一緒に居るとして……いったい二人で何してるのかしら?」

深雪が小首を傾げながらつぶやいた言葉に、美月と幹比古が時間差で顔を赤らめた。

「……二人共何を想像したのかしら?」

「い、いや！何でもないよ!？」

「えっ、そ、そうなの！なんでもないの！」

「……まあ、良いけど」

「……………」

互いに分かりやすい反応を見せた二人にやれやれとため息を吐いて、深雪は達也へと視線を向けた。

「そうだね……仮定の上に想像を重ねた根拠も無い意見だけど……案外レオがエリカにしごかれてるんじゃないかな」

「フフツ、ありえそうですねそれ」

「…ちよつと待って、それだとあの二人は何の特訓してるの？」

『……………』

龍兔が発した言葉で、達也以外の全員が頭を唸らせる。たしかに、訓練とは言ってもそれが本当なのかすらわかっていないのだ。

「……………まあ、他人のプライベートはあまり深く突っ込まないってことで」

そうしてこの場はお開きとなった。尚、この翌日レオとエリカの二人は一緒に登校したところを龍兔たちに見られ、赤面しながら焦っていた、とだけ追記をしておく。

第22話 『ガスと収監所と謎の虎』

日曜日、龍兎は達也にあるものを渡すために学校へ来ていた。他にも生徒会関係者などもいるので、制服で来ている。入って数分後に雨が降ってきたため、龍兎は空模様を見ていた。と、達也と深雪が入ってきたのを確認し、龍兎は近づいた。

「達也」

「！龍兎か。どうした？」

「先日のロケットバイクの件、覚えてる？」

「：深雪、先に行つてくれ」

「わかりました、お兄様」

そう言つて深雪が奥の方にいたほのかと雫と合流したのを確認し、達也は話を戻した。

「覚えているが、それがどうかしたのか？」

「風間さんにはもう送ったけど、かなりめんどくさいことになってきた。あのバイクをバットショットに追跡、撮影してもらったんだけど、厄介なのが映つてた」

「…これは？」

龍兎が見せたビルドフォンには、大柄な、猛獣のような雰囲気を持つ男が車から出る様子が映っていた。

「ルウガンフウ呂剛虎：『人喰い虎』と呼ばれている大亜連合の魔法師だよ。近接戦闘にかけては世界十指に入るとすら言われているやつだ。おそらく、今回の件は大亜連合絡みと考えて間違いない。あの時の女子……千秋さん、だっけ？あの娘みたいなやつが今後達也にちよつかい出すかもしれないから伝えとこうと思つて。もしかしたら、コンペのある

横浜に来る可能性も無いとは言いきれない」

「わかった。こちらでも警戒しておく」

「うん。これから魔法式の調整だよ。あと少しだし、気合い入れて頑張ってるね」

「ああ」

「そう言ってる、達也はガレージの方に向かった。」

?????????

フラグとは、以外と日常会話の中で立つことが多い。それが今日実証されたと言ってもいい。

廊下を歩いていると、空気に少しおかしな色が混じっているのを見た龍兎はその空気の発生源を辿り——盛大に肩を落とした。

「……………一応、何が起こったか教えて？」

達也曰く、風紀委員の三年生である関本という生徒が達也のいるガレージに睡眠ガスを散布し、達也が寝た——正確には狸寝入りだが——間に達也のデバイスからデータを盗もうとしたところを花音と達也のから挟み撃ちにされ、盛大にかっこつけた結果見事にKOされたようだ。

「……………なんかごめん」

「？」

自身の言葉がフラグになったのか、と落ち込む龍兎であった。

?????????

結局、コンペ五日前の日に八王子にある特殊収監所に龍兎、達也、真由美、摩利は訪れていた。目的は関本の尋問である。尋問とは言うものの、拷問器具のような物は使わずに摩利が魔法で気体を調査して作った即席の自白剤を無理矢理関本に投与し、情報を引き出す、というものだ。——風紀委員の件といい、彼女の辞書にモラルという言葉は無いのだろうか。

龍兎と達也は若干呆れつつも、摩利の質問に対する関本の返答を聞いていた。途中で龍兎が内心でギョツとしたのが「デモ機のデータを吸い上げた後、自分の私物を調べる予定だった」という告白で、摩利がその目的を問うと『宝玉の聖遺物』だと答えた。

「達也君、そんな物持ってるの?」

「いいえ、持っていません」

「じゃあなんで…」

「少し前から『賢者の石』絡みで聖遺物の事を調べてましたから、それを勘違いしてたんじゃないでしょうか」

「最近図書館に籠ってたのってそれが理由?」

「…ああ」

龍兎は達也が本物の聖遺物を所有し、現在はFLTの研究室で解析中だということを知っているが、真由美を誤魔化すために一芝居打っていた。その甲斐があったのか、真由美目線をモニターに戻そうとした時——上方から轟音が聞こえたのとほぼ同時に警報がけたたましく鳴り響いた。三人はすぐに部屋から出ると、同じく部屋を出て鍵を掛けている摩利がいた。

「侵入者か？まったく…先日の一件でこのような施設は警戒レベルが普段より高いというのに」

「達也君、何処から来てるか分かる？」

「……………どうやら屋上から侵入したようですね。飛行機から飛び降りたか、あるいはカタパルトを使つてジャンプしたか、そんなところでしょう。現在位置は東階段三階付近だと思えます」

「まあ、上から音がしたなら何らかの乗り物使わないと無理だし、屋上からならルートも限られますしね」

真由美の問いに達也が端末を操作しながら、龍兔が顎に右手を当てながら答える。二人の回答を聞いて真由美が虚空に焦点の合つてない目を向けた。彼女の先天性のスキルとも言える、知覚系魔法『マルチスコープ』をフル稼働させて指し示した場所を見ると二人からも理解できる。

「……………大当たり。さすがね二人共。侵入者は四人、ハイパワーライフで武装しているわ。今は警備員が階段の踊り場で楯のバリケードを作つて応戦してる」

「廊下の出入口は隔壁で閉鎖されているようですね」

「……………いや、この音…」

「どうした？」

真由美と達也が現在の敵と自分たちの状態を分析していると、耳をピクリと動かした龍兔は中央階段を睨む。その様子を見た摩利は怪訝そうに龍兔に問いかけた。

「渡辺先輩。気付きませんか？銃声に紛れてますが、何か、来ます」

龍兔がそう言つてゼロワンドライバーを装着し、達也も咄嗟にビル

ドドライバーを装着すると四人の視線の先に大柄な若い男が姿を見せる。真由美を除いた三人には、その男に見覚えがあった。

「……………呂剛虎」

「この場は逃げるべきなのですが、少し遅かったようですね」
「達也、これ」

龍兎はそう言って達也に群青色と黄土色、2本のフルボトルを投げた。

「これは…」

「相手が『虎』なら、ベストマッチでしょ？」

「……………なるほど」

二人はそれぞれのアイテムを持つと、真由美、摩利と呂剛虎の間に陣取った。

「渡辺先輩は七草先輩の護衛をお願いします」
「……………わかった」

摩利は呂剛虎と戦えないからか、やや不満げだったが了承した。呂剛虎は片眉を上げ、二人の腰のベルトを疑うように見ている。

【FIRE!!】
【AUTHORISE^{認証完了}】

【ドラゴン！】

【ロック！】

【BESTMATCH!!】

【トンカントンカントンカントンカン!!】

「ARE YOU READY!？」

「!？」

突然前に現れた何かの模様とランナーに驚いた呂剛虎は咄嗟に飛び退く。その間に入り口のガラスを破壊して赤い虎型のライダーモデルが割り込んだ。更にランナーには群青色と黄土色のハーフボディが形成される。

「変身」

「PROG RISE!!」

「GIGANT FLAIR!!」

「フレイミングタイガー!」

「Explosive power of one hundred bombs」

「封印のファンタジスタ!」

「キードラゴン!イエーイ...!」

龍兎は以前と同じフレイミングタイガーに、達也は複眼の左側が龍、右側が錠前を模したフォームである「キードラゴンフォーム」に変身した。左腕には肩にある鍵のようなパーツ——BLDセキュリティシヨルダーと鎖で繋がれた頑強そうな鍵——バインドマスターキーが搭載されており、右腕には白い牙のような刃——ファンングオペレイドが取り付けられた青い腕——ドラゴラッシュアームで覆われている。

「さあ、さっさと終わらせるよ!」

「っ!」

そのまま二人は呂剛虎に向かい、呂剛虎もまた異形の姿に変身した

そして十月三十日、運命の歯車が動き出す日は、すぐそこまで迫ってきていた。

第23話 『Dの襲撃／白い悪魔』

前日までになんやかんやとトラブルが続いていた論文コンペだが、当日はこれといった事件もなくスムーズに進んでいた。一高の発表は午後三時から。午後の部が一時から始まることを考えると二時間の猶予がある。二時間とは言っても鈴音たち代表からすると足りないようで、慎重かつ迅速な最後の打ち合わせをしていた。しかし、達也は電話に出るために廊下にいた。そして戻ってきたその顔はあまり芳しくない。いや、達也は元々感情をあまり表には出さないが、体から放つ雰囲気はあまりよろしくはなかったと言っべきだろう。

「どうしたの？誰から？」

「：藤林少尉からだ。呂剛虎を護送していた船が襲撃され、本人は逃亡した、と」

「タイミングを考えると……さすがに偶然とは言いきれないね。一応警戒しとくよ」

「そうだな」

そんな不穏な会話もあったが、結果的に一高の発表は大成功に終わった。第一高校のテーマは龍兎たちRインテリジェンスが解決した『常駐型重力制御魔法』と同じく加重魔法の三大難問の一つである『重力制御型熱核融合炉』についてだ。このテーマには生徒たちだけではなく魔法大学関係者や民間研究機関の研究者も注目している、まさしく一大テーマと言えるだろう。鈴音が魔法師の地位向上を目標とし、それに五十里と達也が手を貸して漸く発表まで漕ぎ着けたテーマだけあって、鈴音も何時ものように涼しい顔をしてはいられなかった。発表の為に作られたデモ装置には、達也が『シルバー』として開発した『ループ・キャスト』という、まったく同じ魔法を連続発動させる技術が使われている。もちろん鈴音も五十里の二人は『ループ・

キャスト』技術を考案、開発した人物が達也だと言う事は知らない。だからデモ装置を作る際に達也が考案したアイデアには驚きを隠せなかった。九校戦で同じエンジニアとして調整をした五十里も、達也の持つ技術力の高さには目を見張るものがあったのだ。そして何より大衆の目を引き寄せたのは、『ループ・キャスト』技術を使うことによって、断続的核融合反応を可能とした点だった。『見掛け上のクローン斥力を10万分の1にする』という新魔法を使うことで継続的核融合を捨て、断続的に核融合を起こすというアイデアは高校生が考えるアイデアとは思えないほどに革新的だったのだ。

そして舞台から降りた達也に、次の三高の発表の準備のために壇上にいた吉祥寺が自分たちが勝つと意気込んでいた時、轟音と共に会場が大きく揺れた。

「お兄様、これはいったい?」

「正面出入口で擲弾が爆発したのだろう」

「普通に考えて、流れ弾なんてもんじゃない:おそらく、ここに狙いを定めた上で爆発させた:となれば、少なくともここが敵のターゲットの一つと考えて間違いないだろうね」

「先輩方は大丈夫なのでしょうか:」

「正面は協会が手配した正規の警備員が担当していたはずだ。実戦経験のある魔法師も警備に加わっている。普通の犯罪組織レベルなら問題ないはずだが:」

「:.....いや、そうでもないっぽい。この音、普通のアサルトライフルじゃないよ」

「フルオートじゃない:.....対魔法師用のハイパワーライフルか」

「ということとは、襲撃犯の正体も自然と絞られてくるね。ただでさえ、ハイパワーライフルは魔法師の防御魔法を貫通させるために本来のライフルの三、四倍の爆発力のあるガンパウダーを使う。でも、通常の銃器製造技術より二段階も三段階も上の高度技術が必要になる。小国だったら製造はおろか配備も出来ない武器の音がいくつもあ

るってことは……」

「やはり大亜連合……だとしてもだらしない」

「大人しくしろっ！」

達也の言葉と同時に突入してきた襲撃犯の怒声は、どこかたどたどしきを感じさせるものだった。外国人——大亜連合の兵士であるとしても、密入国したのはつい最近の事だったのだろうと二人は感じていた。

たしかに、現代魔法はCADによる高速化で銃器との対等のスピードを手に入れたと言っても、それはあくまで対等なだけであり、魔法師の力量次第でもある。相手が既に銃を構え、狙いを定めている状態では無闇に抵抗しないのがセオリーだ。

「デバイスを外して床に置け！」

テーマが対人に流用可能なものだったのか、用意していたプレゼン用のCADで魔法を放とうとしたが、即座に壁に撃ち込まれ、壁を挟った銃弾をチラリと見た三高の生徒たちは口惜しそうな顔でCADを床に置いている。彼らの対応を感心しながら見ていた達也だったが、生憎すぐに他人事では済まなくなった。通路に立っていたのが偶々達也たちだけだった所為で目についたのだろう。

「おい、オマエもだ！」

「お兄様……」

「達也」

「(どうやらここまでか……)」

侵入者は全部で六名。フロントとバックアップのユニットが三つといった構成だ。達也は会場に侵入したテロリストにCADを使わずに照準を合わせて、心の中でつぶやいた。

「(出来れば誤魔化せる魔法で済ませたいが)」

これだけの人の目がある中で軍事機密でもある『雲散霧消』を使うのは好ましくないのだが、いざという場合は仕方が無い。達也は無表情にそんな事を考えていたら、侵入者の怒声が浴びせられた。

「早くしろっ!!」

苛立った声で怒鳴られても、達也は恐怖も不安も無い冷やかな眼差しを向けた。その眼に苛立ちと、正体不明の恐れを感じた男は引き金に置いていた人差し指に力を入れた。

「おい、待てー!」

仲間の制止も虚しく銃弾は無慈悲に放たれた。

——……上に、だが。

「なにっ!？」

『キエエエオ!』

「……………これは…」

銃身を弾かれた兵士の足元にいたのは、両足が外骨格のようなアーマーで包まれたT・レックスのようなガジェットだった。その口には何かが啞えられている。そしてガジェット——ファングは、それを龍兔に投げつけた。

「…できれば使いたくはなかったけど、考えるのは後回しだ!!」

ガチャリ!

「……………!!龍兔君、それ……………!!?」

それに驚いたのは、達也でも、深雪でもなく、近くにいた真由美だった。龍兔がキャッチして腰に当てたのは、紅い二つのスロットが付いたデバイス——ダブルドライバ―だったのだから。

【Joker!!】

「来い、ファング!!」

『キエエエエオオン!!』

ダブルドライバ―を装着し、内ポケットから取り出したジョーカーメモリを半分差し込んだ龍兔は右手を出してファングを呼ぶ。それに答えるようにファングはカシヤカシヤと走るとジャンプし、龍兔の左手に飛び乗った。

ガチャツ!ジャキイン!!

【FANG!!】

ガキン！

「変身!!」

ガキン！

【FANG!! Joker!!】

「かあああああツツ!!!」

龍兎がジョーカーメモリと折り畳んだフアングメモリをドライブバーに差し込み、ガジェット部分を中央に倒すと、周囲に破片を含んだ風が吹き荒れる。その破片は白と黒、相反するボディを形成し、次の瞬間、龍兎は右半身がスパイクの目立つ白で左半身が黒、赤く輝く複眼を持ったライダー、【仮面ライダーダブル：フアングジョーカー】へと変身した。

ガシン！

【ARM：FANG!!】

「オオオオオオオツ!!ハアツ!!!」

「ぐああっ!!?」「いぎやあああ!!!」

フアングメモリのツノを一度下げると、龍兎の右腕に鎌のような刃が生えた。そのまま龍兎は凄まじい速度で正面にいた襲撃犯二人の懐に潜り込み、流れるように切り裂いた。致命傷とまではいかないものの、腹と腕を大きく斬られた襲撃犯たちはその場に倒れる。ガシंगाシン!!

【SHOULDER：FANG!!】

「はあああっ!!!」

「ぎゃああつ!!?」「うがあああつ!!」

そしてツノを二回下げると、肩から同じように刃が現れる。龍兎はその刃を肩から外し、向かって右側の敵へフリスビーのように投げた。刃はまるで意思を持つかのように軌道を変え、そのまま襲撃犯たちの周りを鎌鼬のように斬りつけた。そしてブーメランのように刃が返ってくると、龍兎は仕上げに入った。

ガシンガシンガシン!!!

【FANG!!! MAXIMUM DRIVE!!!】

『フアングストライザー』!」

トドメに三度ツノを下げて右足首から刃を生やすと、龍兎は左手に見える最後の犯人たちに向かって跳躍し、竜巻のように回転する。その周りには蒼白いエネルギーが巻き起こり、放たれた銃弾を弾き飛ばして犯人たちを吹き飛ばした。その腹にはFの形をした傷が荒々しく刻まれている。

あつという間に場を制圧し返した龍兎に、周りは状況を理解したのか、ざわつき始めた。

「あ、あれ、ダブルだよな…」

「でも、なんでここに……………?」

「てか、さつき一高の奴が変身してたような…」

「一高ってことは、Rインテリジエンス副社長のやつか?」

「じゃ、ダブルの正体ってアイツなのか!?!」

そんなざわつきを無視して、龍兎は達也たちの前に一跳びで降り立ち、変身を解除した。

「危なかった……敵が突拍子もない事態だと考えて俺を狙ったからよかったけど、周りの生徒たちを人質に取られてたらマズかったな……まあ、結果オーライか……」

「……………ねえ、龍兎君……」

「へ……………あ」

自身に歩み寄る女性——真由美を見て、龍兎は今さらながら思い出した。自分は一度真由美を『ダブル』として救出しているのだ。しかも滅茶苦茶気障な台詞を吐いて。内心では顔が真っ赤になっていたが、なんとか表面上は平静を保っていた。

「……『ダブル』の正体って、あなただったの？」

「いえ、これは緊急事態用に持ってきていた複製品ですよ。ダブルの活動で集まったデータで作成したのが、この自立思考型ガイアメモリ『ファングメモリ』です。まさか使うことになるまでは想像してませんでしたけど」

「……………そう」

真由美は表面上では納得していたが、内心では確信を抱いていた。

「……………やっぱり、あの時の違和感は本当だったのね。しばらくは良い弄りができそう♪」

今の状況とはあまりにもかけ離れた考えをしていた真由美だったが、達也の言葉で意識を現実に戻した。周りにはエリカたちいつものメンバーが集合している。

「取り敢えず、俺たちは正面の敵を倒した方がいいと思う。七草先輩は……をお願いします」

「ええ。わかったわ」

頷く真由美を確認し、達也たちは入口の敵を掃討するためにホールを後にした。

第24話 『反撃！レイダーと災害の引鉄（ハザー ドトリガー）』

達也たち一行は現在、会場にあるVIP会議室にいた。なぜそんなところにいたのか、それは雫が父親である北山潮（ビジネスネーム『北方潮』）からこのパスワードやその他諸々の部屋を利用するための物を教えてもらっていたからだ。龍兎は内心で人としてどうなんだと思っていたが、現在の詳細な状態が知れるのだから文句は言えないと割りきっていた。実際は地球の本棚を使えばどうとでもなるのだが、この時はそれを思いつけなかったのだ。そして、アクセスコードを使ってVIP会議室のモニターに受信、表示された警察のマップデータは、海に面する一帯が危険地域を示す真っ赤に染まっている。そして赤い領域は彼らが見ている間にも内陸部へと徐々に拡大している。予想を超えて悪化している状況に、達也は無意識に顔を顰めた。

「お兄様……」

「改めて言わなくても分かっているだろうが、状況はかなり悪い。この辺りでグズグズしていたら国防軍の到着より早く敵に捕捉されてしまうだろう。だからといって、簡単には脱出出来そうに無い。少なくとも陸路は無理だろうな。何より交通機関が動いてない」

「海路もマズイね。横浜に襲撃してきたことは、相手には船もある。避難船が攻撃されないとしても一度で全員は厳しい。となると、やっぱり地下シェルターに避難するのが妥当かな」

「現状を考えると、それが現実的だろうな……。ここも多少頑丈に作られているとはいえ、建物自体を爆破されてはどうにもならない」

「じゃあ地下通路だね」

「いや、地下ルートは止めておいた方が良い」

「なんで？……あ、そっか」

「地下だと鉢合わせの可能性もあるし、相手が砲撃可能な兵器を持つてたら爆発による崩落の危険もある。だったら見晴らしがいい地上からの迂回ルートが一番理にかなってるよ」

「そうだな。それと、少し時間が欲しい。念のためデモ機のデータを処分しておきたいからな」

「まあ、魔法後進国の大亜連合からすれば僕たちのデータは喉から手が出るほど欲しいだろうからね。爆発が聞こえてからすぐにここが狙われたのもそういうことだと思う」

「そうだな。急ぐう」

そう言っ、一行はデモ機が置いてあるステージ裏に向かった。

?????????

途中で鉢合わせた十文字、服部、沢木たちに地下ルートの危険性を伝え、デモ機からデータを消していた市原たちと合流した達也たちは近くの控室で状況整理をしていた。

「さて、これから如何するかなんだが」

そう口火を切った後、摩利は真由美に現状を伝えるよう目配せした。

「港内に侵入してきた敵艦は一隻。今のところ東京湾に他の敵艦は見当たらないそうよ。上陸した兵力の具体的な規模は分からないけど、海岸近くは殆ど敵に制圧されちゃってるみたいね。陸上交通網は完全に麻痺。こっちは多分ゲリラの作業じゃないかしら。でも、事前にこの可能性を考えてたのか思っていたより国防軍の動きが速いわね。おそらく状況は遅くても一時間ぐらいで好転すると思うわ」

「それにしても、彼らの目的は何でしょうか？」

五十里の提示した疑問に真由美と摩利が顔を見合わせ、真由美が口を開いた。

「あくまで推測でしかないのだけど…横浜を狙ったという事は、横浜にしかないものが目的だったんじゃないかしら。まあ、厳密に言えば京都にもあるんだけど」

「……………魔法協会支部ですか」

「正確には魔法協会のメインデータバンク。重要なデータは京都と横浜で集中管理しているから」

「……………まあ、京都との2ヶ所同時襲撃にならなくて良かったと思わべきか、ここに俺たちが来たタイミングでピンポイント襲撃してきたことを悲観すべきか…悩ましいことですけどね」

真由美は花音のせつかちな態度に苦笑いを浮かべながら彼女の解答を補足し、龍兎は最悪の状況と現状との板挟みになっていた。

「そういうえば、避難船は何時到着するんだ？」

「沿岸防衛隊の輸送船は後十分ほどで到着するそうよ。でもキャパが十分とは言えないみたい」

「それと、シエルターに向かった中条さんたちの方なのですが、残念ながら司波君たちの懸念が的中したようです」

真由美を鈴音が補助し、結論を摩利が言った。

「……………状況は聞いてもらった通りだ。シエルターの方はどの程度余裕があるのか分からないが、船の方は生憎と乗れそうに無い。こうなればシエルターに向かうしかない、とあたしは考えているが、みんなは如何思う？」

と、摩利が全員に問いかけた時だった。

「ちよつ、達也!!」

「お兄様！」

「達也君!」

達也がおもむろにCADを取り出し、壁に向けてトリガーを引いた。直後に何やら手首のCADを操作した真由美は絶句している。その様子を見て、龍兎は何が起きたのか勘づいた。

「(……まさか、『霧散霧消』ミスト・デイスパージョンを使ったの!? ってことは、CADの先にあつたのは大砲か、あるいは……装甲車? でも、七草先輩に『マールスコープ』で見られるのを分かつてやったのなら、それだけ切迫してたつてことか……)」

龍兎がそう考察していると、控室の扉が開いて二人の男女が入ってきた。真由美はその内の女性を見て驚いている。

「え? えっ!? もしかして、響子さん?」

「お久しぶりね、真由美さん……特尉、情報統制は一時的に解除されています。問題ありません」

真由美との挨拶を終えた響子が達也へそう言葉を掛けると達也の顔から困惑が消え、姿勢を正して目の前の藤林と一緒に入ってきた男に敬礼で応じた。それなのに敬礼で答えた軍人は、十文字の姿を目に留めてそちらへ足を向ける。

「国防陸軍少佐、風間玄信です。訳あって所属についてはご勘弁願いたい」

「貴官がああの風間少佐でいらつしやいましたか。師族会議十文字家代表代理、十文字克人です」

風間の自己紹介に対して、克人も魔法師界での公式の肩書きを名乗った。彼も十八歳の高校生。その見た目通り、年上や目上の相手には敬語を使うのだ。

風間は小さく一礼して、克人と達也が同時に視界に入るように身体の向きを変えた。

「藤林、現在の状況を」説明して差し上げろ」

「はい。我が軍は現在、保土ヶ谷駐留部隊が侵攻軍と交戦中。また、鶴見と藤沢より各一個大隊が当地に急行してとり間も無く現着、戦闘に参加します。魔法協会関東支部も独自に義勇軍を編成、既に自衛行動に入っているようです」

「ご苦労。さて、特尉、機丈龍兔殿」

風間は『特尉』と『殿』という呼称と共に顔を達也と龍兔へ向けた。

「現下の特殊な状況を鑑み、別任務で保土ヶ谷にて出動中だった我が隊も防衛に加わるよう、先ほど命令が下った。国防軍特務規則に基づき、貴官にも出動を命じる。そして機丈殿、今回の一連の事案をRシステム購入契約時の条件に置ける『他国からの明確な侵略行動』と判断し、今回の事案でのRシステムの全面的使用を許可していただきました」

「わかりました。Rインテリジェンス代表取締役社長補佐として、今回の騒動の鎮圧におけるRシステムの使用を許可します」

真由美と摩利が揃って口を開きかけたが、風間はその視線一つで彼女たちの口を一気に封じた。

「国防軍は皆さんに対し、特尉の地位について守秘義務を要求する。本件は国家機密保護法に基づく措置である事を理解されたい。特尉、

君の考案したRシステム対応のムーバル・スーツをトレーラーに用意してある。急いでくれ」

「……………すまない、聞いての通りだ。みんなは先輩たちと一緒に避難してくれ」

「特尉、皆さんは私と私の隊がお供します」

少人数であるとはいえこの状況下で仲間たちの為に精銳を盾として割いてくれるという彼女の、そして少佐の精一杯の厚意に達也は素直に感謝の意を示した。

「少尉、よろしくお願いします」

「了解です。特尉も頑張ってくださいね」

藤林に一礼し、達也は風間の後に続いた。空気を読んだのか呆気にとられたのか、達也を呼び止める者はいない。上級生にも同級生の友達にもそれは同じことだ。しかし、そんな中で唯一例外の少女——深雪が声をかけた。

「お兄様、お待ちください」

目で問い掛ける達也に風間と龍兎は頷きを返して、控室を出て先行した。

深雪の瞳に大きな決意を感じ取り、達也は彼女の前に片膝をつき、深雪はその頬に手を添え瞼を閉ざした兄の顔を上へ、自分の方へと向ける。そしてそのまま腰を屈め、深雪は兄の額に接吻する。その唇が離れ、頬に添えられていた手が離れ、再び達也は頭を垂れる。その瞬間、全員の眼を灼く程に激しい想子の粒子が達也の身体から沸き立った。その想子の波動は風間たちと先行している龍兎も感じ取っていた。

「……………これが地球の本棚にあった『誓約』^{オース}：他人を『鍵』として対

象の魔法的潜在能力を抑え込む術式か……恐ろしい程の想子だな、
達也は……まあ、九校戦であれだけ術式破壊を使ってたんだから、ある
意味納得だけど)」

?????????

数分後、トレーラーの前には漆黒の全身スーツ——ムーバル・
スーツを装着した五十人の独立魔装大隊が腕に何かを取り付けてい
た。

「では総員、『レイドブレス』で『実装』せよ」

【H A R D!!】

真田がそう言うと、隊員たちは右太股のホルダーから灰色のプログ
ライズキー——インベイディングホースシュークラブプログライズ
キーを腕に巻かれた赤い大きなボタンが付いた黒い装置——レイド
ブレスに挿し込み、そのボタンを力強く押した。

『実装』

【R A I D R I S E!!】

【インベイディング！

ホースシュークラブ!!】

するとレイドブレスから管が全身を包み、隊員たちを銀色の機械質
な姿——インベイディングホースシュークラブレイダーへと変身さ
せた。左腰のホルスターには大口径の短機関銃——トリデンタがあ
る。そのまま隊員たちは、ムーバル・スーツのベルトのバックルを叩

き、インストールされた飛行魔法で空へ飛んでいった。

「……………では、特尉も向かってくれ」

「はい」

「……………ねえ、ホントにそれ使うの？今からでも遅くないからやめといた方が…」

「問題ないよう訓練したじゃないか」

「それでも万が一を考えると気が引けるんだよ！だって達也が仮にそれで暴走したらシャレじゃなく日本どころか世界滅亡だよ!!？」

そう叫ぶ龍鬼の前には、メーターが付いた赤い小型の装置を持ち、腰にビルドドライバーを着けた達也がいた。

「問題ない。起きないよう細心の注意を払うさ」

「いやでも…」

「龍兎君。しょうがないさ。さすがに通常のビルドでは若干の不安がある。君だつてその点理解しているだろう？」

「まあたしかに、目立つせいで周りの被害が大きくなりそうとは言いましたが…何も色を統一するただけにそれを使わなくても…」

「起きたことは戻せんよ。特尉。始めろ」

「…タイマーはセットしてあるから、絶対一分に一回は『再生』を使つてよね」

「わかっている」

【『HAZARD』—ON!!】

ガコン!!

【ラビット!】

【タンク!】

【SUPER—BESTMATCH!!】

【ガタガタゴットンズツタンズタン!!ガタガタゴットンズツタンズタ

ン!!」

達也は装置——ハザードトリガーのフター——セキュリティクリアカバーを開けて蒼いスイッチ——BLDハザードスイッチを押して、ハザードトリガーをビルドドライバの穴——BLDライドポートに挿し込み、ラビットフルボトルとタンクフルボトルを装填。そのままボルテックレバーを回転させると、いつものスナップライドビルダーではなく、真つ黒な金型——ハザードライドビルダーが展開された。

「ARE YOU READY!？」

「変身」

ドガアン!!!

チーン…!!

【UNCONTROL SWITCH!! BLACK HAZARD
!!ヤベーイー!】

達也が言った瞬間、ハザードライドビルダーが轟音を立てて達也を押し潰した。そしてレンジが鳴ったような音と共にゆっくりとハザードライドビルダーが開いてドライバに収納されると、達也はビルドの基本フォームであるラビットタンクフォームにそっくりな、しかし、兎と戦車を象ったその複眼以外が果てしない黒に染まった姿——ラビットタンクハザードフォームへと変身した。そして達也もまた、腕に付けたCADで飛行魔法の魔法式を展開し、そのまま戦場へと向かう。

龍兎はその様子を達也が見えなくなるまで見届けるとバツタのよきな意匠が施されたプログライーズキーを一瞬ポケットから出してすぐにしまい、魔法協会支部がある方角へ向かって歩き始めた。

第25話 『乱戦！仮面戦士！』

メットの中表示されているアラームの音が鳴ったので、達也は今日で三十数回目の自己への『再生』を行使する。一分間の疲れはあまり苦にはならず、かつアーマーの術式補助機能もあるため『再生』の副作用的なものである精神への苦痛はあつてないような、精々二の腕を軽くつままれた程度の痛みだった。

「(……………しかし、本当に優秀だな)」

そう思いつつ、達也は眼下で繰り広げられている銃撃戦——と言う名の独立魔装大隊による殲滅——を見下ろしていた。当初は大隊の兵士が致命傷を負うことを考え、一分に一回は多すぎると思っていたが、今ではむしろよかったとすら考えている。

ムーバル・スーツは単体でも高性能な防弾防刃機能があり、ちよつとやそつとでは貫通は不可能だが、大砲などの攻撃で無傷でいられるか、と言われれば答えは否だ。

ただ、それはあくまでもムーバル・ス………スーツ単体だった時の話である。

現在、大隊の兵士たちはムーバル・スーツの上からRインテリジェンス社謹製の『レイドブレス』を使って更に武装している。視認できる隊員のほとんどが使用している『インベイディングホースシユークラブプログライズキー』のアビリティは『ハード』。龍兎曰く、

「プログライズキーの作りやすさはモデルとなる動物というよりは、アビリティの単純さやモデルとなる動物との相性とかに左右されるんだ」

とのことだ。固い装甲を持つカブトガニと、単純な硬度を増す『ハード』のアビリティはそれだけ相性が良いということだろう。そのため、戦闘開始から今まで致命傷を負ったのはほんの数人だ。そのため達也への負担は、本人が想定していたものよりはるかに少ない。

現在も、数人の隊員が標準装備しているダイナマイティングライオンプログライズキーを使用してダイナマイティングライオンレイダーへと実装し、左腕に装着された機関砲と三本の鋭いクロウが付いた複合武器であるシューティングスターマイトを使って弾丸の雨を敵の戦車郡に降らせていた。上空からの銃撃は想定しきれていなかったのか、次々と爆発する味方の戦車を置いて数台の戦車が方向をすぐに転換し、別の通りへ向かった。

しかし、彼らに待ち受けていた運命はほとんど変わることにはなかった。変わったのは、精々撃ち抜かれる得物程度である。

突然上空から赤いレーザーが幾本も降り注ぎ、戦車を爆散させる。近くの大亜連合の直立戦車が上を向くと、そちらには高度数百メートルほどの位置で薄く煙を吐く砲塔を爆発した戦車の方へ向けている、赤い二つの目のようなレンズが付いたガスマスクのようなヘルメットを装着した数人の兵士——スカウティングパンダレイダーがいた。両手で構えるその大口径のレーザー砲——デッドモノクロームで戦車を撃ち抜いたのだろう。

「(あれほどの高度から戦車の弱点を正確に攻撃できる精密さ…敵は届かないと知って撤退しようとしているが、意味は無さそうだな………ん?)」

ふとへりのローター音が聞こえた気がしたので達也がそちらを向くと、へりに向かって飛んでいく大量の蝗で構成された黒い雲があっ

た。おそらく大亜連合が生み出した化成体だろう。達也はそれを消し飛ばすためにヘリへ数人の兵士たちと向かった。

?????????

到着したヘリをほのかが光学迷彩の魔法で隠しながら飛ばし、近く
の兵士たちをドライアイスの弾丸を飛ばす魔法で掃討した真由美は
摩利、啓、花音、桐原、壬生を回収するために指示を出した。

『お待たせ、摩利。ロープを下ろすから上がってきて』

「ああ、頼む」

彼らは今、完全に安心していった。先程まで敵と戦っていたのだから、無理もない。

しかし、彼らは警戒するべきだった。自分たちの油断を狙うゲリラ兵士がいることを。

「……………！危ない!!」

摩利が叫ぶが、もう遅い。ゲリラが放った銃弾が彼らに迫り、肉を
抉る――

——ことはなかった。

【FORCE RISE!!】
ドガアン!!!

【ステイングスコープオン！】
【強制証突破完了BREAK DOWN……………】
『!?』

突然上空から何かが落下し、銃弾を弾き飛ばした。そしてそれは
ゆっくりと立ち上がった。

それは、黄色い複眼に身体中のアーマーをケーブルのようなバンド
で固定している、毒々しい色の戦士だった。その姿に真由美たちは見
覚えがあった。

「……………Rシステム？」

それはRインテリジェンスの『ゼロワンシリーズ』の派生系、『滅亡
迅雷シリーズ』のアーマーの一つ、『仮面ライダー滅』ほろびそのものだった。

「…誰だ？」

摩利の疑問は、更にやってきた三人の乱入者によって遮られること

となった。

「ちよつと滅〜!速すぎるよ!」

「そうです。急を要していたからと言って、ビルの上から跳び降りて変身するのはいりません」

「まったくだ」

「……………『迅』、『亡』、『雷』…」

「ねね、コイツらを倒せばいいの?」

黒いスーツ姿のホストのような男——迅が軽いノリで摩利に問いかけた。

「あ、ああ…」

「なら、我々がするべきことは…」

「決まりだな」

【【FORCE RISER…!!】】

【【JAPANESE—WOLF!!】】

【【WING!!】】

【【DODO!!】】

【【変身】】

ヴーツ!ヴーツ!ヴーツ!ヴーツ!

乱入者——迅、亡、雷の三人はそれぞれのフォースライザーにジャパニーズウルフゼツメライズキー、フライングファルコンプログライズキー、ドードーゼツメライズキーを装填し、アンカーを引いた。迅のフォースライザーからはハヤブサのライダモデルが、亡のフォースライザーからは吹雪が、雷のフォースライザーからは紅い雷光がそれ

それを包み、身を守るアーマーへと変化した。

ガギン!!!

【【FORCE RISE!!】】

【JAPANESE—WOLF!!!!】

【フライングファルコン!】

【【BREAK DOWN…】】

「…そういえば名乗っていなかったな。我々は、Rインテリジエンス直轄部隊『滅亡迅雷 net』。代表取締役社長補佐からの要請で今回の暴動鎮圧のために来た。ここは我々が引き受ける。さつさと避難しろ」

「……………恩に着る」

「行け」

滅たちの計らいにより、摩利たち五人はすぐさまロープに掴まり、へりに乗り込んだ。そのまま魔法協会に向かうへりを見届けた滅は迅たちと改めて敵を睨み付けた。

「……………さあ、殲滅開始だ」

【ATTACHE ALLOW!!】

【Attaché case opens to release
the never missing bow and arrow.】

【ALLOW RISE!!】

滅が放ったアタッシュユアローにより戦闘の火蓋は再び切って落とされた。

尚、この戦闘はわずか三分で滅亡迅雷 net の勝利で終息した、と追記しておく。

?????????

男——呂剛虎は歓喜していた。

魔法協会を強襲せんと装甲車で構成されたバリケードを難なく突破した先にいた忌々しい女。自分の腹に傷をつけた男と、自分を燃やした二人組と関わりを持つ女。彼らへの良い復讐になると考えた呂剛虎は協会には目もくれず、女——摩利を殺さんと襲いかかった。

しかし、彼の行動は二人の男女に阻まれた。

無論、レオとエリカである。

レオはショットライザーを放ち、それで一瞬怯んだ呂剛虎へエリカが大太刀を通り越し、大剣と言うに相応しい自身の身長ほどのサイズの刀——エリカのみが使える魔法『山津波』を使うためのCAD、『大蛇丸』を振るう。この大蛇丸は『山津波』という専用魔法を使うためだけのCADである。それは自分と刀に掛かる慣性を極小化して敵に高速接近し、インパクトの瞬間、消していた慣性を上乘せして刀身の慣性を増幅させ対象物に叩き付ける魔法。そうして加速されたスピードから放たれる一撃のパワーは最大で十トンにも及ぶ。だが、それほど威力を出すためには慣性を消した不安定な状態で駆け抜ける足捌きと刃筋をぶれさせない操刀技術、何より無慣性状態のスピードに負けない知覚速度と運動神経。これらが必須となる。

しかし、エリカは先天的に保有している圧倒的な速さ、そして山津

波を使うための数々の努力の末、千葉家で唯一『山津波』を使える剣士となったのだ。

「ウウウウ……………」

体勢を崩され、飛び退いた呂剛虎は邪魔するなど言わんばかりに唸り、体勢を低く取る。それはまさしく今にも飛びかからんとする虎のそれだ。

「こつちも全開で行くしかねえってことか」

【ASSAULT—BULLET!!】

【OVER RISE!!】

【KAMEN：RIDER：KAMEN：RIDER：KAMEN：RIDER：KAMEN：RIDER：KAMEN：RIDER：】

レオはポケットから赤いスイッチが付いた灰色のグリップ——アサルトグリップが取り付けられたプログラズキー——アサルトウルフプログラズキーを起動し、右に振り抜くとその勢いでプログラズキーが展開され、口を開けた蒼い狼の意匠が施された内部が露になる。そのままそれをショットライザーに装填し、銃部分を引き抜いて呂剛虎に向ける。そしてそのまま宣言した。

「変身!!」

【SHOTRISE!!】

【READY・GO!!】

【アサルトウルフ!!】

「オオオオオ……………ラアアッ!!」

レオがトリガーを引くと、弾丸が呂剛虎を邪魔するように軌道を変えながら飛び回り、直後に半透明の狼のライダモデルとなった。そのままライダモデルは襲いかかるように伸ばされたレオの左手に飛び込み、蒼い光となった。直後、レオがそれを握り潰すと装置が展開され、レオを瞬時に包み込む。そしてレオは『仮面ライダーバルカン：アサルトウルフ』へと変身した。

「……ほんとはコレあんまり使いたくないけど、事態が事態だもんね！」

「は？………はあ!!？」

エリカが文句を言いつつ腰に当たった物を見て、レオは大きな奇声を上げた。

なにせそれは、自分の物と瓜二つの蒼い銃——シヨツトライザーだったからだ。

「なんでお前もそれ持ってたんだよ！」

「しかたないでしょ!?!コレ龍兎くんに渡されたんだから!文句あるなら龍兎くんに言ってよ!」

地面に大蛇丸を突き立てたエリカは怒鳴りながらポケットからプログライズキーを掌でクルクルと回転させながら取り出した。

【DASH!!】

【AUTHORISE^{認証完了}】

【KAMEN:RIDER:KAMEN:RIDER:KAMEN:RIDER:KAMEN:RIDER:KAMEN:RIDER:KAMEN:RIDER:】

エリカはそれを畳んだまま装填して中で展開し、ベルトにシヨツト

ライザーをセットしたままトリガーに手をかけ、宣言した。

「変身！」

【SHOTRISE!!】

【ラッシンググチーター！】

【Try to outrun this demon
to get left in the dust.】

放たれた弾丸はエリカの周りをビュンビュンと飛び回り、正面に命中する。それと同時に装置が展開され豹を模したアーマーとなり、エリカは『仮面ライダーバルキリー・ラッシンググチーター』に変身した。

「ほら、ボサツとしてないでいくわよ！」

「くく！あああ!!つたく!!」

頭をガシガシと搔いたレオは大蛇丸を持って呂剛虎に仕掛けるエリカに続き、走り出した。

第26話 『騒乱終結2095』

「はあああああ!!!」

ダ
ツ
シ
ユ

ラツシングブラスト

エリカはショットライザーを使って必殺技を放つ。警察官である門下生たちや友人たち^{達也}からある程度教わっているとは言えどまだ不慣れな銃だが、アーマーの照準補助機能で命中精度はそれなりといったところだ。しかし、呂剛虎にはあまり効いているようには見えない。

今の呂剛虎は『白虎甲』^{バイフウジャ}という白虎を模した呪術具の鎧を纏っている。彼の得意とする鋼気功^{ガンシゴン}も相まって、高い防御力、そしてそれを活かした攻撃力を保有しているため、レオ、エリカ、摩利の三人は攻めあぐねていた。だが実は、最も不思議がっていたのは他ならぬ呂剛虎本人だった。

龍兔が呂剛虎と戦っていた時に使っていたゼロワンドライバーは『フルチューン』モデルである。そのため軍用を軽く上回るスペックを誇っている。なのでダメージが通常より多く感じるのだが、今レオとエリカが使っているのは精々軍用より少し高い程度に抑えてある。これは龍兔の

「力加減を間違えてうっかり人の命を奪わないようにしとかなないと」

という考えを反映した結果だ。そのため呂剛虎がある程度耐えら

れるのは至極当たり前のことなのだ。

だが、三人もただでは済まない。レオは勇敢にも呂剛虎と肉弾戦を繰り広げ、エリカはその隙を縫ってラツシンググチャーターのアーマーの力で普段では再現不可能な加速からの超火力の『山津波』を叩き込もうとしている。そして摩利は二人の息が少し切れたタイミングで剣術や魔法による援護と攪乱をしている。そのため攻めきれないのは呂剛虎も同じだった。

しかし、まだ高校生である彼らには体力、精神的に少々荷が重かったようだ。

「あぐっ!!」

「!?うおっ!!」

呂剛虎の一撃をモロに喰らい、そのまま飛ばされたエリカをレオがギリギリでキャッチする。しかし、エリカのアーマーからはバチバチと火花が散っている。その上、エリカが見ている耐久値を示すゲージは短く真っ赤になっており、中々に危ない状態を示していた。

「エリカ!西城!!くっ!」

二人に意識を向けていた隙を突いて呂剛虎が襲いかかるが、摩利は間一髪で躲した。だが、その額には脂汗が滲んでいる。魔法を少し使い過ぎたのだろうか。

「……………」

満身創痍の摩利に呂剛虎が獰猛な笑みを浮かべて更に追撃しようと拳を構えた。いよいよ復讐ができる。その喜びを噛み締めんと呂剛虎は拳を振りかぶり――

【JUMP!!】

【Pブrogrロisグseラkeyイ cズonキfirmをed.認証
R破ead壊y f準or備 B完ust了!!er!!】

バスター

ダスト

ドツゴオオオオン!!!

「グオオオオオオツ
!!!??」

た。

——右側から放たれた砲撃を受け、左に吹き飛ばされ

「これって……………」

エリカとレオが砲撃が来た方を向くと、そこにいたのは…………

「ごめん、遅れた!!」

白髪の少年——機丈龍兔がそこにいた。

「龍兔!!」くん!!」

「龍兔君!?!どこに行ってたんだ!」

「すみません。近くの義勇団の協力をしてまして、さつき終わったところですよ……………さて」

龍兔は改めて呂剛虎に向き直った。

「数日ぶりだな、呂剛虎。お望み通り、復讐対象その1が来てやったぜ?」

「……………!!」

一度ならず二度までも自分に苦杯を舐めさせた張本人を見て、呂剛

虎の顔はみるみる内に歪んでいく。しかし、龍兎は不敵に笑ってポケットから一部が黄金色に輝くプログライズキーを取り出した。

「お前を止められるのはただ一人、俺だ!!」

【SHINING—JUMP!!】

【AUTHORISE了】

「はあっ！」

カアアアアツ!!!

龍兎が黄金色に輝くプログライズキー——

シャイニングホッププログライズキーをゼロワンドライバーにオーソライズさせると、衛星ゼアからデータがレーザーのように転送される。その光を展開したプログライズキーで受け止めると、魔法陣のような光が現れた。カギを回すようにキーを捻るとその陣がガチャガチャと回転し、上に小さな子供のようなバッタを乗せた、光輝く大きなバッタが顕現され、威嚇するように大きく鳴いた。

「!!……デカイ……!」

「変身!!」

【PROG RISE!!】

「っ!!」

【The rider kick increases the power by adding to brightness!!】

【When I shine, darkness fades.】

龍兎がゼロワンドライバーにキーを差し込むと、ビームエクイッパ―から虫取り網のような光が出現し、ライダモデルを捉え、龍兎の

背中に持っていった。と、網は球体となってグルグル龍兔の周りを立体的に回転しながらスーツを形成していく。その光が弾けると、スーツの腹筋部分がパンプアップし、身体中にネオンイエローの模様が入っていく。そして胸、肩、目からそれぞれ三対のバツタの足が現れ、折り畳まれた。こうして龍兔は『仮面ライダーゼロワン：シャイニングホッパー』に変身した。

「ふっ！」

【シャイニングインパクト!!】

「ハアアアーツ!!」

「ぐうっ!!?」

「ふうんっ!!」

「ぐがああおっ!!?」

龍兔は装填されたプログラズキーを押し込むと、そのまま呂剛虎に飛び蹴りを当てた。それで呂剛虎が吹き飛ぶと、まるで瞬間移動をしたかのようにホログラムのような残像を残しながら攻撃を続け、呂剛虎を計二度蹴り飛ばした。

「グウウウ………!!?」

「お前だけは、絶対ここで止める…!!」

【BIT RISE】

【BYTE RISE!】

【KILO RISE!!】

【MEGA RISE!!!】

龍兔は右腰のホルダーにしまっていたライジンググホッパープログラズキーを取り出し、四回連続でゼロワンドライバーに当てると、

再びシャイニングホッパープログライズキーを押し込んだ。

「はっ!!」

「グガアアアッ!!!」

【シャイニングメガインパクト!!】

「ふああアッ!ほっ!はあっ!!」

「グアアアアッ!!?」

そのまま龍兎は呂剛虎に駆け出してジャンプすると、呂剛虎の周囲に五つのシャイニングホッパーのようなホログラムが現れ、その内の一つからいきなりキックが叩き込まれた。当然呂剛虎は反応できずに吹き飛ばされるが、先程と同じく瞬間移動のように先回りして別方向に蹴り飛ばし、仕上げに空高く蹴り上げた。呂剛虎の身を守る白虎甲にはその蹴りの度に輝が入ってきている。しかし、呂剛虎もただでは終わらせない。

「ア”ア”アアガア”ア”アア”アア”アア!!!”!!!」

言葉にならない奇声を上げ、呂剛虎は照準など捨てたように滅茶苦茶な拳撃を四方八方に放った。魔法によるその拳撃は空気を殴り、衝撃波となって辺りを無差別に攻撃する。

「うおおおお!!はあっ!!!」

「グガッ!!!?」

「はっ!ほっ!!だあ”っ!!!」

しかし龍兎は、その衝撃波を踏み台にして呂剛虎に迫る。龍兎に足蹴にされた衝撃波は爆弾のようにその場で霧散した。

「とあつ!!!ふあああーっ!!!」
「おおおおお………!!!」

グ　メ
　　ガ
　　イ
　　ン
　　ニ
　　イ
　　シ
　　ヤ
　　イ
　　ン
　　パ
　　ク
　　ト

「だああああーっ!!!」
「ぐおおおおおおおおおお!!!」

龍兎が最後に放った必殺技によって呂剛虎を守っていた白虎甲は腹部が完全に破壊され、余波で呂剛虎は地面に叩きつけられて意識を失った。

「……………勝った、のか……………?」
「……………いやったああ!!!」
「……………まったく、なんてやつだ……………」
「皆……!ちよつと速すぎ……………って、え?」

レオは自分たちが勝ったということに未だ実感を持たず、エリカは変身が解除された体で両手を上に掲げて喜び、摩利は龍兎の強さに呆れつつも称賛を送った。真由美はCADの準備や微調整がようやく完了し、いざ出陣としたタイミングで既に決着が着いていたことに茫然としていた。

そして、国防軍独立魔装大隊の武装のパワーと達也——『摩醯首羅』マヘーシユヴァアラの参戦によって大亜連合の戦線は完全に崩壊。彼らは撤退していった。そして仕上げに、達也は世界で自分のみが見える禁断の戦略級魔法たる『質量爆散』マテリアル・バーストにより、大亜連合の揚陸艦は文字通り消滅。こうして数時間に及んだ、後に『横浜騒乱』と呼ばれる事件は幕を閉じた。

しかしその翌日の十月三十一日、鎮海軍港は巨済島要塞の向こう側に集結した大亜連合艦隊の旗艦に対して放った達也の『質量爆散』により、艦隊は島ごとこの世から消滅した。

灼熱のハロウィン

後世の者はこの日を揃ってこう言い表す。

それは魔法こそすべての兵器に勝る最強の武器であり、また、今まで日本だけにその存在が知られていた人智を超えた存在——

仮面ライダーが、世界に知られるキツカケとなった日である。

来訪者編

第27話 『なぜ彼女は留学してきたのか』

現代から半世紀以上も進んだこの世界でもクリスマスという、人にとっては記念すべき祝日、また別の人にとっては一年で一、二を争うほどに忌み嫌う日は存在する。ただ一つ確実なのは、人によって日の過ごし方は千差万別ということだ。

それは本来クリスマススを盛大に楽しむべき十代である彼女ですら例外ではない……………」

?????????

2095:12:24-03:07

「二ホンに潜入……………ですか…?」

USNA——現代で言うアメリカはカナダ、メキシコなどを取り込んだ新ソ連、大亜連合と並ぶ一大国家となっている。そんなUSNAの軍に存在する魔法師部隊——スターズの総隊長という大きな地位を保有し、代々その総隊長に受け継がれた『シリウス』の名を冠するUSNAの切り札たる戦略級魔法師である『アンジー・シリウス』少佐こと、アンジェリーナ・クドウ・シールズは、任務から帰還したその足で上官であるバランス大佐の部屋にて次の指令を受けていた。

「ええ。2ヶ月前の十月三十一日、鎮海軍港に召集された大亜連合艦隊を消滅させた、おそらくは日本のものとおぼしき謎の戦略級魔法……………それを扱う容疑者を思われる人物の無力化というのが一つ目。そしてもう一つが」

「……………!!」

そう言つてバランスが右側のモニターに映したのは、大亜連合の戦車の大軍を殲滅しているレイダー——独立魔装大隊の戦闘風景だった。

「こちら側の調べでは、これらは日本の国防軍が導入している『Rインテリジェンス』が開発したシステム——『Rシステム』である、ということだ。そして、先の戦略級魔法師と思われる容疑者の内二人と同じ高校に通っている『機丈龍兎』。奴を説得、または懐柔し、我々USNAにもRシステムを導入、もしくは独占させよ、と言うのが今回の任務内容だ。このシステムは、魔法が使えない者ですら強力な兵士となる。この映像では魔法師が飛行魔法を使っているが、これを流用すればUSNA軍の大幅な戦力増強に繋がる、とのことだ。行ってくれるな?」

「イエス、ママ!!」

バランスの言葉に、リーナは強く返事をした。

この数週間後、彼女は日本に来ることとなる。

その存在が、近い未来に大きな事件を巻き起こすことになるとも知らずに……………

?????????

2095:12:24—19:07

「ぶえつきしっ!!」

「…大丈夫か?」

「風邪?」

「いや、大丈夫大丈夫。誰かが噂してたみたい」

北山家で開かれていたクリスマスパーティーの席で、突然大きなくしゃみをした龍兎に達也と雫が心配の声を出したが、龍兎は大丈夫と答えた。そんな他愛もないパーティーの席で、雫から驚くべきカミングアウトがあった。

雫が、アメリカに留学するそうさ。

とは言っても一月から精々三月までの間なので、一生会えなくなる危険性というのはほぼ0に等しい。そのことにほのかは心底ホツとしていたが、達也と龍兎は若干胡散臭そうな顔をしていた。そして達也が龍兎に話しかけたのは、帰路に着こうとした時だった。

「龍兎。今日は泊まっていけ」

「?泊まれって……達也と深雪ん家?」

「ああ。さっきの留学の件で少し情報の確認をしておきたいからな」

「…わかった。けど…深雪はいいの?」

「龍兎くんなら問題無いってわかってるわ」

「そっか。じゃあお言葉に甘えて」

そう言っつて三人はコミューターに乗り、達也たちの家へと向かった。

?????????

お風呂を借りた龍兎は上がってからある程度時間をおいて、互いに気になったことの確認を開始した。

「……まずやっぱり雫レベルの魔法師を日本がアメリカにはいどうぞ

で留学させる理由だよね。数十年前と違って、今は留学なんて話自体ほとんどない上、雫のような魔法師は言い方悪いけど貴重な戦力同然だ。なのに、今回の雫の留学はやけにあっさりし過ぎてる」

「それだけじゃない。雫が言うまで親友のほのかすら雫の留学を知らなかった。少なくとも、留学のためだけにそこまで情報を規制するのは不自然だ。お前の『地球の本棚』で調べられないか?」

「一応はできるけど…特定は難しいね。さすがに確定要素が少ない。時間をかければ絞れるはできるかもだけど、キーワードが少ないと、調べ量が膨大過ぎる」

「……………そうか」

「ただ一つ言えることは、間違いなく達也の魔法

……………マテリアル・バースト絡みと考えていい。相手が質量を直接エネルギーに分解できる……………たった一キロの物質に使えば、文字通り島一つを消滅させられるんだから。そりゃ本腰入れて調べるさ。USNAは自分たちの力が最強だと考えてるし、その力を脅かす可能性のある奴を率先して倒そうと考えるのも心理的に無理はない」

「……………来年こそは争い無く過ごせると思っていたんだがな……………」

「ホント、達也はトラブルに好かれてるよね」

「好かれたくもないがな」

「心中お察しします」

龍兎のからかいに、達也は苦笑いで答えた。

そして数日後、2095年が終わりを告げる。

?????????

2095:12:30-13:54

空港に到着したりーナは、その足で今日から3ヶ月の拠点となる場所に移動していた。扉を開くと、そこには今回の任務におけるサポー

ト役のメンバーが既に揃っていた。

「よろしくお願いします、シルヴィ」

「こちらこそお願いします、総隊長」

同居人兼サポートメンバーの名前はシルヴィア・ファースト。ファーストはコードネームで、スターズ惑星級魔法師「マーキュリー」の第一位を表している。階級は准尉で年齢は二十九歳。軍人の中で見ればまだまだ若いながらも「ファースト」のコードを与えられている事から分かる話だが、能力を高く評価されている女性准士官である。彼女は元々軍人関係ではなく、ジャーナリズムを専攻していたが、結果として軍に入ることとなった。今回は彼女が持つその情報分析技能を買われ、リーナのの補佐役として任務を言い渡されたのだ。

「それでシルヴィ。例の物なんですけど…」

「分かってますよ、はい」

シルヴィから渡された物を見て満足げに頷いたリーナは数分後

……

「ふわあああああ………！」

目を輝かせながら『仮面ライダーバルキリー』となった自分の姿を
姿見で見つつ、ファッションモデルよろしく様々なポーズを取っ
た。

「どうですか？」

「こんな夢のようなシステムがあつて、しかもCADとしても使える
だなんて……ニホンの魔法師たちが羨ましいですよ……」

「私も最初に見た時は目が点になりました。このシステムは軍事や警
備のみならず、建築やファッションなど、幅広い分野で活躍して
るみたいですよ。そして、世界で唯一それを作れるのが『Rインテリ
ジェンス』：正確には、加重系魔法の技術的三大難問の内、常駐型重力
制御魔法：飛行魔法の開発に成功するなど、業界では『トール
ス・シルバーと並ぶ天才技師』と評されるRインテリジェンス専属魔
工技師の『DORATTド
ラット』です。今ではRインテリジェンスは日本有数のC
AD企業として国内中に、そして先ほどの話にあつた飛行魔法や横
浜への大亜連合侵攻の際の国防軍の防衛などで、今やその名を一
気に世界に広めているんですから。その正体を知っているのは社
内でもごく僅か……そしてその正体を知っているであろう人物
こそが『機丈龍兔』：Rインテリジェンス代表取締役社長である
『機丈龍誠』の息子にして自身も代表取締役社長補佐……いわゆる副社長を
務める腕を持つているそうです」

「これは絶対にUSNAにも持つてこないと……」

「……………つて、リーナ……？……………はあ……」

自身の説明をそっちのけでまだポージングをしているリーナに、呼
び方が変わってしまうほどに呆れるシルヴィアであった。

第28話 『新・年・開・幕』

2096:01:01—08:14

龍兎は黒の袴に黒がかった黄土色の着物を着て達也たちとの初詣の集場所に到着した。既にメンバーとその他二人ほどが集合しており、どうやら自分が最後のようだと龍兎は気づいた。

「ごめん皆、遅くなっ……………」

龍兎が一気に不機嫌になったのは、達也たちのそばにいる男に見覚えがあったからだ。なにせその男は、四月に自分がダブルとして活動していた時にシステムを奪おうとしてきた男——八雲だったのだから。

「ん？なんだい？」

「いえ、以前はダブルがお世話になったようですね、八雲さん？」

「おや、どこかで名乗ったかな？」

「名乗ったかな？じゃないんですよ。ダブルから話と映像を貰いました。よくもまあやってくれましたね。まさか好奇心のためにウチの、それも一番危険が高いシステム奪おうだなんて…本当なら今すぐあの映像を引っ張り出して訴訟起こすところなんです…」

「いや、それについては申し訳な……………」

そう言いかけてふと八雲が周りを見ると、そこには軽蔑の目で自分を見る小野、美月、エリカ、ほのか、深雪がいた。レオと幹比古も「マジ？」と言わんばかりの顔をしている。そんな中、八雲にダブルのことを言った当の達也は…

「(そういえばそんなことがあったな……師匠には悪いが、ここは静観しておこう)」

悪魔もドン引きするほどに、あっさり八雲を切り捨てていましたとさ。

尚、この後八雲が達也以外の全員の信頼を取り戻すのは、自身の持ち前の胡散臭さも相まって数週間かかったことを追記しておく。

?????????

龍兎たちが境内を歩いていると、龍兎の目に不自然なものが止まった。

「……………？」

チラリと横目で見てみれば、そちらにはなんともまあお粗末な尾行をする派手な服装の少女がいた。年は自分たちと同じぐらいだったため、彼女が例の留学生かとすぐに気づいたが、龍兎は内心で呆れていた。

「(……………あれは尾行のつもりなのか？尾行ならなるべく目立たないようにするのが鉄則なんだけど……なぜわざわざ目立つ服装してるんだ？何か別の意味があるってことか？……………いや、あれ単純にポンコツだな)」

少女は周囲をキョロキョロと見て自分が少しというかかなり目立つ服装だと今さら気づいたのか、そそくさとどこかに向かっていた。

「(……………なんか面倒事になりそうな気がする)」

これから起こるであろうトラブルを想像し、少しげんなりとする龍兔だった。

?????????

——一週間後、一高教室内……

数日前に雫がアメリカに旅立ち、教室には雫以外の全員が揃っていた。魔法科高校では初日からフルで授業があるため、龍兔はさっさと用意を終えている。すると、教官の百舌谷がどこかで見覚えのある金髪碧眼の少女を連れて入ってきた。

「全員揃っているようだね。さて、紹介しよう。今日から三学期終了までの間、北山くんととの交換留学でこのクラスにきた、アンジェリーナ・クドウ・シールズくん」

「アンジェリーナ・クドウ・シールズです。リーナと呼んでください」

その容姿に、男女問わずほぼ全員の生徒が感嘆の声を出すが、龍兔や深雪は別だった。

「(クドウ……九島?……そういえば、九島將軍の弟がUSNAで家庭をつくってたって話があったな……つまり、母方か父方の祖父がその弟……つまり十師族クラスの力を持っている?……取り敢えず)」

龍兔はすぐさま目を閉じ、地球の本棚にアクセスした。

「キーワード:『アンジェリーナ・クドウ・シールズ』、『USNA』、『魔法師』」

龍兔がそう呟くと瞬く間に本が消え、手元に一冊の本がゆっくり落

ちてきた。

「…予想通り、USNAの軍人だし………た？」

龍兎は新年開始早々目を疑った。本にあった

——USNAが保有する戦略級魔法師の一人、

『アンジー・シリウス』でもある。得意魔法は加速、振動系魔法等と戦略級魔法の『ヘヴィ・メタル・バースト』。

という文章を見て。

「……………いやいやいや……………ええ？」

目をゴシゴシ擦ってもう一度見るが、文字は一文字たりとも変わらない。つまり——

「彼女は『アンジー・シリウス』…？いやいやいや待て待て。いくらなんでもおかしくね？」

その後、龍兎が落ち着きを取り戻すのに地球の本棚内の時間で十分ほどかかった。

「……………なんにせよ、これは達也に報告だね」

そう決定して、龍兎は意識を現実に戻した。

?????????

「…………ふう」

「……………ねえ」

「！」

昼休みになり取り敢えず一息吐いていると、リーナが龍兔に話しかけてきた。龍兔は警戒しつつも、表面では平静を保って応じた。

「アナタって、キジヨウ・リュウトよね？」

「…そうだけど、名前言ったっけ？」

「九校戦の映像を見たの。アナタってあのRインテリジエンスの人なんでしょう？アタシ、Rシステムの大ファンなの！あんなロマンの塊、今まで見たことないわ！」

「お、おう…」

以前、雫が龍兔に詰め寄った時を思い出すほどにグイグイくるな、と思いながら龍兔は返答した。それを聞いたリーナは続け様に話す。

「でも、分からないの。なんであんな凄いモノを日本だけに留めてるの？アレが海外に出たら、すごい人気になると思う。色んな人が笑顔になると思うの。なのになんで海外に進出しないのか、教えてくれない？」

——瞬間、龍兔の顔が変わった。

その豹変に、リーナどころか近くにいた深雪やほのかですらギョツとしている。その表情まま、龍兔は口を開いた。

「……………笑顔になる、か……………リーナ、君は本当にそうすべきだと思う？」

例えそれが笑顔になる人より多くの人が血と涙を流すとしても？」

「……………え？」

その言葉に、クラス中の時間が凍りついた。

「ただでさえRシステムは本来危険なんだ。現在でも、少数ながらRシステムを使った犯罪は起きている。日本には衛星ゼアがあるから、すぐに犯罪に使われたRシステムを凍結だつてできるし、全国のRシステムを一括管理もできる。でもそれが、海外にまで溢れかえったら話が違う。俺たちの会社や各国政府の目が届かない所で、それか各国政府そのものがRシステムを違法改造したりして犯罪や戦争の道具にするのは想像に難くない。Rシステムはね、『人と魔法師が、一緒に笑顔で居られるような世界にする』つていう、俺の…俺たちの夢の結晶だ。それが血を流す道具になる…偉い奴らが笑うために多くの人を傷つける凶器になつてはいけないんだ。国防軍にだつて、『他国からの明確な侵略行動』と国防軍が判断した上で出す『要請』をウチが受諾、許可することでようやく『自衛目的のみ』使用する契約を結んだ上で販売してる。日本政府ですら、その契約の上で使っているんだ。二ヶ月前の大亜連合の時のような一件が発生して、会社の重役：

俺か父さんが判断して、初めて使えるんだ。そのルールを海外諸国が守るとは、悪いけど俺は到底思えない。Rシステムという強い力を作ってしまった俺たちには、その力に対する大きな責任が付き纏うんだ。君のように、純粹に使ってみたって人もいるかもしれない。けれど、君はこの場で日本という国家に対して約束できるかい？ Rシステムを、絶対戦争の兵器として使わせないって事を」

「……………ッ」

約束する、とリーナは言えなかった。自分が受けたRシステムに関する任務は、戦争の兵器として使うためのようなものだったからだ。

そして、彼女は龍兎の夢に気圧された。

別世界の戦士たる『仮面ライダーゼロワン』が抱いていた『人もヒューマギアも笑える世界をつくる』という夢。笑顔になる存在こそ違えど、その想いの強さは勝るとも劣らない。現に現在、USNAの東海岸近辺で『人間主義者』が暴動を起こしているように、世界での人と魔法師の溝は大きい。

その溝に大きな橋を掛け、人も魔法師も笑顔にしたいのが、龍兎の夢であり、龍兎がRシステムを創った心からの理由だと、リーナは完全に理解したのだ。

「…………ごめん、強く言い過ぎた。あんなことがあったからか、最近ちよつとピリピリしてるんだ」

「…アタシも不用意に言っただけでゴメンナサイ」

「…深雪、悪いけど今日は一人で食べるからって達也たちに伝えたいてくれる？」

「…………ええ、わかったわ」

「じゃ、僕はこれで」

弁当を持って屋上へと向かう龍兔の背中を、リーナはただただ見詰めることしかできなかつた。

第29話 『事実と対峙と吸血鬼』

『…………やはりリーナは』

『「アンジー・シリウス」でまず間違いないよ。彼女のこと風間さんには連絡したの?」

『いや、以前本家の許可無く質量爆散を使ったことが原因で、今は独立魔装大隊との連絡そのものを禁止されている』

『俺が言ったら……四葉は間違いなく達也を疑うよねえ…………』

『すまないな』

「仕方ないって。ただ疑問なのは、どうしてUSNA軍は最強の切り札とも言えるシリウスを投入してきたのか、と言う事だ。リーナの能力ははっきり言って諜報向きのものじゃない。おそらく本命は別に動いているんだろうけど、隠れ蓑として使うにはシリウスは大物すぎる…彼女クラスの人材じゃないとできない何かがあるのか…」

『リーナがシリウスなのは間違いないとして…………スパイ任務やRシステム関連の話はついだな。おそらく本来の任務は別にある』

『USNAがシリウスを国外に投入する任務…………例えばだけど、USNA軍のヤバイ情報を持った裏切り者の始末…………とか?』

『その可能性も捨てきれないな…………こちらでも手を打っておく。貴重な情報をすまない』

「いいって。それじゃ」

『ああ』

挨拶を交わし、龍兎は達也との通信を切った。

「…こりゃこつちも、急ピッチで完成させないと間に合わないかもね…」

そう呟いて龍兎が振り返った先には途中まで作られた先端がそれ

ぞれ金色と銀色で通常の倍近い長さのフルボトルが淡く光っていた。

?????????

2096:01:15—22:04

レオは夜の渋谷を一人で歩いていった。彼はよく夜中に街を歩く日課のようなものがあるが『宛てもなく』ではない。

「変死って……猟奇殺人か？それも連続で？」

先日、現在のように渋谷を散歩しているとエリカの兄である寿和を見つけ、思わず呼んでしまったレオは寿和と部下に連れられて——とつか半ば連行されて——銀行の金庫などにありそうなハンドル式の扉が付けられたバーで話を聞いていた。

「それで、こういうオカルトじみた真似を仕出かしそうなヤツに心当たりは無いかな。特に最近余所から流れて来た連中で、妙な噂が立っているヤツらとかがいるか知りたいんだけど」

「最近の余所者ねえ……ワリイ、今んとこ思いつかねえや。ダチからネタ仕入れときますよ。こう見えて顔はそこそこ広いと思ってるんで」

「いや、それはいいよ。そういうのは我々警察の仕事だし、不用意に嗅ぎ回って君が目をつけられないとも限らない」

その場で危険な真似はしないと約束し、怪しげな連中の噂を知り合いに聞いて回って、目撃情報を追いかけて実際に足を運んでいるというのが現状だ。

「(……にしても、何で俺はこんな刑事の真似事なんてしてるんだ?)」

理不尽な犯罪は他にも起きている故に正義感からではない。しかし、縄張り意識や好奇心と言う訳でもないのだ。

「(…何となく放っておけないんだろうな)」

自他認めている『山勘』に従っているんだろうとレオが納得していると、突然虫の羽音のようなざわめきが聞こえていた。耳にはなくその音はレオの意識の奥底近くでモヤモヤと残っている。そのざわめきはレオには単なるノイズとしてしか認識出来ないが、なんとなく会話のような何かだと直感していた。意識の奥底、まるで魔法を使う領域の近くで交わされる声の発信源へ吸い寄せられるようにレオはそちらへ歩いていく。

「(危ねえ真似はしないって約束だけど、いざとなったらコイツでなんとかすりゃいいか)」

先日、寿和と交わした約束を思い出すが、自身の腰に着けてあるショットライザーとポケットのプログライズキーを見て、レオは苦笑いしながら歩みを進めた。

?????????

「こっちか………ッ!!?」

レオは着実にざわめきの方へと近づいていた。しかし、唐突に感じた殺気に目を見開いた。

「(……俺の出番は多分ここまでだな。警部さんに知らせて、あとはそっちに任せるか)」

ポケットから通信ユニットを取り出し、寿和に教えられたアドレスへ「吸血鬼はここにいる」と端的、かつ短いメールを送った。位置情報を公開する設定で送信したので、寿和がすぐに気づきさえすれば猟奇殺人事件の容疑者を捕捉できるだろう。これ以上巻き込まれる前に撤退すべくレオは踵を返して——その先のベンチに横たわる人影に気づいた。

「!おい、大丈夫か!?……生きてはいる、が……」

すぐさま近づいて首筋に手を当てると弱々しい鼓動が指先に伝わってきたので、レオは慌てて先ほどポケットにしまった通信端末を取り出し救急車を呼ぼうとして

「………ッ!!」

——反射的に振り返って通信ユニットを持った手を顔の前に掲げた直後、通信ユニットが砕け散った。その感触から相手の得物が伸縮警棒だということは後ろに跳び退ってから分かった。

「!………やべっ!?!」

敵の得物が当たってすぐにまた聞こえたノイズに気を取られていたのを相手に覚られ、自己加速魔法を使って自分との距離を詰めてきた相手を見て、レオは防御に魔法を使う時間は無いと一瞬で判断した。自分を横殴りにしようとしている警棒を、レオは左腕で受けた。その瞬間、何かが潰れるような、ひしゃげるような鈍い音が響いた。

「……ッ痛えじゃねえか、よっ!!!」

折れ曲がった警棒に、覆面の向こう側から動揺が漏れる。その隙にレオはボディアツパーを怪人の胸に叩きこんだが、殴った感触は人体にしては妙に硬かった。

「……コートの下はカーボンアーマーか？随分とご大層なこった。けどな……こつちもこれだけじゃねえんだ!!」

【ASSAULT—BULLET!!】

【OVER RISE!!】

「変身!!」

【SHOTRISE!!】

「ッ!?!」

【READY・GO!!】

【アサルトウルフ!!】

【No chance of surviving.】

レオはすぐさまベルトからショットライザーを引き抜いてキーを装填。待機音を待たずにトリガーを引くとウルフのライドモデルが覆面の怪人を吹き飛ばして自分に向かってきたので手を掲げ、光球となった弾丸を握り潰して変身した。そのままレオと怪人は肉弾戦を

繰り広げるが、レオは違和感を覚えていた。

「なんだこれ………まるで体から何か引き抜かれるような………それに手応えはあるのに、効いてる素振りが見えねえ………くっそ!!」

【POWER!!】
【Progress key confirmed.
Ready for Buster!!】
破壊準備完了!!

距離を取ってガンモードのオーソライズバスターを顕現し、パンチングコングプログライズキーを装填して怪人に向け、トリガーを引こうとした時だった。

「ぐあああああっ?!?!?!」

左から強力な『空気弾』エア・ブリットが飛び、オーソライズバスターを構えていたレオのから空きの脇腹を直撃した。不意打ちであり、威力が強かった空気弾を受け身も取れずに喰らったため、レオは地面をゴロゴロと転がり仰向けに倒れる。

「ガハ……ッ………なん、なんだ………?」

悪態を吐きながらレオが起き上がると、そこには黄色い瞳に紅い髪、そして顔に着けた仮面が特徴的な、鬼のような少女がいた。左手には拳銃形態の特化型CADが握られている。微かな想子光が残っているそれを見たレオはそれが自身を吹き飛ばした元凶だと瞬時に理解した。

「テメエ………何のつもりだよ!!」

「……………!!」

少女は答えることなくレオに——ではなく、怪人向かって攻撃し、戦闘を開始した。その直前にレオに向けた鋭い目を見て、それが何を意味するかレオは理解した。

——手を出すな。

つまりは自身の獲物に攻撃したから奇襲をされたということだろう。

「ふっ……ぎげんじゃねえ!!!」

【BUSTER—DUST!!!】

レオは脇腹の痛みを堪え、目の前で一直線状になっていた乱入者と怪人にエネルギー充填が完了したオーソライズバスターを向けて再度トリガーを引こうとした。だがこの時、レオは即座に撤退するべきだった。

「ぐあああああああ
!!!??」

鬼のような少女がCADを向けると、空気が沸騰したかのような高熱の嵐がレオを包み込んだ。嵐はレオのアーマーの温度を急激に上昇させ、破壊していく。

「あが……っ……ぐっ……!!!」

アーマーが高熱に耐えきれなかったのか、レオが倒れると同時に変身が解除され、ショットライザーからプログライズキーが排出された。キーは地面に落ちた途端バチバチと火花を散らし、次の瞬間狼の顔を模したキー内部がバキンと音を立てて割れた。熱によってレオの意識は朦朧となっており、いつ気絶してもおかしくない。そしてレ

オが瞼が閉じる直前に見た最後の光景は、逃げる怪人を追う鬼のよう
な少女だった。

第30話 『少年、そして鬼面の少女』

「マツツジですまねえ……………っ!!」

「……………なんでだろう、めっちゃくちや見覚えあるシチュエーションなんだけど……………」

放課後、雫を除いた普段のメンバーで吸血鬼と戦い、入院することになったレオの見舞いにやってきた龍兎たちは、ドアを開けてレオと目があつた途端にダメージが残ってるであろう体を瞬時に動かして龍兎に土下座をしているレオを困惑の目で見ていた。

「……………えと、取り敢えず頭上げて、何がどうなって土下座するに至ったのか教えて?」

「…実は、その……………ウルフのキーが、えと…」

「ウルフって……………アサルトウルフのプログライズキー?それがどうかしたの?」

「……………これ……………」

「ん?……………あくりやりや、これは…」

レオは恐る恐る隣の机の上に置かれていたアサルトウルフプログライズキーを龍兎に渡す。龍兎が自分のライズフォンを当てて製作者権限でキーを展開すると、レオが土下座した理由がわかった。蒼い狼の意匠が施された内部が黒く焦げているのだ。

「せつかく貰ったキー、壊しちゃった…ホントにすまねえ……………」

「ううん、これのおかげでレオが助かったのなら謝る必要なんてないよ。でも……………この壊れ方は、直すのに一ヶ月ぐらいはかかりそうだね…深部の端子や他のパーツまで見事に焦げちゃってる。むしろ新品に替えた方が早いよ」

「い、い、一ヶ月!!?」

「うん。悪いけどそれまではシューティンググループで代用しててくれる。」

「ああ……」

「……………にしてもこの焦げ方は…レオ、いったい何と戦ったの？ ネットニュースであった吸血鬼だとしたら、ここまで焦げるのはおかしいよ。まるで超高温の気体で焼かれたような痕……………何があったか詳細を教えて？」

レオは吸血鬼らしき怪人と遭遇したこと、途中で謎の鬼のような紅い髪の少女が乱入してきたこと、その少女の魔法でキーが焼かれたことを細かく説明した。

「なるほど……………取り敢えず帰ったら衛星ゼアにアクセスして調べてみるよ。Rシステムを使ってる時の使用者の視覚聴覚データは全部リアルタイムで送信されてるから。もしかしたらそれで何かわかるかも」

「ワライ」

「命があっただけよかったよ。ここまでの壊れようだ。常人なら死んでもおかしくなかったよ」

その後、吸血鬼との戦闘中に何か魂が引っ張られるような感覚があったとことで幹比古が術を使って調べたところ、レオの幽体が常人ではあり得ないほど膨大だったことに驚愕していたり、少しではあるがいつものメンバーの姿があった。

?????????

龍兎は帰宅してすぐ地下スペースに足を運び、ゼアにアクセス、レオの戦闘データを引っ張り出して分析を開始していた。その目線は、映像の中のある場面で固定されている。

「…………まず、最初にレオの左脇腹を攻撃した魔法は『空気弾』^{エア・ブリット}で間違いないとして…………やはり問題はこの『ムスペルスヘイム』…深雪の『ニブルヘイム』同様、難度Aの領域魔法…それをこの出力だ。たしかにダメージを受けていたアーマーが壊れてもおかしくはない、か…」

『ムスペルスヘイム』とは、気体分子をプラズマに分解し、更に陽イオンと電子を強制的に分離する事で高エネルギーの電磁場を作り出す領域魔法である。そのため『磁場の急激な変化』+『超高熱』という、機械にとつては最悪な状況のフルコースなのだ。しかし、Rシステムには耐熱性もしっかり組み込まれているため、そう簡単には壊れることはない。

「……………まあ、こんな街中でここまでの魔法をポンと撃てるやつなんて限られてくるけどね」

龍兎の頭に真つ先に浮かんだ人物はリーナだ。しかし、そうなるの一つ疑問が出てくる。

「どうやって身長まで変えたか、だよね…」

光波を制御する魔法を使ったとしても、別人のように変装する魔法というのは聞いたことがない。では科学技術で変装したのか、となると今度は自然過ぎる背丈が疑問となってくる。靴底を分厚くするにしても、必ず不自然な点が出てくるはずだが、そのような加工をした痕跡は一切無いのだ。

「取り敢えず検索し……………ッ!!?」

地球の本棚にアクセスしようとした時、龍兎は机の上のショットラ

イザーを片手で構えながら振り向き、銃口を侵入者に向けた。

「……………色々と聞きたいことはあるんですが、まずはなんでここにいるのか教えてはくれませんかね、九重八雲さん？」

「僕から教えを貰うのは、高くつくよ？」

侵入者——八雲は持ち前の薄ら笑いを浮かべながら壁に腕組みをしてもたれかかっていた。

「……………不法侵入したくせに、ですか？」

「ふくむ、それを言われると弱いねえ……………まあ、一応言っておこうか。単純なお願いだよ。対価は、今君が知ろうとしていたこと、かな？」

「……………と言うと？」

「その彼女が使っていた魔法のことを教える代わりに、君の地球の本棚で術式なんかを詮索しないで欲しい、ってことさ」

「…『断る』、と言ったらどうなるんですか？」

「……………どこかで聞いたことがあるセリフだねえ。もし無闇に詮索すれば君を消さないといけない、とだけ言っておくよ。君『だけ』とは限らないけど」

「……………『九』の魔法師絡み、と解釈しても？」

「そういうこと。では、取り引き成立と受け取ってもいいかね？」

「…不本意ではありますが、ね」

「分かってもらえて嬉しいよ。では説明するよ。魔法の名称は『パレード仮装行列』。「色」、「形」、「音」、「熱」、「位置」……………体を構成するありとあらゆるものを欺く偽装魔法さ。「位置」まで誤魔化してしまうからね。達也君の『エレメンタル・サイト精霊の眼』でも捕捉は困難という訳さ」

「なるほど…『九』の魔法師たちが第九研究所で開発していた魔法ですか…まあ、分かりました。たしかに検索したら色々面倒事になりそうだし」

「理解してもらえたようだね。では、今日はお暇させてもらうとしよ

う」

そうやって踵を返した八雲は、龍兎が瞬きした瞬間にその姿を消していた。

「……………ほんつと嵐みたいな人だね…結構セキユリテイ弄くつたんだけどなあ……………」

龍兎の頭の中にはあの忍者？を捕捉できるほどのセキユリテイを開発できたら人気出そうだな、という他愛もない考えが浮かんでいた。

?????????

「ん？」

「あつ」

「え？」

深夜。龍兎は吸血鬼を探すために街中を探索していると、なにやら模様が刻まれた棒を持つ幹比古を連れたエリカとぼったり出くわした。

「……………一応聞きたいんだけど、なんでここに？あ、コツチは吸血鬼探しね」

「……………アタシたちもよ」

「……………同じ穴の貉、ってヤツ？まあ、ちょうど良かったかもね。ターゲットも見つかったし」

「二！」

龍兎が振り向いた方を見て、エリカと幹比古も目を見開いた。一瞬

だが、レオが言っていた怪人と鬼のような紅い髪の少女が視認できたのだ。

「行くわよミキ!!」

「ち、ちよつとエリカ! ああもう!!」

「そつちも大変だねつ、と!」

「逃がさないんだから!」

【DASH!!】

【AUTHORISE】

エリカは走りながらショットライザーを腰に巻き、プログライズキーのスイッチを押して装填し、トリガーを引いた。

「変身!」

【SHOTRISE!!】

【ラツシンググチーター!】

【Try to outrun this demon
to get left in the dust.】

「ここまで来たら、やるしかない!」

【JAPANESE—WOLF!!】

ヴーツ! ヴーツ! ヴーツ! ヴーツ!

幹比古もフォースライザーを腰に装着し、ゼツメライズキーを装填してアンカーを引いた。

「変身!」

【FORCE RISE!!】

【JAPANESE—WOLF!!!!】

【BREAKDOWN…】

「パッパと終わらせよう！」

【SHINING—JUMP!!】

【AUTHORISE】

「変身!!」

【PROG RISE!!】

【シャイニングホッパー!!】

【When I shine, darkness fades.】

三人はそれぞれの姿に変身し、怪人と鬼の少女を追って駆け出した。どうやら公園で足を止めて戦っていたようで、三人が追い付くのは予想より早かった。

「ミキと龍兎くんは怪人を！私は仮面を倒す！」

「それ言ったら俺たち仮面ライダーだけどね！」

冗談を吐きつつも、三人は瞬時に相手に向かって行き、そのまま戦闘を開始した。幹比古と龍兎は怪人を二方向から同時に攻めつつ、チャンスを狙っているが、エリカの方は若干押しきれ気味だ。だが、

「もらった!!」

攻防の末、銃身を得物で叩き落としたエリカはそのまま仮面の女の肩を狙って攻撃を仕掛けた。が、そう甘くはいかない。

「あぐっ!!?」

振り下ろした瞬間、足元から強い力がかかり、エリカは上空に吹き飛ばされた。おそらくは加速魔法か移動魔法だろう。

「!うおつと危なっ!!大丈夫!」

「う、うん、ありがと……痛っ……」

龍兎がすんでの所でキャッチして着地したが、かなり強い衝撃だったようだ。だが、二人はそこで違和感に気づいた。

「……………ん?」

「(…なんで追撃してこないの?)」

二人が仮面の女の方を見ると、その視線は公園の向こう側にあるバイク——正確にはそれに乗ったまま銀色の拳銃型CADを構えた『仮面ライダービルド』に向けられていた。その人物を見た二人は同時に声を出す。

「二達也!」くん!」

と、鬼の少女に動揺が走った。まるで何かが効かなかったような驚き方だったため、龍兎はすぐに勘づいた。

「(魔法式を『術式解散』で消されたんだろうな)

……………つて幹比古!!」

「え?あっ!!」

二人が気づいた時は既に遅かった。怪人は素早くその場から退散し、夜の闇に消えてしまった。そして同じく鬼の少女もこれ幸いとはかりに別方向に走り出し、消えていった。

「……………助かったかもだけど、なあ……」

龍兎は変身を解除し、引き抜いたプログライズキーを持った手でコ

リコリと頭を搔きながら怪人が消えた方を見て眩いたが、その小さな愚痴も怪人たちと同じように暗い東京の夜に搔き消されていった。

第31話 『現場と戦友（とも）と総隊長』

「この辺りか………」

龍兔は現在都内の公園に来ていた。その目的は無論吸血鬼、及び鬼の少女を倒すためである。前回の戦闘で打算的な手段はあまり効果が無いと理解した龍兔は衛星ゼアと自身の頭脳をフル活用して、今日この辺りで鬼の少女——リーナと怪人が出くわす可能性が極めて高いことを突き止めた。そのため、今こうして張り込みしているのだ。

衛星ゼアの計算によると、あと五分もあれば戦闘が始まる。取り敢えず近くの茂みの影で龍兔はアイテムの最終チェックをしていた。

「対ムスペルス Heim 用に用意したプログライズキーもある。よほどのアクセントがなければリーナと吸血鬼、双方を一網打尽にできるはずだ。さすがにこんな一大事に海たちを巻き込むわけにはいかないってのが痛いけどね」

○一ビルダーズは、全員が数字付きですらない一般人——腕はあるが色々癖が強いメンバー——で構成されている。頑丈なメンバーも多いが、危険な戦いに巻き込むことはできないというのが○一ビルダーズの総主任でもある龍兔の本心だった。

そうして点検を終えて茂みから顔を出した時、龍兔はあり得ない人物と目があった。

「あ」

周りをキョロキョロを見渡していた達也と、茂みから顔を出した龍兔の目線がバツチリ重なったのだ。

「…………龍兔。なぜお前がここにいる？」

「…………衛星ゼアの計算で、この辺りに吸血鬼とリーナが来る可能性が高いって出たから。そっちはもしかして藤林少尉？」

「ああ」

「なら、ここは共同戦線ということだ」

「今回に関しては人数が多いに越したことはないからな。こちらからも頼む」

ここに、呂剛虎以来の最強タッグが結成されることとなったのである。

?????????

そうしておよそ五分後、龍兔と達也は現在リーナと対峙していた。戦闘が開始されてから少し経ち、達也が事前に用意していた銃で吸血鬼を撃ち抜いた。するとリーナは二人に気づき、吸血鬼そっちのけで二人に攻撃を仕掛けてきたのだ。二人は戦いながら「自分たちは敵ではない」と説得してきたが、結局吸血鬼にはまんまと逃げられてしまったのだ。その後達也と龍兔はリーナの『仮装行列』を攻略、現在は仮面だけを着けたリーナと対峙している、というのが現状だ。

「…………人の話は聞いて欲しかったんだけどね。吸血鬼を倒すって目的は一致している。わざわざ俺たちと戦うメリットが無いって知ってた上にこっちの説得を無視して戦う意図が正直読めないんだけど、そこんところはどなの？リーナ…いや、USNA軍魔法師部隊『スターズ』の総隊長、アンジー・シリウス」

「…………やはり気づかれましたか。隠せていたつもりだったんですが、まあ仕方ないですね。私の正体を知られたからには、消すしかあ

りません」

「他国で不法行為を好きだけしておいて都合が悪くなったら消すのがUSNA軍のやり口なの？随分と身勝手な話だね。そっちのミスで俺たちが死ぬだなんてとぼっちりもいいとこだ。だから、一言だけ言わせてもらう」

【BLIZZARD!!】

「!?」

「殺せるんなら殺してみろよ!」

【AUTHORISE】

龍兎がプログライズキーを認証させると、上空から氷の塊が龍兎たちとリーナを隔てるように落下し、地面に当たると同時に割れて中から大きな白熊のようなライダーモデルが現れた。ライダーモデルはまるで産声のように大きく鳴くと、そのまま龍兎を顔を向ける。

「変身!!」

【PROGRISE!!】

【Attention freeze!!】

【フリージングベアー!】

【Fierce breath as cold
as arctic winds.】

そのままライダーモデルが覆い被さるように龍兎に抱きつくと、ライダーモデルは分解されて龍兎のアーマーとなった。その龍兎の体からはフシユーツと蒸気のように冬の時期が更に寒くなるような冷気を出している。こうして龍兎は『仮面ライダーゼロワン・フリージングベアー』に変身した。

「悪いがリーナ、命が懸かった状況で手加減するほど俺たちは甘くな

いぞ」

【スパイダー!!】

【冷蔵庫!!】

【BESTMATCH!!】

【トンカンテンカントンカンテンカン!!】

【ARE YOU READY!?!】

【変身】

【冷却のトラップマスター!】

スパイダークーラー! イエイ!】

達也はポケットから出したスパイダーフルボトルと冷蔵庫フルボトルをビルドドライバーに装填してボルテックレバーを回し、スナツプライドビルダーを顕現して『仮面ライダービルド：スパイダークーラーフォーム』に変身した。

「…アナタたちがそう来るなら、彼のようにまた破壊するまでよ!」

そう言って、リーナは二人にCADを向ける。使う魔法はおそらく、レオのアサルトウルフを破壊した『ムスペルスヘイム』で間違いない。

だが、彼女はRシステムをまだ甘く見ていた。

「……………え?」

魔法を発動した直後、リーナは絶句した。

「はああああ……………!!!」

「……………ッ!!」

龍兎は両の掌から、達也は左肩からそれぞれ強力な冷気を放って空

気を冷却することで、リーナの『ムスペルスヘイム』を完全に相殺していた。

「だあああッ!!!」

そして一際大きく力を込め、熱気を完全に押し返す。たまらずリーナは両腕で顔を守るが、その隙を突いて龍兎と達也は接近戦を仕掛けてきた。

「悪いなリーナ！俺は今最っ高にキレてるんだ！お前たちみたいな奴らにRシステムは渡さない！人々を、俺の友達を傷つける奴は絶対許さない！俺たちの夢の結晶を悪用させたりはしない!!」

「俺は深雪を守る。俺たちに降りかかる火の粉が深雪にもかかるのなら、俺は全力で振り払う！」

「……………!!」

達也には唯一の感情しかない。それは『深雪に対する兄妹の感情』である。それは、彼らの兄妹愛が成した一つの奇跡ともいえるもの。そして、唯一達也の心を滾らせるもの。今、彼の心を縛る錠は解かれている。故に、普段からは想像もできない彼の意志の強さにリーナはたじろぐ。そしてそれが更に自身を劣勢へと落としていった。

「お前を超えられるのは、俺たちだ!!!」

「トンカンテンカントンカンテンカン!!!」

「フリージングインパクト！」

「READY・GO!!!」

イ

フ

トクパン

グンジ？リ

【VORTEC FINISH!!イェーイ!】

「アアアアアアアアアツ!!??」

龍兎が冷気を纏ったその熊のような腕をラリアットの要領で振るって飛ばした冷気の衝撃波を喰らい、リーナは胸部から腹部にかけて凍結されながら吹き飛ばされ、地面に接触する寸前で今度は腰から下が氷漬けにされた。そんな立て続けに起きた出来事に戸惑うリーナの両腕に、突然冷気を纏った粘着質の糸が絡み付いた。糸の延びる方を見ると、右腕に絡み付いた糸を左手で、左腕に絡み付いた糸を右手で握り、軽くジャンプする達也がいた。達也はそのままギリリと糸を軋ませ、次の瞬間リーナに飛ばした糸ごと体を捻り、糸が縮む勢いを利用してドリルのように回転しながらリーナに足を向ける。そのまま冷蔵庫型のエネルギーを纏った両足ドロップキックをリーナは受け身も取れずに凍結した腹部に喰らった。リーナはそのまま腹部の氷をバキバキと砕かれながら今度こそ地面を滑走し、十数メートル先まで吹き飛ばされた。リーナが寒さと痛みを堪えつつ、震えながらも起き上がると、ちょうど変身を解除した二人がゆっくりと歩み寄って来ていた。そのまま達也はリーナの仮面に手を伸ばす。その意味を理解したリーナは叫びながら抵抗した。

「ぐっ…止めなさいタツヤ!それをすれば、後悔することになるわよ!」

「生憎、後悔なら既にしている」

「そうこうしてる間に吸血鬼にも逃げられてる。それに、どうせ君たちは俺たちをつけ狙うことに変わりはないだろうからね」

正論を言う二人に対し、齒軋りをしたリーナは最終手段に出た。

「誰か、誰か助けてっ!」

それは強姦魔から助けを求める少女の叫びという表現が相応しかった。迫真の演技を白けた目で見詰める強姦魔コンビこと、達也と龍兎。だが、まるでリーナの悲鳴を合図として待っていたかのように駆けつけてくる足音が聞こえた。二人が目を向けるとそちらには桜の紋所に付けた四人の男性が近づいて来ていた。

「両手を上げて後ろを向け!」

正面から駆け寄ってきた警官が拳銃を突きつけながら叫ぶが、達也はリーナの後に回り、そのまま男へ向けて突き飛ばした。

「きゃっ!?!」

悲鳴を上げて男の胸に飛び込むリーナを無視し、達也リーナの頭上を飛び越え、その男の肩に着地して蹴り飛ばすようなキックで男の顔を打ち抜いた。

「……本物の警官だったらどうするつもりよ」

「そろそろ茶番は止めてもらいたい、アンジー・シリウス」

「あそこまで派手にやったんだ。本物ならあの戦闘の途中にくるもんだよ。こんな都合の良いタイミングで来る警官なんて信用できるもんか」

信じられないという口調で言ったリーナに対し、達也と龍兎は強い

意思を以て答えた。その返答に空気が音を立てて固まったような幻覚さえ感じてしまう。

「君に協力してる以上、本物だろうと偽物だろうと同じ事。百年前ならいざ知らず、現代のこの国の刑法において外患誘致罪は武力行使が実現しなくても成立する。警官の扮装程度で怖気づくと思ってるなら大間違いだ。我々日本の魔法師の覚悟を甘く見ないでもらおうか」

「まあ、ブランシユとかその他諸々と戦り合った俺たちだからこそかもだけどね」

蹴り倒された一人を除く三人の偽警官が、リーナの顔を――彼らの総隊長アンジェリーナ・シリウスの表情を窺っている。それを横目で見たリーナは溜め息を吐くと二人に向かい膝を軽く折って丁寧に一礼した。

「これは失礼致しました。確かに見くびってしまいましたね。聞くところでは大違いです。同じ魔法師として謝罪します。お察しの通り、ワタシはUSNA軍統合参謀本部直属魔法師部隊『スターズ』総隊長、アンジェリーナ・シリウス少佐。アンジー・シリウスというのは先ほどの変装時に使う名前なので、今まで通りリーナと呼んでください。さて、ワタシの素顔と正体を知った以上、タツヤ、リュウト。スターズは貴方たちを……いえ、リュウトは捕縛対象ですのでタツヤを抹殺しなければなりません。仮面のままであれば幾らでも誤魔化しようはあったのに、残念です」

「後悔する、というのはそう言う意味だったか」

「ええ。せめて騙されて捕まってくれれば、殺さずに済みます事も出来たのですが」

「それは悪かったな。せつかくの心遣いを無駄にってしまった」

「いえ、貴方を抹殺するというのはワタシたちの身勝手な都合によるものですから、謝る必要はありません。抵抗しても良いですよ」

人が体を動かすには脳からの命令を伝える運動神経が必要だ。では、その周囲の細胞を急速に増殖させて無理矢理それを断ち切ったとしたら？

答えは簡単。想像を絶する痛みと、神経を強制的に断ち切られたことにより命令が届かなくなった四肢の影響で倒れる結果となった。

途中からの過程や結果から見れば、達也が使う『分解』による意識の断絶と同じ原理である。

何はともあれ、これで状況は元通り。いや、むしろ悪化すらしてきた。なぜなら――

「貴方の好きにはさせないわよ、リーナ」

――氷河の女王が降臨したからだ。

第32話 『対決！氷結！完全無欠！』

「いや、思いの外余裕そうだね、二人とも」

「人が悪いですよ師匠。隠れて出番を待っていたくせに」

「その上、十五歳の女の子をお持ち帰りですか？」

随分肉欲に溺れてますね。僧が聞いて呆れます」

「……………師匠？深雪をお持ち帰りとは一体どういうことかご説明願えますか？」

「いや待って達也君違う、違うからちよつとそのCADを取り敢えず下ろしてくれないかい？」

深雪と現れた八雲に愚痴を言う達也だったが、どうやら龍兎の文句を真に受けたようで、殺気を放ちながら八雲にCADを向けている。八雲は弁明しているが、当の深雪は顔を赤くして——無論達也に心配して貰っているからであるが——いるため、更に怒りがヒートアップしていた。

しかし、そんな彼らは若干揉めていようがリーナへの警戒は一切怠ってはいない。それを理解したリーナは憤慨の声を上げた。

「二対四なんてずるいじゃない！アンフェアよ！」

「アンフェアって…じゃあ貴女たちは何人でお兄様と龍兎君を取り囲んだのよ」

「四対二、いや、リーナを加えると五対二だね。一人頭2・5人だけど、不利なのは変わらないよ」

悔しさ全開の見当違いな非難に、深雪が呆気に取られたような声でツッコむと、龍兎はそれに冷静な計算で答えた。

「まあそう言うな。フェアという言葉は自分が有利な立場にある時に

有利な条件を維持する為に使われる建前であり、アンフェアという言葉は自分が不利な状況にある時に相手から譲歩を引き出す方便だ。腕力で勝てそうにないなら口先で争いを回避するというのは、戦術的に間違つて無い。本気にしたら負けだよ、深雪」

「…なるほど、そういうものなのですね」

あまりにどす黒い大人の内容だったが、どうやら深雪を落ち着かせる効果はあつたようだ。その副作用か、リーナの怒りを一気に沸騰させているが。ちなみに八雲は笑いを押し殺し、龍兎は「何だこれ」と思いながら白目を向いて仏頂面をキメていた。

「建前？方便!?本音と建前を使い分けて恥じない貴方たち日本人に言われたくないわ!」

「君だつて四分の一は日本人じゃないか」

「……っ」

「それに、君が使っていた『パレード仮装行列』は日本で開発された術式で、君がああ魔法を使えるのは九島の血を、つまり日本人の血を引いているからでしょう?それに、ダブルスタンダードはホワイト・エスダブリツシユメントのお家芸だ。本音と建前を使い分けられない民族なんて聞いた事が無いけど」

「…すべて言われたが、俺も同意見だ」

「ここぞとばかりに白目を向いていた龍兎までも加勢し、リーナは「ぐぬぬぬぬ」と言わんばかりに顔を紅くして怒っている。そして、若干の苦笑いを浮かべている達也を見ると、臨界点に達してしまったようだ。」

「……何かおかしいの?」

「いや、このまま訊問をしてもリーナは意固地になって口を割らないだろうと思つてね」

「そこはせめて『意地』と言って!」

「それにマズいよ。多分そろそろ他のグループも駆けつけてきそうだし……」

「ちよつと！ワタシの言ってる事聞いてる!？」

「そうだな。手短に済ませよう。リーナ、フェアに取引と行こう。一対四がズルイと言うのなら、一対一で勝負しようじゃないか。君が勝ったら今日のところは見逃す事にする。その代わり、俺が勝ったら訊かれた事に正直に答える。これでどうだ？」

「……いいわ」

ほとんどどころか少しも釣り合って無い取引だったが、リーナに他の選択肢は無かった。リーナが考え抜いた挙句に条件を呑むと、達也は満足そうに頷きかけ——最愛の妹を見た。

「待って下さい！お兄様、リーナとの勝負は、私にお任せください」

「ミュキ、貴女何を……」

「リーナ、覚えておきなさい。私は、お兄様と龍兎君を傷つけようとする者を決して許さないわ。私は貴女の事ライバルで友人だと思ってるけど、貴女がお兄様たちを殺そうとした事は、例えそれが口先だけのものだったとしても断じて許す事は出来ないわ。貴女は私の手で、その罪を思い知らせてあげる。安心しなさい。殺しはしないから。ただ、同時に手加減もしない。私の今あるすべてを以て、貴女を倒す」

「ふーん……ミュキ、貴女、ワタシに勝てると思ってる？シリウスの名を与えられたワタシに！」

深雪の勝利を確信した宣言に、リーナの胸に負けん気の炎が燃え上がった。睨み合う二人の美姫は絵になるかもしれないが、現場を見ればそんな下心は速攻で萎えるだろう。

「分かった。深雪、お前に任せる。龍兎とリーナもそれでいいな？」

「ノー・プロブレム」

「ありがとうございます、お兄様、龍兎君」

「承知よ。もしワタシが負けたら何でも話してあげる。そんな事あり得ないけどね！」

『…そうして啖呵を切った勝負の末、無様にもリーナは膝を地面に突いたのであったとさ』

「ちよつとリュウト!?何ふざけた物語追加してるのよ!!?」

「…………ノリ?」

「~~~~~!!!」

その後リーナが『勝負に自分が勝ったら達也と龍兎を自分の部下としてUSNAに連れていく』と発言したことで完全に深雪の怒りを買、リーナは八雲と弟子が乗るセダン、達也と深雪はバイクに、龍兎もライズフォンを變形させたライズホッパーに乗り、戦場となる河川敷へと向かった。

?????????

河川敷では深雪とリーナが戦闘準備をそれぞれ完了させていた。そして二人の間に八雲が割って入る。

「さてと…………リーナには不満かもしれないが、審判は師匠に務めてもらう。審判といっても勝ち負けの判定をするだけで、勝負を仕切ったり途中で手出しはしないけどね」

「ここにいるのは敵だけってことぐらい最初から分かってる。不満なんて無いわ」

「潔くて結構だ」

「(…さつきまでは不満ブー垂れてたのに)」

彼女の憎まれ口を、達也はサラツと流し、龍兎は変化の大きさに内心おっ、となっていた。

「じゃあ、不肖ながらこの九重八雲が審判役を務めさせてもらうよ。勝敗の条件は、どちらかが降参するか、戦闘不能になる事。殺すのは無しだよ。遺恨を残してしまうからね」

「分かりました。それで十分です」

「その前に終わらせればいいわ」

「知ってるリーナ？それフラグだよ？」

「う、うるさいわね！」

静かに頷く深雪と、威勢良く了承の意を示すリーナ。その態度は対照的ながらも、自分の勝ちを疑って無い点は共通していた。まさに一発触発かと思われたが、龍鬼の茶々でぶち壊しだ。

「最後に、こちらが危険だと判断した場合のみ、強制的に試合を止めるからね。その場合はお互いの出した条件の半分程度を有効とし、それ以上は踏み込まないようにする事になるから。では、始めようか」

「師匠、少し待って下さい」

「？」

ようやく戻った一発触発の空気の中、龍鬼同様そこに水を指す空気の読めない男がいた。八雲とリーナから向けられる白けた眼差しを完全に無視して、達也は妹の許へ歩み寄る。深雪の正面、二歩の位置に来てまだ足を止める気配は無い。

「あの、お兄様？」

兄の意図が読めず戸惑う深雪に答えを返さず、正面、あと一歩でも依然として足を止めない。そして達也は手を伸ばせば深雪を抱き寄せられる至近距離で足を止めて——深雪を抱き寄せた。

「あああのあのあのあのの？」

腰に深く手を回され、赤面を通り越してパニックに陥り、あとのを壊れた洗濯機のように高速で震えながらキャストする深雪。さつきまで自分の方から抱きついていたくせに、というのはあくまで第三者の感想で。本人にとっては自分から抱きつくのと突然抱きつかれるのとは全くの別物なのだろう。そうこうしていると達也のもう一方の手が深雪の後頭部に添えられる。最早深雪は声を出す事も出来ない。妹の髪に指を潜り込ませ、抵抗を忘れた顔を口元に寄せて、達也は深雪の額にキスをした。そして達也が抱擁を解くと、目を見開いた深雪の顔が現れた。そこに恥じらいは無く、ただ驚きだけがあった。

「これは……どうして……」

「この前見せてもらった時、不完全ながらやり方を覚えた。一時的な効果しかないが、制御力を返す。思う存分やりなさい」

「……はいー」

元気よく返事をした深雪は改めてリーナに向き直り、後ろから何かを取り出した。それを見たリーナはあまりの光景に目を見開く。

「……………ええ!? ちょっとミュキ!? 何であなたまでそれを持つてるのよ!!?」

そのまま深雪は取り出した何か——ビルドドライバーを腰に装着し、ポケットからボトルを取り出す。

『ペイイイッ!!』

そしてバイクから飛んで来て素早くガジェットモードになったフリーズドラゴンをキャッチし、ボトルを左手で振って挿し込んだ。

【ICE UP!!】

【FREE—Z DRAGON!!】

【トンカンテンカントンカンテンカン!!】

そのままボルテックレバーをゆっくり回転させると、それに呼応してボルテックチャージャーが水色と白に発光しながら回転する。そしてスナツプライドビルダーが展開されるが、通常と比べると、成分を流すファクトリアパイプラインや下部のランナーに所々霜が降りている。

【ARE YOU READY!】

そのベルトの問いかけに深雪は静かに、しかしリーナを倒すという強い意志を以て答えた。

「変身」

【WAKE UP ICING!! GET FREE—Z DRAGON!! YEAH!!】

「……………嘘でしょ?」

「…言ったはずよ、リーナ。『私の今あるすべてを以て、貴女を倒す』と。私は傲ったりしない。文字通り全力で貴女を倒します」

「……………っ!」

「…さて、それでは両者構えて」

リーナは額に汗を流すほどに焦ったが、もう後の祭である。八雲の合図ですぐさま目の前の強敵深雪に狙いを定める。そして――

「…始め!!」

太陽と月。黄金と漆黒。灼熱と極寒。

様々な面において真逆の二人がぶつかった。

?????????

——…しかし開始数分後、徐々に優劣が着いてきた。ただでさえリーナは、対吸血鬼、達也&龍兔と続く三連戦。対して深雪はフリーズドラゴンまで使って文字通り本気だ。分子ディバイダー、ダンシング・ブレイズ…おおよそ切れる手札をいくらか切ろうと、深雪に当たる寸前で停止し、墜ちてしまう。それはまさしく彼女の絶対領域。何が来ようとそこに入った瞬間氷漬けだ。しかも信じ難いことに、深雪は勝負開始から今まで一步も動いていない。リーナは「やはり傲つてるじゃないの!」と言いたげだが、単に深雪は最大火力ならぬ最大凍力のために体力を温存するために動いていないだけだ。

だが何故か、リーナの中にはこの状況を楽しく思っていた。場違いなのは理解している。しかし、心から湧き出る感情、それは強敵と対峙した生物の闘争本能とも言うべきものだ。

そしてリーナは移動魔法で大きく距離を取り、不適に笑う。その意味を理解した深雪もボルテックレバーを手をかけた。

「ミユキ!」

「リーナ!」

「勝負よ!」

【トンカンテンカントンカンテンカン!!】

【READY・GO!!】

リーナは魔法式を展開し、深雪はボルテックレバーを回転させて空

高く跳んだ。その右足にはどんどん極寒のエネルギーが集束されていく。そして――

【ARCTIC FINISH!!!】

「はああああああっつ!!!」

リーナから放たれた『ムスペルス Heim』と、深雪の『ニブル Heim』を纏った必殺キック『アークティックファイニッシュ』が真つ向からぶつかり合った。あまりの温度差によって、そのすぐ上では美しいオーロラが広がっている。

「……………これは勝負あつたね」

「ああ……………!!」

「?……………ちよつ!自殺するつもり!」

リーナは腰に手を回し、武装一体型CADを出そうとした。だが、今はただでさえ深雪に圧されている状態だ。そんな中で他の魔法を使えば下手をすると魔法力を失う事態になりかねない。

「そこまでだ!!」

達也が放った『術式解散』グラム・デイスパージョンにより、二人の魔法は消滅。深雪はキックの威力を失いながら地面にフワリと着地した。リーナは憑き物が落ちたように地面にへたりこんでいる。

「……………これは深雪の判定勝ちだね。リーナ。いくらなんでもあのタ イミングで武装一体型CADを使うとするのは自殺行為だよ」

「わかってるわよ。約束通り、質問には答える。ただし、『YES』か 『NO』で答えられる質問だけよ。アタシが負けそうだったからって 言っても、試合を中断させたのに変わりはないんだからね」

「わかっている」

せめてもの意地だろうな、と達也は若干の苦笑いをしていた。

「……………そーいや結局フラグだったね」

「~~~~~
!!!!!!」

尚、リーナは龍兔のこの一言で一気に完熟トマトのような顔になって地団駄を踏みまくっていたと追記しておく。

第33話 『怪奇吸血鬼』

「……………」

深雪とリーナのタイムンファイトから数日後、龍兎は屋上の花壇の縁に腰を下ろして昼食のカツサンドをモシヤモシヤと頬張っていた。その彼の脳裏には、一月の終わり、時間的にもうすぐ二月になろうとしていた夜に、作業中に突然かかってきた電話に関する記憶が浮かんでいた。

「——ム………やっぱキーを二つ装填するって口にするのは簡単だけど、いざやるとなると出力に耐え得るよう素材の強度を見直さない——♪♪♪♪(ゼロワンのBGM)お前を止められるのはただ一人、俺だ!」の冒頭——と」

パソコンからの着信に応答すると、画面に達也が現れた。

「どしたの達也、こんな夜分遅くに」

『…パラサイトの出所がわかった』

「……………詳しく聞かせて」

『どうやら、USNAで行われた『余剰次元理論に基づくマイクロブラックホールの生成・消滅実験』が原因らしい』

「……………USNAはバカなの?よりによってそんなイカれた実験するとか……………何のために……………いやちよつと待って。それまさかアレ横浜の一件が原因?」

『おそらくな。俺の『質量爆散』マテリアルバーストが警戒されているとは知っていたが、あれを強行させる程だったとは…』

「そりゃあ想像できないわな…」

余剰次元理論というのは、この世界は高次元の世界に閉じ込められた三次元空間の薄い膜のようなもので、物理的な力では重力だけが次元の壁を越えられる、すなわち重力はその力の大部分が別次元に漏れている為に、この次元では本来のものよりずっと小さな力しか観測出来ないという仮説である。それに基づけば、わずかなエネルギーでも小規模なブラックホールを人工的に作り出し、そこからエネルギーを取り出すことが可能となるという実験だ。生成されたマイクロブラックホールが蒸発する過程で、質量が熱エネルギーに変換されることが予想されるが、そのエネルギーはマイクロブラックホールを生み出す際より多いため、結果としてプラスに傾く。

少し話は脱線するが、一説には異次元から魔法に必要なエネルギーが供給されているはずだ、という考えがある。別次元に作用している重力は、そうする事で龍鬼たちのいる次元と別の次元とを隔てる壁を支えているのではないだろうか。魔法は、その壁を崩さずに異次元からエネルギーを取り出しているのではないだろうか、と、少しオカルトじみた話である。しかし、そうでもないかと移動魔法などによる事後的なエネルギー観測はどうなっているのか、という話になってくるのだ。

そして——次元の壁が揺らいだ瞬間、異次元で形成された魔法的エネルギーの情報がこの世界に侵入する可能性があるのではないか、というのが達也の考えだ。

平たく纏めると、人工的に重力の塊とも言えるマイクロブラックホールを作った際、そのエネルギーが別の次元に作用している重力に干渉し、ごくわずかな時間だが異次元と龍鬼たちの次元が繋がってしまい、そこからパラサイトが発生したのではないか、とのことだ。

「…つまりパラサイトは、異世界の敵だ、と…」

『確証も根拠もないが、そうでもしないと説明がつかん。まあ、まだまだ未知の敵だ。仕方ない』

「……………まあ、そうだよ。わかった。こっちでもいろいろ調べてみるよ。ありがとね」

『ああ。それじゃあ、また明日』

「うん。あ、そうだ。例のアレだけど、今月までには完成しそうだし、完成したら持つてくよ」

『そうか。わかった』

「じゃね」

「(……………にしても、なんでパラサイトは人間を乗っ取るんだろ。別の世界では体を維持できないのか、生きるためのエネルギーを人間から供給してるのか……………ん？エネルギー？そーいや、あの説が正しいなら、異次元には魔法発動に必要なエネルギーがあるんだよな……………たしか、あの仮面の吸血鬼もCAD無しで高度な魔法を使いこなしてた…まさか、だとしたらパラサイトの正体は魔法力そのもの…？…だとしたらあの異常な魔法力にも納得がいくけど……………まあ、流石に材料が足りないか…)」

そう考えながらカツサンドをゴクンと飲み込んだ龍兎が立ち上がり、教室に向かおうとしたタイミングでポケットの中のライズフォンがアラームを鳴らした。

「…まさか吸血鬼か!!……………は？」

シグナル自体はいい。だが、その位置が大問題だった。なんと、シ

グナルは一高の車両通用門から出ていた。

「取り敢えず達也たちと合流だ！急がないと！」

龍兎は慌てて階段を降り、達也たちと合流するために通用門へと向かう。そこで見たのは――

――氷漬けになった女性と、それを囲むようにいる達也、深雪、十文字、リーナ、エリカ、少し離れてほのか、幹比古、美月だった。

「…あれ？これもう終わってたパターン？」

「龍兎か。そうだ。今はまだ様子見だが」

「ええ……………」

その後話を聞くと、どうやら氷漬けになった女性はリーナの知り合いだっただらしく、彼女が例の仮面の吸血鬼だったそうだ。

「……………さすがにリーナがグル、つてのは無いだろうしね。にしてもどうし――全員伏せて!!」

『!!』

何かに気づいた龍兎の叫びで、その場にいた全員は咄嗟に屈む。直後、氷漬けになった女性が氷を突き破って爆発した。そして次の瞬間、何も無い空中から雷が幾つも落ちて来る。十文字、龍兎は障壁を展開し、エリカは素早く避けている。その障壁の中で十文字、達也、龍兎、リーナ、深雪はパラサイトについて分析していた。

「司波、何故奴は攻撃していると思う」

「意図的なものか本能的なものか分かりませんが、俺たちをこの場に留めたい理由があるようですね」

「それはつまり、逃げる気になれば何時でも逃げられる、と。随分余裕そうだね」

「少なくとも俺には、拘束する手段が無い」
「俺もだ。そもそも何処にいるのか分からん」
「……………それなただけどき、ちよつといい？」
「どうした龍兎」

龍兎は先程屋上で立てた仮説を達也に聞こえるギリギリの音量で説明した。

「……………つまり、霊子は事象干渉力そのもの、ということが言いたいのか？」

「確証も裏付けもないけど……………現にパラサイトは俺たちに魔法で攻撃してきてる。アイツらに想子を使って、しかも起動式も無しに魔法を使うことが可能ってことは、そういうことなんじゃないかな」

「……………筋は通っているな」

「取り敢えず達也。これ使ってみて」

「…わかった」

「パラサイトに効くかどうかは分からないけど、やるっきゃない!!」

【SEARCH!!】

【AUTHORISE】

「変身!!」

【PROGRISE!!】

【Weakness analyzer!!】

【スカウティングパンダ!】

【There is nothing
unknown to his eyes.】

「……………たしかに、何事も挑戦か」

【オバケ!!】

【マグネット!!】

【BESTMATCH!!】

【トンカンテンカントンカンテンカン!!】

【ARE YOU READY!】

【変身】

【彷徨える超引力!】

【マグゴースト! イエイ!】

龍兔は『仮面ライダーゼロワン：スカウティングパンダ』に、達也は『仮面ライダービルド：マグゴーストフォーム』にそれぞれ変身し、雷撃が放たれている箇所をサーチした。

「……………! (あれって……………!!)」

「(……………パラサイトがいる辺りから、想子が発生しているのか?)」

二人の目が見るディスプレイには、虚空から不自然に発生する想子がいた。

「達也! マグゴーストの想子吸引能力を!」
「!」

達也はその声に反応して左腕をパラサイトに向けて翳す。と、周囲の想子はその左腕に凄まじい速さで集束されていく。そして、それはパラサイトも例外ではなかった。

「!! 雷撃が止んだ!」

「(この場で俺たちの誰かを乗っ取るメリットよりこの場に留まるリスクを選んだ。つまり奴の弱点はあの想子の『土台』というわけか)」

パラサイトの脅威が一時的に去ったと理解して安堵する面々とは別に、本来であれば二年後に発見するはずだったパラサイトの数少ない弱点の片鱗を、この時の達也は掴みかけていた。

第34話 『Pの覚醒／少女の心』

バレンタイン

269年頃に当時のローマ教皇から迫害されて亡くなった聖職者が由来だそうだが、現代では『リア充の祭典であり非リア充の命日』とか言われることもある、敗者と勝者が決まる日である。

しかし、そこはやはり十人十色。世界中を探せば、バレンタインをそんなに気にしていない発明バカもやはりいるのである。

この男、機丈龍兎もその一人なのだから。

?????????

「ぶつちやけチョコレートは糖分補給ぐらいにしか意識してないんだよね。母さんから貰ったやつとかはありがたいけど」
「……………たまに達観してるよなお前」

昼休み、昼食の場で龍兎が放った言葉にレオは半ば呆れながら感想を言った。

「まあ、女の子と仲良くする機会そのものがそこまで無かったからだと思うけど。あと中学の時に彼女から本命チョコ貰ったってイキってたやつ居たのも原因だと思うな。『彼女できたらあんな嫌なやつになんのかな』って無意識にこじつけちゃったのかも」

「あく…そういや、そのイキリ野郎は結局どうなったんだ？」

「第一志望に落ちたせいで見事に別れました」

「ハッハッハ!!傑作だなそれ!」

腹を抱えて爆笑するレオに龍兎もクスクスと笑って答えた。

「あ、そうだ。後で達也に『今日はRインテリジェンスで仕事あるから放課後はすぐ帰る』って伝えてもらっていい?」

「おう、いいぞ」

「ああ、あと『七草先輩には気をつけて』もついでに言ってくれろ?」
「七草先輩がどうかしたのか?」

「…………今朝登校したらなんかえげつない匂い…………ていうか臭いがする靴をめっちゃ黒い笑顔で大事そうに抱えてたから、念のため」

「…………お、おう…………?」

その後、達也は龍兎の伝言の意味を理解できなかったが故に真由美の劇物チョコレートのお餌食となり、龍兎の忠告はちゃんと聞いておこうと心に決めたのだった。

2096:2?????????
15-13:07

学校中が浮ついた空気に包まれていた昨日とは打って変わり、校舎内には奇妙な困惑が漂っていた。生徒全員が関係しているというわけではない。というか大半の生徒にとっては直接関係ない出来事だ。

しかし、そんな事件にも関わらず達也と龍兎のコンビの同行者は五十里、あずさに加えて深雪、ほのか、エリカ、レオ、幹比古、美月と、二人にとっては何時ものメンバーだが、達也のクライアントはそうそうたる顔ぶれに気圧されたのか、そそくさと逃げ出してしまった。

余計なギャラリーは服部が閉め出したのだがその中に服部本人が含まれているのに、エリカやレオの同席を認めている辺り、彼の複雑な性格が垣間見える。

「取り敢えず、映像を見せて貰っても？」
「うん」

異変が起きたのは午前七時。ロボ研のガレージに保管されていた3HタイプP94、通称「ピクシー」が外部からの無線通電によりサスペンドから復帰した。ヒューマノイド・ホームヘルパー、略して3Hと呼ばれる家事手伝いロボットには内部電源による再起動するタイマー機能も備わっているが、燃料電池の負担に備えて起動時には外部電源を使う事が推奨されている。

生徒が登校していないこの時間にピクシーが目覚めたのは自己診断プログラムの実行に伴うもの。3Hの使用マニュアルでは、毎日本格的な稼働前に自己診断プログラムを走らせる事が望ましいとされている。一般家庭ではそこまで守られていない手順だが、モニターを兼ねてP94を貸与されているロボ研ではマニュアルの全事項が忠実に守られている。

自己診断の状況は遠隔管制アプリケーションをインストールされたサーバーで自動的にモニターされ、機体はガレージ内のカメラで異常な挙動が見られないかどうか監視されている。自己診断プロセスは異常を発見することなく完了してプログラムを終了し、3Hは再びサスペンド状態に戻る——はずだったのだが、異常の無い筈の3Hが仕様の通り機能を停止しなかった。自己診断プログラムを終了後、P94はサーバーと交信を始めた。アクセスしたのはなぜか一校の生徒名簿。それを認識した遠隔管制アプリはマルウェアに感染した可能性が高いと判定して、P94に強制停止コマンドを送信した。これが軍事用機械なら遠隔コマンドをシャットアウトする装置が組み込まれていたりするが、民生用機器にその手のハードウェアが組み込まれる事は絶対がない。もちろんP94もそのようなハードは搭載していないため、安全に動作を停止するシークエンスに移行するため完

全停止まで時間が掛かるといふことはあつても、コマンド自体を無視することはありえない。にも拘わらず、ピクシーは機能を停止しなかつた。

サーバーに対するアクセス要求はその後も続き、サーバー側が無線回線を無理矢理閉じる事で漸くP94の異常な稼働は止まつた。

そして異常稼働の間ずっと、ピクシーが嬉しそうな笑みを浮かべていたのを監視カメラが記録していたそうだ。

「……………取り敢えず分解バラします?」

どこからかレンチを取り出した龍兎に、五十里は否を返した。

「いや、P94のログも見たんだけど、強制停止コマンドは確実に受信されていた。…信じがたい事だけどログが間違つていないとすれば、強制停止コマンドはP94の電子頭脳内で実行されていたんだ」

「……………エレクトロニクス的には停止したはずのP94が稼働を続けていたのは、電子頭脳以外の何かから発せられた電子的なコマンド以外の信号で機体をコントロールされていたから。そしてそれは、想子波そのものか、想子波を伴う魔法的な力だ、とお考えなんですね」

「さすがは司波君、その通りだよ。甘楽先生はそう仰っていたし、僕もそれ以外に説明はつかないと思う。取り敢えずピクシーをチェックしてくれないかい?」

「分かりました、診てみます」

少しがっかりしてレンチをクルリと掌で回し、腰にしまう龍兎を横に、達也はピクシーの前に立った。

「ピクシー、サスペンド状態を解除」

「(っ)用で(っ)ぎいますか」

「今朝七時以降の操作ログと通信ログを閲覧する。その台の上に仰向けに寝て、インスペクションモードに移行しろ」

「アドミニストレーター権限を確認します」

達也の命令は管理者権限を必要とするものであり、ピクシーの回答もプリセットされた定型反応だ。達也はピクシーの管理者として登録はされていない故、顔パスはあり得ず権限付与を示すエビデンスを提示しなければならぬ。実際達也は管理者権限を示すカードを胸ポケットにつけていたため、本来であればピクシーの視線は顔ではなく胸ポケットに向けられるべきなのだ。しかしピクシーの視線は、達也の顔に固定されたまま動かない。見つめていると表現するのが最も相応しい停滞した時間。その妙な様子に達也や龍兔、あずさだけではなく全員が「何かがおかしい」と感じ始めたところでピクシーが動いた。

「ミツケタ」

ピクシーの口が小さな音声を紡ぎだし、慎重な足取りで台車から降りると、次の瞬間、達也に向かって飛びかかった。龍兔は素早く腰からトランスチームガンを引き抜いてピクシーに向けるが、ピクシーの行動の方が早かった。

そして、達也は自分より頭一つ以上小さなピクシーのボディを正面から受け止めたのだ。

「……司波君ってロボットにまでモテるんだ」

室内を覆う沈黙を打破したのは、部屋に入って来たばかりの花音の白けたツツコミだった。

それをきっかけに麻痺していた感情が次々と再起動を始め、達也は

背中に突き刺すような視線を感じていた。真後ろからブリザードじみた怒気が送られてきている。龍兎は逆に興味深い目でピクシーを観察していた。

「……お兄様にお人形遊びのご趣味がお有りとは存じませんでした」

「兎も角まず落ち着け、深雪」

「龍兎だけにね」

ほのかから咎められるような視線を向けられるだけならまだしも、まさか妹から浮気の濡れ衣を着せられるとは達也も思っていなかった。しかし龍兎の駄洒落で少し雰囲気は崩れたので、達也は説明を口にした。

「俺の方から抱きついたんじゃないぞ。抱きつかれたんだ」

「お兄様の身体能力なら、避ける事など造作も無かったはずです」

「俺が避けたらお前にぶつかっていたじゃないか」

「それでか」

確かに避けようと思えば避けられた。それに3Hの機械的な最大出力は、誤って家具や食器を壊さないように、またそれ以上に事故でオーナー家族に怪我をさせないように平均的な成人女性以下に抑えられている。にも関わらず避けなかったのは、真後ろに深雪がいたからだ。達也ならば体重差もあるから飛び掛かれても受け止められるが、深雪だと押し倒されていた可能性が高い。

「おおっ、あの一瞬でそこまで計算してたのかよ」

「見てたら分かるでしょ、それくらい」

レオが今にも手を打ち合わせそうな声で驚きを示すと、エリカが「何を今更」とでも言いたげな声でツツコミを入れた。

「申し訳ありません、失礼な事を……」

一方、それが分からなかった深雪は、両手で口元を押さえた後、シユンと萎れて達也に謝ったが、落ち込んでいるように見えて微妙に嬉しそうでもあった。

「…そ、それよりピクシーを何とかしましょう」

あずさの言葉を聞き、達也はピクシーを台の上に寝かせた。そして龍兎は傍観モードだった美月と幹比古の方を向いた。

「ねえ美月」

「は、はいっ?」

「ピクシーの中を覗いて見てくれない? 幹比古は美月が大きなダメーヂを負わないようにガードしてほしいんだけど」

「…ピクシーに何か憑いていると言うのかい?」

「何か、とは遠回しな言い方だな、幹比古」

「この状況で憑いてるやつなんてアレ以外あり得ないでしょ」

頷いた幹比古は呪符を出して起動させ、美月は眼鏡を外してピクシーを覗き込んだ。

「……………います…パラサイトです」

その言葉で美月以外の全員が臨戦態勢を取った。

「……………でも、このパターンは…」

しかし眉を潜めある程度悩んだ後、美月は急に振り返った。

「えっ、なに?」

視線の先にいたほのかとピクシー——の中にいるだろうパラサイト——を交互に見た美月はやがて一つの結論を口にした。

「このパターン……ほのかさんに似てる」

「ええっ!？」

「……………似てる、ってことはつまり」

「はい。現在パラサイトはほのかさんの思念波の影響下にあります」

「…ええと、それって光井さんのコントロールを受けているということ?？」

「いえ、そういう繋がりで無いと思います……ほのかさんとパラサイトの間にはラインが繋がってるんじゃないかと、ほのかさんの思念をパラサイトが写し取った感じです。あるいは、ほのかさんの『想い』がパラサイトに焼き付けられた、と言うべきでしょうか」

「……………ほのか。一応聞きたいんだけどさ、昨日この辺りに来た?？」
『?』

美月が五十里からの質問を否定した後、唐突に放たれた龍兎の質問に全員が疑問符を浮かべた。

「昨日、ですか……………あっ!」

「…昨日はバレンタインデー…そしてピクシーの中のパラサイトがほのかの強い『想い』の影響下にあるのなら多分その『想い』って……………」
「……………!!ムぐっ!!」

すると何かを悟ったのか、顔を赤くしながらピクシーに飛びかかろうとしたほのかをエリカと深雪が半笑いで抑え込んだ。口を塞がれてもジタバタ暴れるほのかを二人が抑える中、突然この場の誰のものでもない声が響いた。

『皆さんの予想通りです』

ほのか、エリカ、深雪以外の全員が振り向いた先にいた声の主は、ピクシーだった。